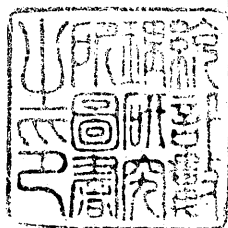


日本における統計学の発展

第 37 卷

話 し 手 上 杉 正 一 郎

聞 き 手 広 田 純
 三 渚 邦
 伊 藤 一
 山 田 介
 田 沼 肇



1981年11月22日(日), 12月12日(土), 12月26日(土)

上 杉 宅 に て

1/9
25606

ま え が き

- 1) この速記録は、昭和55、56、57年度文部省科学研究費総合(A)によるもので、研究者は次の通りである。

江見康一、丘本正、大屋祐雪、坂元慶行*、鈴木雪夫、竹内清、西平重喜*(代表者)、野沢正徳、広田純*、藤本熙、松下嘉米男、松田芳郎*、三瀦信邦*、森博美*、山元周行(* 推進係)

- 2) インタビューの聞き手としては、研究者以外の方々のご援助を得た。その方々のお名前は、別巻を参照のこと。

- 3) この速記録の原本は、統計数理研究所図書室に登録保管される。そのほか、話し手と聞き手及び関係の協同研究者が保存する。

- 4) この速記録の利用に制限はつけないが、話し手、聞き手、研究代表者または推進係と話し合った後にされるよう希望する。

- 5) 速記録を個人的に研究するため、コピーを希望する方は、代表者がコピーしやすい形で保管しているので、それを利用することができる。

以 上

広田 きょうは第1回ですから、上杉さんのいままでの
ご経歴に沿って、時期的にいろいろなお話を伺いたいと思
います。

まず最初に、生い立ちということですがけれども、お生
まれになったのは大正元年の8月4日ですね。場所は、
この下馬のお家ですか。

上杉 生まれた場所は、動態統計ではどういうふうに決
めているか、(笑) 知らないのですがけれども、私はめんど
うくさいから、「東京生まれ」とこのごろ書いているんで
す。母の実家が長崎にあつたので、長崎へお産に帰って、
赤ん坊の首が動くようになってから、船で神戸まで帰っ
て、それから汽車で東京へ来たらしいです。そういうと
き、長崎生まれというのですか。(笑)

三瀬 出生届けはそうですね。出生の場所は、病院を書
くから。

上杉 東京の病院に千葉県や埼玉県の人がやってきた、
て、みんな東京生まれになっちゃうわけだね。

広田 厳密に言えば、出生地は長崎、ということになる
わけですね。

上杉 何か調べがあると、初めは私はそういうふうにい
っていましたがけれども。母の実家が、長崎の三菱造船所
の技師だったので、神戸へ転勤してきて、東京へも来ま
したから、実家も一緒ですがけれども、私の生まれたころ
は、長崎の技師でした。

広田 ご両親の住んでおられたところは、ここだったわ
けですか。

上杉 いや、ここじゃないです。小石川の大塚です。

広田 ここへは、いつごろ越されたんですか。
 上杉 昭和10年の天長節だそうです。
 広田 じゃ、そう古い話でもない。
 上杉 ぼくが、もう大学に行っていたころだな。
 広田 お父さんが上杉慎吉、お母さんが-----。
 上杉 信子といいました。
 広田 ご兄弟は何人-----。
 上杉 いま生きているのは7人です。
 広田 上杉さんがご長男ですね。2番目が重二郎さん。
 3番目が-----。
 上杉 弥三郎。渋谷の東北寺という禅宗の寺の住職をして
 います。
 広田 それは、ご親戚か何かにそういうのがあったわけ
 ですか。
 上杉 そこは親戚でなかつたんですけれども、私の家は、
 もともと禅宗じゃないんだが、禅宗のお坊さんで父の友
 達みたいな人がいた。静岡にある清見寺という寺です。
 そこへ父は学生を連れていったり、私どももたまに連れ
 ていかれて、禅宗に比較的なじみがあって、私も、観音
 經ぐらい読んでいました。
 坊さんになつた弥三郎は、東大の法学部を出て、国民
 精神文化研究所に勤めていまして、終わって、いまさら
 また勤めるのはめんどうくさくなって、戦争末期には八
 王子の何とかいうお寺に下宿していたらしくて、そのま
 ま文部省をやめて、坊主として、京都の四条あたりにあ
 る建仁寺とか、あちこち歩いていたらしい。それで資格
 を得たので、東北寺に行ったんです。それが3番目です。
 4番目が、法政の捨彦。

その次が、妹の稲子というのがあります。それは川地という家へ行きました。

その次が、聰彦。

広田 聰彦さんは、胸が悪くて、早くから入院しておられたんですね。

上杉 カリエスなのかな。骨が溶けちゃって、子供のときからびっこをひいていたもので、体操をしなくても何とかかなりそうなところを父が一生懸命探して、暁星小学校に入れていただいたんです。

広田 それで、フランス語をやられるわけですね。

上杉 それは中学校だけで終わりになっちゃったんです。高等学校の入学試験には合格したけれども、身体検査ではねられましたので。

広田 お父さんも、結核で亡くなられた。

上杉 昔は、結核性脳膜炎というのかな。

広田 年表で見ると52歳で、昭和何年でしたか。

上杉 4年4月7日。親不孝で、生まれた年は覚えていないが、数えの52で……。

広田 だから、当時としても、少し早死にですね。

上杉 ひどく早死にですね。

広田 上杉さんも、結核をやられたわけですね。

上杉 手術は戦後ですけども。

一番下に妹がいます。

広田 上杉さんのお父さんは、大正、昭和期の日本の思想史には、必ず名前が出てこられる方なわけですが、お家で息子さんとしてごらんになって、どんな思い出が残っていますか。

上杉 子煩悩といわれるんですが、それはものすごく子

煩惱でした。ただ、恩恵の受け方は違いましたけれども、上の方は、たとえば講演に行くというと連れていってもらったり。そんなたびたびではないけれども、大ぜいいるから、1人当たり当たるのはめったにない。私は、九州と四国の講演旅行に2回ついてい、たかな。北海道に連れていってもらったのもいた。

こわいという感じは、兄弟だれも持たなかったように思いますね。かんしゃく持ちだったといいますが、私は別にあまりそういうことは見なかった。やっぱり忙しい人で、そんなにはどうこうということはないですけれども。ばくが小学校1年に入、たときに、大塚の家へ引、越したわけですが、大塚の家の隣は皇族の墓地で、豊島岡御陵というのがあった。護国寺、陸軍墓地とか雑司ヶ谷の墓地、あたりは墓地ばかりですから、お隣が墓地だというところで、安かったから行ったんでしょうけれども、雑司ヶ谷に鬼子母神なんていうのがあって、ああいうところへ散歩というか、よく連れていってもらいました。

あのころは、東京はそういうところがあったんだが、荒川のお台の渡しに行ったり、上野へ行ったり、飛鳥山へ行ったり。そういうことはしましたけれども、特別に家で何かした——しかられたこともあまりないし……。
 広田 私は、年表程度の知識なんですけれども、東大で新人会に対立して、国家主義、国粹主義の七生社という人ですか、そういう学生が、上杉さんの小さいころ、お家へ出入りしたことありますか。

上杉 ありますね。乱暴を働くような人は来なかったけれども、後で、たとえば血盟団に加わったりした人がい

るんです。どちらかというと、あまり変わりのない普通の
 人を、われわれは覚えています。

広田 ある意味では、まじめな人間の集まりだったのか
 もしれないと思いますが。

上杉 その思想をどうこうというんじゃなくて、当時で
 も、先生の家へ預けておけばという親もいるんですね。
 そういう人は、だいぶ亡くなりましたけれども、まだつ
 き合いのある人がいます。

父の一番年の近い最初の教え子——といって、何も学
 んだんじゃないらしいけれども、「稲葉さん」とわれわれ
 が呼ぶ人がいて、この間、文部大臣をやっていた新潟県
 選出の稲葉修の長兄。

広田 法務大臣もやっていた。

上杉 9人男兄弟だそうです。その長男。90ぐらいま
 で生きていたけれども、ほとんど勤めたことのない人で、
 家へ来て、泊っていて、碁を打ったり何かしていた。

「先生、先生」といって、父の世話をよくされた。

広田 その人の名前は……。

上杉 稲葉一也。その後、名前を変えて圭亮。その人は、
 家へよく出入りしていた人の一番年上の人です。いい人
 でした。

広田 大学での法学部の教授間のことだとか、そういう
 ようなこと、お家で話されました？

上杉 私たち、自分の経験と比べますと、わりに円満だ
 ったようですね。たとえば美濃部さんと一緒に、芝居を
 見に行ったこともあるようでした。三渚君のお父さんも
 おられたわけですね。

広田 三渚何といわれたの。

三瀬 信三。

上杉 特におつき合いがあったというほどじゃないですね。

三瀬 そうかもしれません。早く、現役で亡くなられたわけでしょう。

上杉 同僚で親しくしていただいた方は、中田薫先生。野村淳治、小野塚喜平次、杉山先生などの諸先生のお名前もよく出ました。一番親しくして、心配してくださったのは、中田さんですね。その方は、私がいろいろひかかった後、私についても大変心配してくださった。

うちの母が、塩ナスビをつくるのがうまいというので、先生方、塩ナスビを譲ってくれということがあったのを聞いたことがあります。そういう関係というのが、昔はあったんですね。

うちの母にいわせると、父が洋行している最中に、ちょいちょい宮中の何かの会があって、観桜会とか、いろいろあった。河上肇先生の近くにすわっていたんだというんだけど、それをどなたかに聞いたら、そんなことあるものかといわれた。本当か間違いか、私には確かめようがない。大学の空気は、概してそんなだったんじゃないですか。学校については、あまり知らないです。

広田 昭和4年に、結核性の脳膜炎ですか。

上杉 当時のことで、そうはいわなかったようですね。

何といったのか知りませんが、臨終の床に行っていて、脳膜炎って頭が痛いものらしいのね。ベッドからころげ落ちるようにして苦しんでいたのを、見たこともあるんです。

話というのは、間違いやすいものだと思うのは、脳い

っ血で死んだんだということを書いていらっしゃる方もありますね。ほかのことは、いろいろ意見の違いもあるから、観察も違うんでしょうけれども、単なる事実も、かなり自信を持って語られると、うそが残るように思いますね。

広田 全くそのとおりです。後の人はそれを写しますから、次から次へ印刷されて、権威を持ってきますね。

上杉 間違いを根拠づけるから、話がおもしろくなってくると思います。脳膜炎というの、私が確めたわけじゃないからね。(笑) きっぱりと答えると、本当に聞こえる。インタビューの泣きどころでしょうか。

広田 中学は、どこの中学へ行かれたんですか。

上杉 東京高等師範の付属中学校。

広田 そのころは、どういう生徒だったんですか。普通の優等生だった？

上杉 優等生にしては、上じゃなかったらしいけれども、まあ、普通でしたね。体はやっぱ弱かったから、体操の先生なんか長年よけて通ったけれども、サッカーはよくやりました。バスケットをやったり、いろいろしました。走るのはそう速くないけれども、組の選手ぐらいにはなって、体が弱いわりにスポーツをしていたと思います。

広田 そのころの学友で、特に覚えておられるような方、ありますか？

上杉 中学校では、大体覚えていますし、5年間同じ順で名前を呼ばれたから、名簿は14～15人までは順番に覚えています。つまり、お互いがわりに親しい関係にあったんですけれども、特に名の出に――。

広田 あそこは、今日のいわゆる進学名門校で、一高な
んかへわんさ行ったんでしょう。

上杉 第1位ではないけれども。

広田 府立一中ほどではない。

上杉 かたまって、一高の文科乙へ行ったのには、私が
入ったときは7~8人入って、人数からいうとトップで
した。

広田 それは、どういうわけでドイツ語の方へ……。

上杉 それはどちらがいいと希望したわけだ。

広田 付属でドイツ語をやっていたというわけじゃなく
て。

上杉 ドイツ語で受けないし、ドイツ語を何も知らなく
ても、受けられました。

中村元が1年下で、彼は4年生で高校に入って、私は
5年で入りましたから、一高で一緒になりました。

広田 インド哲学か何かですね。

上杉 あと、だれが名の通った人があるのか、はっきり
しない。

広田 お母さんは、長生きされたわけですね、亡くなら
れたのは4~5年前でしたか。

上杉 3年前かな。これは、さっきいった長崎の造船技
師の娘ですけども、早くから東京へ出てきて、東京女
学館(虎の門)へ行って、そのころとしては珍しかった
でしょうね。めっぽうかいもなく穏やかな人で、おとな
しくて、これまたしかられたことがなかった。やっぱり
兄弟が弱虫になった1つの原因ではあるんですね。鍛練
されていないから、困難にうちかつことができない。だ
けど、弱い兄弟が、ともかく生き残っているということ

は、母のおかげだと思っていますんです。

特に何を教えるということはありませんでした。それだけ育てていくのがやっとな感じですね。

広田 お父さんが早く亡くなられたわけですから、あと大変だ、たでしょうね。

上杉 私の母のまた母に当たる祖母が、なかなか勢いのいい人で、その人の奮闘ですと暮らしたんです。

父の方は、福井県のオランダ医学をやっていた医者で、一時はなかなか盛んな医者だったらしいけれども、本人がいうところによると、後は門前にクモの巣が張るような医者だった。貧乏といっても、いろんな貧乏があるからわかりませんが、貧乏だと思っていたらしいですね。

広田 その蘭医というのが、上杉さんのお父さんのお父さんですね。

上杉 上杉寛二といって、その人も長生きして、78、79かな。昔の前田藩の分藩というのかな、それが石川県の大聖寺にあるんです。そこで医者をしていたんです。

父は、家もなく、土地もなかったけれども、その弟が幾らか裕福になって、その弟のおかげで小石川の土地と家とがあって、それが弟子である右翼の人にだまされたようなか、こうで、取り上げられちゃっていて、父が死んだとき何も無い。いまになって思うと、やっぱり父の名前が遺産だったと思うんですね。

その親戚に、土地や家を買取ってもらったり、どうかして、暮らしたようです。それで飢えない程度に暮らすことができたわけです。

山田 中学時代、特に読書か何かで ご記憶に残ってい

るのがありますか。

上杉 父の、そのころの日本文学全集の黄赤色の表紙の
があった。それが応接間に置いてあって、それを取り出
しては読んでいました。特別に何を讀んだということは、
当時普通にあったものを読んでいました。

読書と関係して、順番はむちゃくちゃで済みませんけ
れども、父は精神的なことは何も教えてくれたわけじゃ
ないけれども、こうしろとか、ああしろとか、特に天皇
は尊敬しなきゃいかぬとかということ、いったわけでも
ないんですけれども、ひょっと思いついたように、本を
読むから来いというわけで、書斎へ行って読んだりした
んです。たとえば「日本外史」の平氏のところを讀んだ
覚えがある。「平氏は桓武天皇より出づ」というところか
ありますね。

それからもう一つ、橋本左内の何とかいう本で、「幼な
心を去れ」というところがあるんです。ついに去ること
ができなかったけれども、そういうことはありました。
だから、中学校のときに、漢文はかなり得意でした。

あとは、さっきの禅宗——禅宗の説教をしたんじゃない
んだ。自分が病気で寝ていて退屈するからでしょうか、
心がさびしいからでしょうか、観音經を讀んでくれ。す
ると、上の4人の男の兄弟で、観音經を讀んだりしまし
た。

そのほか特別には、何しろ親の教育が生ぬるいという
ので、乱暴な弟子どもが、鶏を放つからそれをつかまえ
ろとか。(笑)はし一本で鶏を殺すことができる人がいた
んですよ。家の庭は墓地の真ん中にはさまれていて、200
坪ぐらいありました。そこで兄弟でサッカーをやったり、

ブランコに乗ったりしていました。そこで鶏をやれというわけ。さすがにやらなかったけれども、そんな空気の中にいたわけですよ。

　　どういう家庭だったか、よくわからないな。

広田　上杉さんのご兄弟のことをある程度知っている人は、上杉慎吉氏の子供がそろいもそろって、世間の物差しでいうと、反対の左翼になっているのがおもしろい現象だというか、不思議な現象だというか、そういうふうを考える人が多いと思いますが、ご自分ではどう考えられますか。

上杉　みすず書房の「みすず」に出たことがあるんだけど、中江兆民の息子に中江丑吉という人がいるでしょう。北京にずっといた人。さっき話の出た稲葉さんだと思うけれども、私が初めにひっかかったときに心配して、「上杉慎吉の息子が赤くなっちゃって困っているんだけど、何か話してやってくれないか」と、中江丑吉に頼んだ話が出ています。そうしたら、「オレはその任にはたえない」と、断られちゃったんです。

　　坂谷さんというのかな、間違えているかもしれないけれども、その人によると、そのときに中江さんがいうには、自分は上杉なんて何も知らないけれども、寛(克彦)さんという神がかった人がいたんだが、何といったのか、寛さんをあまりいい言葉でいわなかった。上杉の方は純粋なんで、だいたい違うようだったというんです。

　　その後、坂谷さんは、戦後になってみると、3人の子供はみんなそうなっちゃったんで、それから見ると、オヤジは純粹だったらしいと書いているのを見たことがあります。

私は少年のころ、やっぱり父の考えは何か守らなきゃいけないと思ったことがあります。けれども、もう少し合理的にならないだろうか、そういう方の理論化をしなきゃならぬと思ったことはあるんです。

私は、父のことを書いたり、インタビューもしたことはないけれども、重二郎は何回か書いているようですね。うちの父は、子供たち全部を連れて宮中に参内するのを理想としているというようなことが書いてあるけれども、私はそんなことは聞いたことないが。(笑) そういう式のことは幾つかあるが、なかなか本当を書いているんです。それを見ると、思想は思想だけれども、いいオヤジだ、たという点では、みんなそう思っているらしい。

実際に印刷物にして、うちの父のことについて書いたのは、末の聰彦です。社会学関係の原稿と本が残っていて、それをもとにして「上杉慎吉の社会学」というのを書いているようですね。

父のことを、あまりいいかげんのように思わなかった。それを継ごうという人はいないけれども。

広田 純粋な方だったんでしょうね。

上杉 そんな感じですね。

広田 少なくとも俗物ではなかったんでしょうね。

上杉 まあ、そうでしょうと思いますね。

もう一つは、同じそういう考え方を話すにしても、やはり大衆感情がわかっていたんではないかと思いますね。私も中身をよく覚えていませんけれども、「起てよ、無産の愛国者」なんていうパンフレットがありました。「無産の」なんてつけるところは、気を使ったというか、実際そう思っていたんでしょうね。

広田 高島素之氏と組まれて、やはり何か同人……。
 上杉 高島さんは、家へ何度か来られたように思います。
 私は顔を見たことはありませんけれども、「タカハタが」と
 いったか、「タカバタケが」といったか覚えていませんが、
 そんなことをいって話していた。手紙も来ていた。それ
 を見ると高島さんという人は、一番若いときは社会主義
 と思ったんだね。だんだんと失望して、えらく絶望的な
 ことが書いてある手紙があります。一緒にやるというこ
 とはなかったようです。

実は、あの翻訳した「資本論」は、国民がぜひ読むべ
 きだなんてことを書いたということは、河上先生の「資
 本論入門」の前書きに出ていますね。「上杉という右翼の
 学者が、『資本論』をぜひ国民が読むべきだと書いてある
 けれども、あれはむずかしくてどうせわからないという
 ことで書いたんだろう」というふうに河上先生は書いて
 おられますけれども、(笑)私は、それはちょっと違うん
 じゃないかという気がするな。やっぱり読んでおけとい
 うことだと思う。

広田 本気でそう思われたんでしょうね。

上杉 友達が訳したんだし。どういうつもりだかは、き
 りしません。

三緒 慎吉先生は、「資本論」を読まれたらしいですか。

上杉 それはさっきいったように、父の死んだときは、
 何もないときだから、本を東大へ寄付したのと、買って
 いただいたんです。だから、どんな本が残っているか、
 リストがあるわけですがけれども、私どもは小さくて知り
 ません。後で見ると、ブハーリンの「史的唯物論」なん
 ていうのは残っていました。「資本論」はあ、たんだろう

か。どうかわかりません。父は憲法をやっていたから、社会学の方へ移ろうとしていた形跡がありますね。社会学の本もかなり身の回りにあったし、書き散らしたもののとか、講義の準備ノートとかあったようです。

広田 また後で思い出したら、順序構わずにお話しただくことにして、一応これからいよいよ一高へ入って、左翼になるという方のお話を伺いたいと思うんです。

昭和5年（1930年）の4月から、ドイツ語のクラス、文乙とっていませんか。

上杉 そのころは、高等学校の学生は、全体として左へ回っていた時期ですね。ただし、一高だけはストライキがないという学校で、あとは水戸でも、静岡でも、ストライキの多い高等学校になっていました。一高は、当時運動部なんかで、やっぱり先輩が強いんですね。そういうことが影響しているんでしょう。

一高で1年目には——規則では1年目だけではないんですけれども、全員が寮に入ることになっている。寮に入ったら、運動部は別として、理科も文科もごったまぜになるんです。そこには伊藤律がいたり、永田武という南極探検隊長がいたり、おもしろいのが何人かいました。

広田 伊藤律とは、学校のクラスは違うけれども、寮の部屋で一緒にあった。

上杉 1年生は。

広田 それは、どこかの部に属しての部屋ですか。

上杉 部じゃなくて、一般部屋。

広田 そのほか、どういう人が特に記憶に残っておられますか、同じ時代で。

上杉 当時、思想事件でひっかかって処分を受けたのは、われわれのクラスにもいました。

広田 戸谷敏之という人は――。

上杉 あれは知らなかったけれども、私がこういうふうになったきっかけになったのは、戸谷君の事件ですね。それは3年だから、これから後の話です。

農林省の統計調査で近藤先生が局長だったときに、官房長をしていた大沢融君も、同じ学年でした。

広田 先生で、特に親しくしていたような方はいらっしゃいませんか。

上杉 受け持ちでは、菅虎雄というドイツ語の先生。夏目漱石の友達で、「芥川はよくできた」なんていう先生で。ほのぼのと心温まる先生でした。

要するに高等学校というところは、ドイツ語ばかりやっていたんですね。あとは自治会みたいな総代会というのがあって、いまほど激しく殴り合わなかったけれども、やっぱり――。

広田 上杉さんは、ずっと3年の終わりまで寮に入っておられた？

上杉 いえ、1年だけです。2年になって新学期始ま、たと思ったら、チブスになって、半年ほど休んだんです。それを機会に、あんまり行かれなくなってます。

広田 マルクス主義に近づいていかれたのは、どういう契機ですか。

上杉 高等学校は、そういうことなかったように思っています。いま話しかけたのは、文乙というクラスは、つまり進歩的なふうになりましてけれども、3年までの間で、政治活動が激しいということじゃなかった。あの

ころのことですから、文科甲類なんかでもたとえば2組
 なんかは、半分ぐらい処罰されたクラスもあります。私
 どものクラスは、満州事変が起きると、これは正しくな
 い戦争だということでは、みんなほぼ一致するけれども、
 それじゃといって、どこかへ行っ、て何かするというこ
 とはあまりなかったですね。退学にな、たのが1人いる。
 広田 いまの3年にな、てからの戸谷さんの事件とい
 うのは、どういう事件ですか。

上杉 それは3年とい、っても、卒業式の後の事件なん
 ですよ。東大の経済学部の試験も終わ、て、戸谷君も合格
 したとい、うときにな、て、思想事件に加わ、っていたとい
 うのがわ、かって、さかのぼ、って処罰されたんですよ。東
 大合格がちゃんと確実に発表されているのに、一高が戸
 谷君を退学処分にした。それでみんなが憤慨して、私も
 ノンポリでしたけれども、憤慨は一緒にして、校長の部
 屋へ押しかけたことがあるんです。それが出発点かもし
 れないですね。特に何を読んだと……。

広田 それが、昭和8年の3月ですね。

三猪 校長はだれですか。

上杉 森巻吉という人です。そのときに、何人か大ぜい
 押しかけたけれども、戸谷君は文甲だったから、文甲の
 人が大ぜい行、ったんです。私は文甲の友達に誘われて、
 一緒に行、ったわけ。や、ぱり何かしゃべ、ったような気が
 するな。何しゃべ、ったか覚えていない。

広田 戸谷さんは、その前から、どこか組織に入、てい
 たとか、そういうことだったわけですか。

上杉 それはわからないんですけども、何も組織に入
 った人が処罰されたんじゃないで、機関紙をもら、て読

んでいたとか、R. S. (リーディング・ソサエティ、読書会) をやっていたとかいうんで、みんな処罰されていた時期ですから、組織のことはちょっとわからない。

田沼 戸谷さんという方は、結局どうなったんですか。

上杉 法政へ入って、大塚久雄さんと、もう一人、農業史の……。非常な勉強家で、ああいうのがやっぱり研究者だという気がしますね。とうてい及ばないね。

田沼 早く亡くなっちゃったんですね。

上杉 フィリピンだからで戦病死。

田沼 平沢という人も、海軍で死んだんですか。

上杉 フィリピンかな。これも優秀な人でした。戸谷君は、飛び抜けて「資本論」もよく読み、全くよく理解して、日本の農業問題をいろいろと、かなり具体的によくやっていた人ですね。昨年も戸谷君の追悼会があったぐらいで、その人が追い出されて、合格した東大も入れなかったんで、みんなが憤激したわけです。私もそれに巻き込まれたといえ、巻き込まれたんです。戸谷君のことを、そのときはまだそんなに知っていなかったですけども。

広田 その事件自体は、どういう経過をたどるんですか。

上杉 やっぱりあ、ちのいうとおりになった。

広田 許されなかったわけ。それをけしからぬといってプロテストした人たちは、それでしようがないということになったわけ？

上杉 なったようですね。

広田 で、上杉さんは、東大の経済学部へ入られたわけですね。

上杉 入った年が滝川事件。末川先生のいうところによ

ると、「滝川事件」というのは不正確で、「京大事件」というんだというんです。

広田 京大の法学部の教授全員が辞表を出して、その中のしっかりしたのだけが首切られて、あとの人は残ったという事件ですね。

上杉 そのころでも、滝川さん自身にも、あんまりいいことをいわない人もいましたね。滝川さんがもうちょっとしっかりしていたらという意見の人もありました。「滝川事件」でなきゃ、普通通らないけれども、末川先生は、「京大事件」というんだといって-----。

私が東大に入って、1カ月ぐらいたったときに起きたのかな。そのときは、私はもちろんどこの組織にも属していなかったが、一高代表の1人でした。

広田 どういう活動ですか。

上杉 学生大会をやった。そのころは、経済学部が一番強いですから、佐藤弘という経済地理の先生-----。

三渚 一橋。

上杉 その先生の授業のときに最初に1回やって、「ストライキも辞せず」と演説するのがたくさんいて、それは何事もなく終わったんです。抗議集会をやって、つかまりもせず、どうということもなかった。

広田 それが、いつごろでしょうか。

上杉 5月でしょう。

広田 法学部の全教授が辞表を提出したのが、5月26日ということですか。

上杉 そのちょっと後ぐらいかな。第2回目は、六月二十何日、それは経済学部、法学部、文学部と、大きな教室で美濃部達吉先生が憲法の講義をしているときに、そ

こで大会を宣言して、やっ たんです。そのときに大量につかま ったわけ。

広田 年表では、「ワ・ノ闘争」といって、京大生、東大生なんかが全国の大学に呼びかけて、大学自由擁護連盟を結成した。それで当時の「アカハタ」なんかに「ワ・ノ闘争に結集せよ」というようなのが出ているらしいんです。

上杉 知らないな。京大が地元だから、京大が活動したことはよく記録に残っていると思いますがけれども、強さは東大の方が強かった。学内で委員会みたいな集会ができなくて、小石川の植物園へ行っ て秘密集会をやっ たこともあります。

田沼 25番教室か36番かでビラをまいたという話も、前に伺ったような記憶があるけれども。

上杉 アーケードでね。それは翌年、共産青年同盟に入っ てからだと思います。

広田 共青に入られたのはいつごろですか、もしお差し支えがなければ……。

上杉 それは差し支えないです。(笑)7月になったら、夏休みになると学生が家へ帰っ ちゃって、何と云ったって少数ですから、少数の人が宣言して大会をやると、みんな反対はしないけれども、そう積極的に力になるほどしてくれるわけじゃない。8月ごろ、佐野、鍋山の転向声明というのがあった。どうしてそこがおかしいか、研究しなきゃいかぬというので、研究会を経済学部が学生が持ちました。そのころ指導していたのが、あるとき明治神宮の外苑を歩いていたときに、こういう団体があるけれども入らぬか、それは入ろうと云って、私は入った

んです。

広田 それは東大生ですか。

上杉 東大生です。そのころは、「資本論」も読み始めていたころかな。私はあまりプロ小説は読みませんでした。順番はめちゃくちゃでしたね。野呂栄太郎の「日本資本主義発達史」が本屋へ行ったらおもしろそうだったからあれから読んでいました。

広田 経済学部教授といますか、講義は、出られたものはあるんですか。

上杉 有沢先生とか大内先生、矢内原先生の「満州問題特別講義」は非常に人気がありました。満州事変は帝国主義戦争であるてなことをいうから、当時としては、みんな満足していた。(笑) それでやっぱり憲兵だとか警察の人が来て、聞いているんですね。矢内原先生はきわめて戦闘的で、そういう方がいらしたら、後でいうんじゃないで、いまいってくれというようなことをいって-----。

あと、山田盛太郎先生とか、平野義太郎先生、みんなもういらっしゃらなかった。

有沢先生の時間は、統計学をおもしろいと思って聞いていたようですけども、それより有沢先生の時間は、共産青年同盟の東大細胞の「赤門戦士」という機関紙があって、それが教室で配布される日なんで、わりによく出ていた。(笑)

広田 山本二三丸さんが、「いっも上杉から新聞を渡されていた」といっていましたが、そういう機会なんですね。

上杉 覚えてないんだな。私は、事務係というんですけど、「赤門戦士」というのは、編集に偉い人がいて、印刷も

いて、あとは配るのが大変ですから。しかもどんどん負けて人数も少なくなる時期ですね。私が初めて入ったころは、「プロレタリア科学」が400部の予約があって売っていたんですね。それがほとんどなきに等しい状態になる。その落ち目のときにいましたから、事務係もなかなか厄介でした。滝川事件が始まる前につかまっていた、私どもが引き継いだ後は、減る一方でした。

それから、やっぱり学生消費組合の運動とか、帝国大学新聞社だとか、セツルメントとかで……。

広田 社会科学連合会とか、新人会とかいうものは、もうそのときには東大にはなかった。

上杉 ありませんでした。

広田 「学生テーゼ」とか「新学生テーゼ」とか、その当時呼ばれたらしいですが、そういうご記憶ありますか。共産青年同盟の何かの論文で。

上杉 それは、覚えてない。32年テーゼの翻訳というのが出始めていたんじゃないか。薄い紙に書いてあって、それを配ってつかまった人だけでも、学連というのは知らないです。

広田 そういう活動に加わったのが、何月ごろでしたっけ。

上杉 滝川事件から始めるとすれば、5月からですね。それは、私は団体に所属していない時点です。

広田 経済学部は、経友会というのがそのころありましたか。親睦団体ですね。

上杉 ありましたけれども……。

広田 それとは別に、滝川事件のときに、高校別代表者会議ができたわけですね。

上杉　そうです。

広田　上杉さんのやっておられた活動は、主としてほかの学生に新聞を渡すとか、働きかけるとかいうことですか。

上杉　学部ごとに責任者がいて、私は中央からもらってきて、文学部に配ったり、理学部に配ったり……。

広田　全体の仕分けをして。大学以外のところで、何かやられたことはありますか。

上杉　大体私はないんですが、ことに東大は1つの単位になっていたせいか、あまりよそで活動することがなかったみたいですね。

広田　そうして、いつつかまるんですか。

上杉　昭和9年（1934年）の2月。

広田　翌年の2月ですね。それは向こうがマークしていて、渡すところを現場で……。

上杉　いや、そうじゃなくて、私は実際のんきだったんだな。この近所に来たとき、そこを襲われた。来やすいところなんだから、あたりまえですね。そこでつかまりました。

田沼　隠れていたわけね。

上杉　隠れていたんじゃない。そのときは別に、当時の言葉でいうと、「もぐって」はいなかった。のんきだったんですね。

広田　どこの署ですか。

上杉　京橋だとか、水上署かな。

広田　本富士が来るんじゃないんですか。

上杉　本富士が来るときもあつたんですけども、私のときは、幾らか特別の配慮があつたんでしょうね。それ

がつかまっただなんていうと、あっちはぐあいの悪い点もあるんじゃないかな。それで私はペンネームを「上松」とかいってあっちでつけられた。(笑)

京橋署は、コーヒーのにおいと、水の腐ったにおいと、両方覚えているんで、京橋にいたことは覚えています。水上署は、たぶん2回目のときだったような気がするな。広田 2月につかまって、どのくらい入れられた……。

上杉 1回目は、私はあんまり殴られたりすることはありませんでした。ただ長く置かれて、5月から6月ごろまでいたんじゃないかな。

広田 1年のときの試験は、受けられなかった。

上杉 受けられませんでした。あの当時、受ける気もなかった。

広田 それで出てきて、また自宅へ帰られたわけですね。もぐった生活じゃなかったんですね。

上杉 普通に帰った。

広田 それで、やはり前と同じような活動をしておられたわけですか。

上杉 それほど活発ではありませんでしたけれども、やっぱり読書会もあったし、「赤門戦士」という機関紙を配ってはいましたね。それでまた翌年の2月につかまっただんです。

広田 昭和10年の2月にね。試験の前になるとつかまる。(笑)

上杉 それはかなり長くて、7月まで帰れなかったですよ。

三渚 向こうから見て、つかまえる理由はどういう理由なんですか。非合法……。

上杉 やっぱり、ぼくがいろいろと集まりを持っている
というんでしょうね。

三渚 それは、何にひっかけるわけですか。

上杉 治安維持法。起訴猶予。

三渚 2度とも、治安維持法ですか。

上杉 そうです。

田沼 そのころ一緒に活動していた人で、名前を覚えて
おられる方は-----。

上杉 今井正とか、牧瀬恒二君、いまお医者さんで活動
している益子義教、アメリカ史の菊池謙一。

田沼 宇佐美さんは？

上杉 入っていたのかもしれないけれども、私は知りま
せん。私より1年後に入学したんじゃないですか。

田沼 彼は相当拷問を受けていたんだ。

上杉 平沢君なんかと一緒に後で-----。経済学部には、
まだいろいろいますね。藤本君とか-----。

田沼 松川七郎。

上杉 松川七郎さんは、私よりだいぶ先輩だから知りま
せんでした。大橋隆憲君も先輩で-----。

広田 当時は、ご存じなかつたんですか。

上杉 知りませんでした。

「赤門戦士」も117号かな、終わりまで取っていたん
ですけれども、戦争末期に焼かざるを得なくなった。あ
れがあれば思い出すことが多いんですけども-----。

広田 復刻はされていないでしょうね。東大だけのもの
ですね。

上杉 でも、相当よく歴史を語るでしょうね。警察のど
こかにまだあれば別ですけども。

山田 それは共青の機関紙ですか。

上杉 ええ、共青の東大細胞。全国的なのは、また別の
があったようです。そのころは弾圧でばらばらになって
いて、全国的な新聞は、私はほとんど見たことがないで
す。東大だけは、自分の機関紙を持っていたから、
それを教室で配っていた。授業が始まると、両側に配っ
ていく。有沢さんは、本に書いてありますね。教壇から
見ると、サラサラと流れていく。(笑)

広田 共青の全国の委員長は……。

上杉 それは知らないな。

「赤門戦士」は、大体原則は裏表の2ページだったん
ですけれども、第100号記念は4ページにしたことがあ
って、そのときには私もいて、「インターナショナル」の
楽譜を印刷したんで覚えているんですよ。これだけはみ
んなとっておいてもらおうというわけで、したんだけれ
ども、やっぱりダメでしたね。

統計でいえば、津村さんも関係者だそうですね。

広田 共青のメンバーですか。

上杉 理学部じゃほとんどいませんからね。絶対平和主
義者だそうで、共産青年同盟員かどうかはわからない。

広田 2度目につかまっていたのは、10年の2月から7月で
出てこられて、京大はまだですね。

上杉 7月に出てきたんですけれども、2年も試験を受
けられなくて、処分されるころまで行かなかった。処
分されるとまずいからというので、さっきお話しした法
学部の中田先生が私を呼ばれたんだっただか、母を通して
いったのか、処罰されるといけないから学校をやめたら
どうだ。私は、そのことをあまり深くも考えませんでしたし

たけれども、学校へ出ていく気がなかったものですから、2度も試験を受けないし、じゃ、そうしようといっ
て、7月になって、その年(10年)の3月末日付で退学
したんです。

広田 そうすると、2年間在学していたということにな
るわけですね。

それから京大に入られるまでの間に、何かまたありま
したか。

上杉 あまり活動しなかった。翌年の11年になって、2.26
事件の後、私の遠い親戚で京都の人が来た。その前に私
は、本気に変なことを考えていたわけだけれども、印刷
所の工員の募集が渋谷にあって、大学へも行きそうもな
いから、ここへ入ろうと思って手続したことがあるんデ
す。それはダメになったんだけれども、そういうことが
あるということ、その親戚の人が聞いて、オレに任せ
ないかという。2.26事件のとき来て、赤坂でとじ込めら
れたり何かして、その後、会おうというので会ったら、
任せろというから、間もなく京都へ行ったんです。蜷川
先生を紹介するというんで、研究室でお会いしたことが
ある。あのころ、入学試験というのなかったのかな。

三楮 また1年に入られたわけですか。

上杉 1年に入った。11年4月入学です。

広田 蜷川さんを知られたのは、その前からご親戚の方
が紹介……。

上杉 2〜3カ月前にね。入れてもらうように、前に話
してあったんじゃないかな。私はお願いに行って、先生
から何かいわれて、覚えています。

広田 じゃ、そのころ、必ずしも統計学をやろうという

お気持ちじゃなかった。

上杉 全然ありませんでした。(笑) お断りする気もなかった。何も知らなかったから。蜷川先生は、とにかく大学出なきゃダメだよというわけで、入ったんです。

広田 蜷川さんのゼミに出るようになったのは、2年になってからですか。

上杉 たぶん、そうだったと思います。

広田 京大では、どういう人と一緒だったですか。内海さんとか、大橋さん……。

上杉 内海さんはだいぶ上だもの。内海さんは大学院だから。大橋君とは、産業組合研究会という研究会で一緒だった。朝野勉だとか、そういう人で、「資本論」の研究会もやったりしていました。

伊藤 岡部利良さんは？

上杉 岡部さんはかなり前の先輩だもの。あの人たちはみんな大学院でした。経済学部的时候は、木村太郎君とか、一緒だったんだな。ほかの学部の哲学者だとか、国史とか、農学部とかいますけれども。

三緒 蜷川先生にご親戚の方の紹介で会われたというのは、上杉さんにとって決定的ですね。そのご親戚の方は、蜷川先生とは……。

上杉 京都一中のときに教わった人だから。蜷川先生は「法制経済」か何かで、中学校へアルバイトに行かれたんじゃないですか。そのときに生徒だった。で、いい先生だと思ったんでしょう。

広田 蜷川ゼミに入られる前は、1年はいろんな講義を普通の学生として聞かれたわけですか。

上杉 統計学というのは、1年でやるんだったかな。い

まみたいに教養とか何とかないですからね。大徳寺に下宿していたんですけども、「資本論」なんかわりによく勉強していましたが、自分でいうのも変ですけども。

蜷川先生の統計的規則性とか何かに関連して「剰余価値学説史」を読んで、先生のところに1晩議論を吹っかけに行ったことがある。わりに気楽——いろいろ政治活動はないし、京都大学のそういう学生たちは、文学部はかなり多くて、経済学部のような組織性が足りない。バイオリン弾いて集まって、というふうでしょう。1日1回喫茶店へ行かなきゃ気が済まないというやつがいたり。私のことを別格扱いにしてくれて、東大でいろんなことがあったし、うるさいから、あなたには呼びに来るまで来るなというので……。

広田 あまり危ない任務を与えられなかったんですね。

上杉 ピクニックでもすると、大文字山へ行くから来いとか。

広田 やっぱり、それも共青ですか。

上杉 共青ですね。その派が、そのころ共青の中に、京都中心に多数派というのがあったでしょう。何という人だったか、分派だというのでやられた。その勢いは、京大の学生は多数派の影響をかなり受けていました。一口に言えば、私あまり何もしないで、幸いなことに「資本論」を読んだり、お寺で本を読んでいることができたです。

それでも、一遍つかまったことがあります。

広田 1年のときですか。

上杉 3年かな。

広田 じゃ、それはもう蜷川さんのゼミに入って……。

上杉 蜷川先生はやかましく注意された、東京へ行って
も大内さんに会うな。会うと、いまは危ないから。私は
大内さんと、ある程度連絡がありましたから。

広田 それはどういうことで――。

上杉 大内さんがつかまったころですから。京都でも、
あまり危なっかしいところへは寄らない方がいいよとい
う注意をされていました。

広田 大内さんが、13年初めにつかまりましたね。

上杉 12年ごろだったかな。私は、京都と東京の間を比
較的に頻繁に行き来しましたから、警察はそのことを後
でうるさくしていました。おまえ、連絡取っていたんだろ
うって。

広田 京大でつかまったのは、昭和13年につかまった――。

上杉 つかまったら、呼び出しで、2週間ぐらい行っ
たり来たりさせたのかな。それは何でもないということ
になったんです。

大学卒業後、一遍つかまりました。(笑)

広田 それはいつごろですか。

上杉 昭和16年。

広田 16年といいますと、14年に大連市へいらっしゃる
わけでしょう。

上杉 14年に行って、15年の3月にその市の調査局が解
散になって、帰ってきたんです。

広田 帰ってきて、16年にまたつかまった。

上杉 15年の3月に帰ってきて、その4月に結婚した。
その翌年、16年1月に子供が生まれて間もなく、私だけ
京都にいたんですが、つかまりました。

広田 そのときは、特別な職には就いておられなかっ、たわけですか。

上杉 大学院にいたんです。

三猪 すると、間があくわけですか。

上杉 あくわけです。

広田 大連に行っ、て、1年で帰っ、てきて、京大の大学院にいて。

上杉 大連には、事業調査局というのができたんです。

そのころは、あそこの市域外は市長がやるのかな。その人は、京大の神戸正雄先生に頼んで、蜷川先生を事実上のキャップとして、調査組織ができたんです。それで14年の3月から15年3月まで、1年でつぶれたものですか。15年の夏に近いころから大学院に入った。

三猪 退職なさって-----。

上杉 調査局が解散して-----。退職になったわけね。

広田 事業調査局というものがなくなったわけですね。

じゃ、事業調査局へともかく1年間でもいらっしや、たというのは、蜷川さんとの関係があったわけですか。

上杉 私は、いま考えると横着なもので、就職のことなんか自分でちっともよく考えないで、先生、大学かどこかへ入れてくれないかといったら、そう急にいったってないんだ。ちょうど運よく調査局ができたので、蜷川ゼミの人だけ、岡部さんとか、有田正三、私と-----。

広田 その大連市事業調査局では、どういうお仕事をやられたんですか。

上杉 関東州工業の調査というのをや、ったんです、旅大地区の。それは全く1人でやるんだから、そこら辺、取材して歩いただけですけれども。それは、私、持ってい

ないんですけれども、タイプ印刷で京大かどこかにあるはずで、岡部さんは関税制度の調査をやるとか、有田正三さんは貿易をやるとか割り当てて、私は工業をやったんです。

広田 そのときは、一人で赴任されたわけですね。それが1年で終わって、こちらへ帰られて、大学院ということだから、蜷川さんと特に個人的な——その前から、もう個人的に深かったわけですか。

上杉 そこはわからないんですけれども、こっぴどくしかられたことがあって……。

広田 それはまたどういう……。

上杉 私は、いろいろと行儀が悪いんじゃないかな。そういうことはよくないってしかられたことがたくさんあった。

広田 蜷川先生というのは、やはり昔の帝大教授のタイプだったようですね。

上杉 それもあるけれども、私も、やはり極端に変なところがありますね。しかられるだけのことはあったと思うことが多いです。

田沼 想像つかないけれども。(笑)

広田 お行儀が一番よさそうな人が……。

山田 ちょっと話は前に戻るんですけれども、親戚の方に連れられて蜷川さんのところへいらして、1年間授業をいろいろ聞かれて、積極的に蜷川さんのゼミに入ろうと思われたのか、それとも最初に紹介されてご相談された、そのときの人間的な関係でゼミへ行かれたわけですか。

上杉 蜷川先生はやっぱり尊敬していましたね。私は、

なかなかおもしろい学問だし、おもしろい方だから、何の迷いもなしにそこへ行っただけです。当時の京大の経済学部は、これという人がいない時期ですから、ほかにはほとんどいなかったんじゃないかな。何のにめらいもなく行きました。

広田 蜷川さんは、上杉さんが共青の活動をまだやっていることは、ご存じだったんですか。

上杉 そのときは、事実上停止していました。いまと違って、一々退くことを宣言したりしなくて、何もできなくなっちゃうんですね。そういう状態だったんです。

卒業して大連へ行っても、またしかられたんだ。大連市で調査団を呼んだのは、そのころ大連は没落しつつあった、貿易だけではやれないから。それで何とか回復策を練ってもらいたいというんだけれども、私がそこへ行って、関東州工業は見込みがないという結論になったものですから、そこできちっといっちゃえばよかったのに、何かぐあいが悪くて、ぐじゃぐじゃ、苦勞して世話していただいた仕事なのに、つまらない仕事といわんばかりのことをいったものだから、殿様が勉強するのと違うぞとしかられたことがあります。

広田 14年から15年までいらっしゃって、一度帰られて、ご結婚はそれからですか。

上杉 そうです。1年間の区切りだったのに、3月31日にやっとなにに合ってプリントができたんです。それで4月になって帰ってきたと思うんです。それで4月に結婚したわけ。それは、いま考えるとやっぱり無断で。(笑)

広田 それはあたりまえですね、個人的なことだから。

上杉 だれにも無断だったんだ。いまいったように全く

むちゃで、あいさつ状をどこへも出さなかったし。

広田 少し奥さんのことをお聞きしたいんですけども、
どういうふうにして……。 (笑)

上杉 昭和12年に知り合いになった。12年の夏、外語の
ロシア語講座に行っていました。そうしたら、あっちも
来ていて、20日ぐらい講習があったのかな。話は一遍も
しなかったけれども、どういうわけかそばにすわってい
たんです。講義が終わって、世田谷に住んでいたもので
すから、偶然市電に乗って、そのときに何もいったわけ
じゃないけれども、これがしまいというので、あいさつ
したのが初めです。

広田 それは東京であつたんですか。

上杉 東京で。

広田 奥さんは、そのとき何をしておられたんですか。

上杉 女子医専の学生だった。それが、昭和12年と13年
の夏、2年続いた。

広田 京大の2年生、3年生のときですね。

三猪 講習会は夏休みですか。

上杉 そうです。7月、いまの毎日新聞のある竹橋にあ
ったんです。蚊が多くて、私はそのころゆかたを着て行
っていたらしい、いわれるところによると。あれは蚊に
食われちゃってしょうがないですね。2度続けて行しま
した。それで大連へ行く前の年、大体そういうふうを決
めて。

広田 13年の終わりか、14年の初めくらい。上杉さんは、
こういうことをやってきたんだ、何度もつかまわったんだ
なんてことは、最初から話題になったわけですか。

上杉 その点、確かめないとわからない。(笑) おそらく、

そんなことはなかったと思うが、ただ、当時は、ロシア語の講習なんていうと、やっぱり憲兵も必要以上来ていたわけですね。こっち側の関係だということは、大体わかっているんですね。でも、いろんなこっち側がありますけれども。何回つかまったということは、きっと隠しはしなかったけれども、話しもしなかったように思う。

三渚 女子医専で、奥様もその気があった……。 (笑)

上杉 あったようです。つまり吉岡さんの女子医専は追いついて、大森の帝国女子医専に変わったんですから。

田沼 猿橋さんと同じですね。猿橋(勝子)さんは追いつかれたんじゃないくて、やめて……。

上杉 猿橋さんのことは知らないらしい。代々木の病院には千葉正子さんというお医者さんがいるでしょう、被爆者の。あれは一緒です。

広田 15年に結婚されて、奥さんは、京都の方へ勤められたわけですか。

上杉 無給の嘱託というので、勤めても全然お金が入らない。京大の医学部にちょっと行っていたんです。それは大してものにならなかったようだけれども、大連へ行って……。

広田 大連へいらっしゃるのは、2回目はいつですか。

上杉 16年の6月ごろ、日本の大きな戦車だとか大砲とか、大連に陸揚げしているころでした。あのころは、隠すなんてことはない、むしろ、こんなにあるぞという式の大デモンストレーションのときでした。

広田 そのときは、お勤めは何というところですか。

上杉 大連市役所に保健所があって、行ってすぐは勤めなかったんです、生まれたばかりの子がいて、ハワイ真

珠江攻撃のときは、その子供をやっと連れて、星が浦の海岸へ行きましたから。

広田 上杉さんは、どこへ勤めた……。

上杉 私は、大連市調査室。恒常的なやつで、さっきの事業調査局とは違うんです。あんなによくやってもらったんだし、やっぱりああいうものは要るからというので、市長がつくったんです。

広田 奥さんの方は、保健所へ……。

上杉 初めの1年はやらなかったと思います。

広田 調査局では、どういうお仕事を……。

上杉 たとえば、野菜の配給は、ドイツではどうなっていたかとか、屎尿処理はどういうふうにしたとか、そういうことをやっていました。大連市の経済年表をつくったり。

広田 そのとき、一緒に仕事をされた人で、あるいは他の機関でも結構なんですけれども、思い出す方、いらっしゃいませんか。

上杉 思い出さないわけではないけれども、これという方はいませんでした。

広田 満鉄調査部なんかに、左翼の組織があつたと聞きますが……。

上杉 満鉄は大ぜいいましたね。景気よすぎて、危なかしくて、あんまり行かなかったけれども。話をする相手は、お互いにかなりいたわけですね。でも、市役所にいた人は私だけですから。

広田 それで、今度は兵隊にとられるわけですね。16年の12月に太平洋戦争が始まって、何年にとられたんですか。

上杉 20年の5月17～18日。3カ月兵隊に行っていたわけです。

広田 そうすると、そのときお幾つでとられたというところでしょいか。

上杉 33か。

広田 あのところは、40代の兵隊もとられたりした。

上杉 45ぐらいの人もありましたね。ぜん息の人だとか、右の目が見えない人だとか、帰った人もいる。鉄砲もろくになかったんだから、よかったんでしょね。つまり、大連からそういう人を離れさせておくことが必要だとされたんでしょ。輜重兵でしたから。

広田 その3カ月は、どこにいらしたんですか。

上杉 朝鮮と満州の境に、石頭鎮という金の時代のお城のあったところだそうですが、そこを要塞化するんで、その石頭にいたんです。ちょうど軽井沢みたいな感じの大高原で、兵隊としては恵まれていました。

アメリカが済州島か何かに近づいてきたというニュースで、安東へ移ったんです。迎え撃つというんだけど、鉄かぶとさえ配給されなかった。鉄砲も、もちろん半分しかないし。そこで戦争が終わって、各自ばらばらに大連に帰ったんです。

開拓地から来た若い兵隊は、つかまってソ連へ行ったんじゃないかな。

広田 そのばらばらになって帰るというときに、ざあ、とソ連軍が入ってきたわけですか。武装解除されたわけですか。

上杉 武装解除しに来ただけだけど、間があったんですね。奉天を通過して帰ることはできなかった。安東から満

鉄本線の方へ向かって大連へ行くわけですがけれども、奉天を通過はできなくて、千山というところから支線を通って、無蓋車に乗って帰った。

広田 そうすると、ソ連軍とか中国の軍隊とも出会わないままで----

上杉 帰るまでは。中国の軍隊というのは、あまり見なかった。変化するって本当に大変なものです。勝ったんだという意識は、中国人にないんですね、戦争が終わったなんていうのは。汽車が来るとやってきて、マクワウリだとかトウモロコシとかと、くつ下とかたばことかと交換するんです。それで飢えを凌いで帰ってきたんです。

三渚 家に着かれたのは、20年のいつごろですか。

上杉 8月の23～24日です。

広田 じゃ、すぐ帰られたということですね。

上杉 一緒にいた人は、鈴木重歳さんという河上先生のお嬢さんと結婚した人で、蜷川ゼミにいたんですがけれども、その人は満鉄で、一緒に帰っていろいろ注意してくれた。汽車がとまったら、時刻が来なくなっちゃって発車するんだから、遠くへ行っちゃいかぬとか。汽車というものは全く事実動くんだということが初めてよくわかった。時刻表によって動くんじゃない。ああなると、お互いのんきですね。すっかり変わったのに、時刻表のとおり動くと思ったり。実際は、機関士のところへ何か物を持って行って、動かしてくれと頼んで、それだけ動く。

ソ連軍は、それから1週間ぐらいたって来たんじゃないかな。

広田 大連に入ってきたわけですね。

田沼 上杉さんは、兵隊までに中国を旅行されたことはないんですか。

上杉 ないです。

広田 大連市におられたただけですね。

上杉 ハルピンへ一通行きましたけれども。

田沼 戦争の終わる見通しとか、そういうことはどうですか。

上杉 いつということとはなかった。おもしろいことに、召集令状に5月15日と書いてあって、どこかに3と書いてあったんですよ。そうしたら、いろんな兵隊が、これはどういう意味だ、3カ月たったら帰るんじゃないかといっていた。

鈴木重歳さんとは、よく話したんだよ。ソ連の入ってくる 때가、戦争の終わるときだと思うけれども、そのとき、どこへ行こう。輜重兵になったけれども、馬に乗る方がいいか自動車がいいか、どう思う。それはどっちでもいいだろうけれども、逃げるんなら朝鮮の方がいいんじゃないかなんていっていたけれども、あまりそういうことは考えなかった。

見通して、戦後共産党にいた人で、一高の後輩で、経理中尉か何かだった人が、戦時中もときどき大連の家へ寄ってくれて、ノモンハン事件がどうだったとか、いろんな話をしてくれた。

もう一つ、あそこは税関の関係者が多いんで、ドイツから帰る人が通っていくんです。それで、もう終わるんだといっていました。あまりひどく意外ではなかったように思いますね、終戦が。

それよりも、召集されて戦争に出ると、死ぬことがあ

るということ十分に意識しないのを、痛感しました。ならされちゃって、送ってもいけない。静かに出ていったんです。これはひょっとしたら最後の別れになるかもしれないと考えないわけじゃないけれども、感じないようになるものだということがよくわかった。

広田 じゃ、兵隊にはとられたけれども、戦争というものは、直接は体験しないわけですね。

上杉 体験しませんでした。

広田 戦後になって、お家に帰ってこられて、日本へ引き揚げてこられたのはいつですか。

上杉 22年の4月ですけども、私は、自分の一生の中では、その間が一番愉快だった。20年8月に帰ってきて、22年日本に帰るまで。初めて自分で行動して、その結果を味わった。

昭和20年、戦争が終わった後、市役所というものは相変わらずあったんです。それで左翼の崩れたようなものを入れて、何人が集まって、どうしようと——そのとき、何が入ってくるかわからなかったんですね。国民党軍の政府がすぐそばへ来ているんで、来るだろうとうわさをまく人もあるし、八路軍が来るんじゃないか、ソ連だとか、いろいろいっていたんです。とにかく日本人の進歩派が発言できるところをつくろうというので、いろいろ集まっていた。

実際には赤軍、ソ連軍が入ってきた。それは中ソ友好条約か何かの関係で、旅大地区は赤軍の占領地域になって、八路軍は入れないことになった。しかし、実際は、人民解放軍が名のらずにいました。ポスターとかビラは何もなかったですけども。

市役所は中国の方の支配というか、市長は山東の商人で、副市長は共産党かなにかで、その市役所に、10月ごろ日本の市役所が移管というか、渡したんです。引き続き日本人市役所の吏員は、その市政府に使われていました。大体水道とか公園とか、そういう実務的なところは、日本人の職員が残っていました。

私は調査室にいたんですけども、日僑事務課というところに使われて、日本人の中小学校が20くらいありましたから、その管理をしたり、文化的なことをやらされていました。そのキャンプは、中国人の絵描きさんでした。中共の人で、私より1つ2つ若い人だった。

それから奉天監獄から出てきた日本人左翼だとか、野々村一雄君なんかそうなんだな。あれは市役所じゃなくて、政治組織にいたんだが、何人か日本人がいます。

学校の窓ガラスが割れたらどうするだとか、一番の問題は、教員に俸給を払う問題、それから思想教育をする問題なんかがあって、そういうことをやっておったんです。

私は、年末にかけて肋膜炎をやっているところへ、大みそか付で首を切られたというか、技術職員は別として、全部やめたんです。お正月は無職で迎えた。そのうちに隣組で、従来どおりの町内会から、「ことしは残念なことに戦争に負けて……」云々という回覧が回ってきたんです。私は、その場所を墨黒々と塗って、負けてよかったんだということを書いて回したら、町内会の人々が怒って、どなり込んできた。だって、別にいいじゃないかって、それはそれでおさまったんですけども、日本人社会では依然としてこういう人が支配しているんだ、市政府は

考えなきゃいかぬという上申書みたいなものを渡しました。

そうしたら、あした来てくれというので行ったら、こういう仕事をやってくれというので、ちょうど体もよくなったし、学校の管理と記録の検閲だとか、大連にある古本屋から反動書籍を一掃するという運動が起きて、あれは困ったんです。一人でやるわけにいかない。大ぜいでやるんですけれども、反動書籍の範囲がひどく大きくなっちゃって、(笑)満鉄に天野元之助さんとかいろいろいたでしょう。「上杉君、こんなものについてはどうするんだ」、それを一々やらなきゃならなくて大変でした。

そういう学校関係のことがずっと、住宅調整というのがあった。つまり、中国人にいい住宅を供給しなきゃいかぬ、日本人はのさばり過ぎているから調整するというわけで、それはむずかしい仕事でしたね。しかし、いままではいい条件で活動するというのは、なかなかおもしろかった。

いま考えると、やっぱり中国は大変でした。中国とソ連とは違いますけれども、ソ連の赤軍が、中国人の農園のリンゴをもいでいったりするものですから。中共側は、ソ連は兄貴なんだから侮辱しちゃいかぬと宣伝していたようなんですけれども、がまんしていたらしいです。ドイツからモスクワを通して直行した軍隊が来たり、荒っぽくて。でも、日本で伝えられたほどのことはなかったと思います。個々の人にとっては、もちろんひどい目に遭った人もいるけれども、全体としては、普通に過ぎにんじゃないですか。

引き揚げ事業を組織するというのがありました。これ

はむずかしいことでした。いまの日本にも響いているでしょうね。あっちのお金持ちは、どういうようにしてお金を持って帰るかという問題ですね。それから飢え死にしような市民は、どういうふうにして救援するかということをやっ、て、おもしろい経験をしたと思っています。

中国の本土から、大ぜいの日本人が大連にやってきたわけですね。捕虜になって延安に行っていた人とか、投降した人とか、かなりたくさんいましたから、その人たちは、大都会へ来ちゃうと墮落する人もいますね。私らみたいに、その人から見て平穩無事に暮らしていた人は、まだ信頼されるに足りないわけだ。そういう人たちはなかなかいいとは限らなくて、いろんなことがありましたけれども、革命が起きた後で、そこで働くのはどんなことかというのがわかっておもしろかった。

22年の3月末に、一家を挙げて帰ってきたんです。大連はさわめて平穩無事だったんで、ふとんまで持って帰ることができた。珍しい地域です。本だけは持ってこれなかった。

広田 上杉さんが、兵隊にとられる前日までかかって書かれた原稿は、すでに蜷川さんのところに送ってあったわけですね。

上杉 私は、海へ沈んだものと、ついこの間まで思っていたんです。召集された翌日に、家族が書留で送ったんですね。のんきなもので、書留にしてあれば届くと思っていた。帰ってきてみると、もうそれどころじゃないでしょう。そんなこと、あまり惜しいとも思わないで、やっぱりあんなこと書くのはよくないかしらと思ったりしていいんです。全くなくなっ、たものと思っていた。

そうしたら、この間、蜷川ゼミの文集をつくるので原稿を送ってくれというから、先生にこういうことを教わったという中に、「土法炭鉱の経営形態」というやつを書いたんだけど、それは海中深く没したと思われると書いたら、ちょうど蜷川先生の書齋を整理していた人が、その文集の編集者で、「君のいったのがあった」というわけだ。それならともかく送ってくださいというので、送ってもらったんです。

蜷川先生は、戦争が終わったときに学部長でしたから、しかも総退陣するという事件があって、それどころではない。その後、中小企業庁長官で、そのうち選挙だから、思い起こす間もなかった。それが、整理して見つけた。広田 大連のいまのお仕事をなさったについて、日本人の中でそのとき、あるいは後で、復讐的なことをするような人があったそうですね。野々村さんに聞いたけれども、野々村さんはひどい目に遭ったって。

上杉 私がそういうことを免れるようにできていたのは、系統が違ったんですね。野々村君たちは、土岐強さんとか、向坂正男とか、日本人労働組合というのをつくって、それが活動していたんです。それがいたんで、飢え死にした人が少なかったんです。いろんなことをしたから。けれども、痛めつけられた人もいるわけね。没収されたり、みんな隠すから。私は市政府の方ですから、もっぱら教育のことだけやっていたわけですよ。教員たちも、概して支持してくれたんです。関東州府みたいに、役所に行ってあんなに気楽に話せることはないといって、大いに多としてくれて、私の方はそういう目に遭ったことはないです。もちろん、米が足りなくなり、俸給が払

えなくなつて、何人かの人を首にしたりしましたけれども、それはどうということには起きなかった。納得してもらったんでしょね。

山田 その楽しかった2年間、22年の4月に引き揚げられるきっかけはどういうことですか。

上杉 それは、1年以上も引き揚げが始まっていた。市民は帰りにいわけでしょう。いろんなデマが飛ぶんです。来週は船が来るとか、そのたびにみんないろんなものを売ってしまうのです。みすみす自分で困難な状況になっちゃうわけです。引き揚げに対する要求が強くて、引き揚げ船が来て開始された。

私のときは、もうこれが最後の引き揚げ船だということになった。実際はそうじゃなかったですけども、それでわれわれの方も帰ろうかということになったんです。私が帰ろうかといったら、中国人の課長さんは、あなた方はお帰りになるのも自由だし、広い中国だから、家族の4人や5人残って暮らしていても結構だというんだ。たんです。そのうち、そういうけれども、やっぱり水道もないようなところに、文化的なあなた方日本人がいるというのも大変だろうし、戦争はまだあって、あっちこっち行かなきゃならないというふうにもいってくれた。

一方では医者が必要だったから、私はあんまり要らなかったけれども、残ってくれないかという話もありました。

けれども、鈴木重歳さんと話して、一遍帰るのが筋だということになった。ハバロフスクに行かないかという話があったり、放送局があるし。でも、どうも官僚的らしいから、あそこへ行ったってつまらないんじゃないかということになって、行かなかったんです。農事試験場

か何かが大連の近くにあって、そこで日本人の技術者をたくさん使ってやるから、その工作に来ないかという話もあったけれども、鈴木さんと相談して帰ることに決めていたし、収容所に入っちゃってからですから。いまでも、どっちがいいかわからないと思いますよ。やっぱり帰った方がよかったように思いますね。

広田 ご存じの方で、ずっと残って、後までやられた方がありますか。

上杉 もう少ないんですけども、満鉄の調査部にいた人でもいますし、日露戦争の後、すぐ行ったという人が技術者なんかでいるんですね。そういう人はかなり長くいましたね。大体お年で七くなってしまうけれども。

広田 上杉さんは、中国語はどのくらいおできになったんですか。

上杉 読むことを多少するだけで、話はできません。せっぱ詰まって、しょうがなくなっていて通ずるということはありませんけれども。

ロシア語はできませんけれども、ほんのわずかしゃべったんで、うまくいったこともあります。ソ連軍の航空隊が大連にやってきたときに、何か欲しいんだ、レコードが欲しいとか、カーテンが欲しいとか、市役所へやってくるんです。市長は、英語をしゃべれる人がいるぐらいだと思っていて、正金銀行にロシア人で英語をしゃべれる人がいるから、その人を入れて話をしろ。英語がとっさに出なくて、むしろあそこにはロシア語のあれがありましたから、ロシア語でしゃべったら、ロシア語でやれということになった。正金銀行の女の通訳は要らないということになって、かわりに将校について歩いたことが

あります。けれども、大事なことはできないですね。それこそ手まねでも通ずるような話だから、通じたんです。

赤軍というのは、時計取ったり、乱暴したり、悪いこともしましたけれども、大連、旅大地区はなにしろ特殊な場所でしたから、あんまりひどいことは少なかった。激しい戦争をやった後の兵隊は、たとえばレコードをくれという。何を欲しがるのかというとジャズで、決してロシアの革命歌を取ったりはしない。ダンスでもしたいというわけ。

広田 22年の4月に引き揚げられて、6月から商工省の調査統計局へ入られるわけですね。

上杉 6月は、正木さんは何とおっしゃ、たか知らないけれども、木村太郎さんが、そのときは聞かなかったけれども、そのうち上杉君も帰ってくるからといって、ポストを用意してくれた。正木さんは、その時分、統計局の次長だったでしょう。統計局へ、木村君に連れられて行ったことがあります。統計局へ入れていただくつもりでいたんですけれども、そのうち、正木さんが商工省に変わったんでしょう。

広田 局長になって。

上杉 4月の初めごろは、生活保護のあれを取ったり、国民経済研究協会で委託をもらったりして、いつ試験を受けたのか、6月かな。職員に正式になったのはたぶん10月です。正木さんは6月に局長になったのかな。

三渚 木村太郎さんはそのとき――。

上杉 国民経済にいた。企画院の落ちこぼれ組だとか、いろいろいた。

三渚 正木さんは国民経済ですからね。

上杉 稲葉さんとか。

三渚 それで木村さんの案内で、正木さんにお会いになる。それまで正木さんをご存じないわけですか。

上杉 知りませんでした。

広田 たしかこの前、引き揚げてこられて、統計局の次長をしておられた正木さんのところへ行った、そんなところまでお話を伺ったと思うんです。

もう一度復習になるけれども、引き揚げてこられたのは何年何月にこちらへ……。

上杉 1947年3月下旬に大連を出発して、佐世保へ着いたのは、4月の初めでした。

広田 それで6月に、商工省の調査統計局へ入られたわけですね。

上杉 みんな木村君がやってくれた。どうせ帰るだろうと思って、待ち受けてポストをつくっておいてくれた。

帰ってきて、6月ごろからアルバイトをした。たとえば「添加価値及び剰余価値率云々」というのがある。

広田 国民経済で……。

上杉 国民経済研究協会でアルバイトをさしてもらって、それと生活保護とでやっていたんです。

6月からそういうことをやっていて、そのときに、時期を見て商工省に入ることになっていた。実際に辞令が出たのは10月でした。それは一応採用試験があったんです。統計の問題と、憲法とか何か。試験官は正木さんと岩武さんという特権官僚だったね。

田沼 電源開発の総裁になった人。

上杉 なかなかかわかりのいい人だった。

広田 まだ人事院の試験のできる以前のこと。

上杉 統計官の試験というんだったと思います。2級統計官。

田沼 私は3級だった。

上杉 あなた、試験受けた？

田沼 受けました。

上杉 それで10月、まだ通産省でなくて、商工省の調査統計局に入りました。

広田 そのときの局長は正木さん。

上杉 調査統計局の基本統計課に入って、主な仕事は工業統計表をつくることでした。昭和20年に当たる統計はできたけれども、信ずるに足らないということを、局長の正木さんがはし書きに書いたぐらいだった。18、19年は全然なかった。20年は半端なやつで、それは戦争で半分ずつになりますから。われわれ21年から仕事したのかな。それが1つです。

もう1つは、臨時の仕事をGHQからときどきいつてきた。一番おもしろかったのは在庫統計をやれというんだ。いついつまでにやれと、とてもできそうもないせっかちなことをいう。紙が不自由で、それこそ調査票も配れないようなときでした。にぶん私だけ相談に乗ったのかな。相談して、調査票を配ったりするひまもないから、何かの新聞の端に調査票を刷って、答えは別に郵便で送らせよう、それでも仕方がないじゃないかといったことがあるんです。だけど、できなかったと思いますね。あ のとき、隠匿物資のことがやかましいときだったでしょう。

広田 そういう観点からの在庫調査だったわけですね。

上杉 それはできなかったように思う。そのころの、そういう統計の1つの特徴ですね。

あと、アメリカの統計家がやってきて、予算局の産業統計の何といったか、片っ方はカミンスという商品分類を二十何年やったという権威者で、そういうのが来た。案を考えるととっても、ほとんどそういう連中の翻訳で、一応翻訳ができちゃうと、何にも議論することがないんだ。そんな統計をやっただけで。

広田 生産額ではなくて、出荷額となったのはそのときですか。

上杉 23年じゃないですか。

広田 あれもやはり向こうの指示ですか。

上杉 そうでしょうね。具体的に指示したかどうかは覚えていないけれども。あのころは数量表示の生産高とか、特に生産設備が非常にルーズにされたわけね。金額で統計をあらわす方に重きを置いた。それは付加価値額を計算するということだ。戦前は、電気・ガスなんていうのは、幾らあっても金額では出ていないわけですね。

広田 物量ですね。

上杉 戦後は、むしろ物量は軽んじられて、価額表示になったんだと思います。

広田 商工統計関係でも、そういうアメリカの専門家がやってきて、個々の商工省の調査統計局の課を直接指導する、そういうふうになったわけですか。

上杉 直接というより、委員会がしたんですね。GHQと、こっちの統計委員会がいたし、美濃部さんとかそういう人と……。結局、翻訳したものをもらっちゃえばいいじゃないかというのが、そのころの古くからいる統計

家たちで、たとえば武内信男さんなんか、幾らか憤慨していたね。

田沼 GHQ にリサーチセクションがあったでしょう。そことの関係はどうですか。よくわれわれも行かされたところだが……。

上杉 あなた、調査課にいたんでしょう。

田沼 調査課にいたから、生産動態の発表のたびに……。

上杉 私は、あまり行かなかった。

広田 田沼君は、生産動態の方だったわけ？

田沼 いや、私が生産動態をつくっていたのではなくて、発表する係だった。

上杉 調査課って、いわば庶務課ですよ。基本統計課は工業統計、商業統計をやって、あとは化学統計課、機械統計課、繊維統計、雑貨統計。生産動態統計は主としてぼくがやっていた、それは当時の状況で重視されたんです。工業統計の方は直接そういうことは——昔からやっているのを、正木さんのことだから、これはおかしいから改良しようとかいっておられたけれども。

広田 そのころの工業統計の下部の調査機関は、市町村を使ったわけですね。地方の通産局ではなくて。

上杉 動態統計は通産局。基本統計は普通の……。

広田 動態統計の方は、市町村と関係ない。通産局が直接行くわけですね。

上杉 やったようですね。それは、重要な工場だけしかやらないんです。

田沼 基本統計の人は、調査票をリュックに入れて持ってくるのを、受け取ったり、手伝ったりしたわけでしょう。

上杉 あまり覚えがない。初めは何係もなかったんです。調査統計局の工業統計課というので、その下は、机ごとにここは化学だとか、ここは機械とか……。

広田 動態統計の方は、戦時中の各業界の統制会みたいなものとタイアップしてやっていたんでしょう。

上杉 私は、そのことはあまり知りませんでした。

田沼 物資調整官というのがいて、これもまだ戦後の公務員制度が固まらないときでしょう。それが、いま広田さんいわれたように、各動態統計ごとに、統制会で調査課なんかやっていた人たちにでした。

上杉 生産指数つくるときに使ったんでしょう。

田沼 もちろん使いました。それはぼくらのときです。

上杉 初めのころは、生産指数つくっているのは5つぐらいあった。国民経済研究協会、「ダイヤモンド」、商工省、安定本部……。

広田 それで役所側は、通産省に統一されていくわけですね。

上杉 もとの材料がなくなっちゃったんだ。初めは、もとの材料を民間団体が取って、そのうち、全部商工省が握ってたわけですから、結局もとの材料は商工省に聞きに来なきゃいけないんで、あとは発表の仕方とか計算の仕方に多少味をつけてしたんでしょうね。

それは木村君が詳しいから、ここでいう必要もない。

統制会を通じてやるというのは、調査課がやっただね。

田沼 指数は。

上杉 あまり記憶に残るほどのことはないですけども、土屋喬雄さんが当時調査統計局におられた。囑託だった

?

田沼 「商工行政史」という商工省の行政の歴史をつくる予算を正木さんが取ってきて、当時、土屋先生困っていたから、それを助けるという意味もあって、調査課調査係というのが、ぼくとか、金森久雄とか、生田豊朗とかがいるセクションに、土屋先生を囑託で招いたんですね。土屋さんは上杉さんを非常に高く評価して、ぼくらがいろいろ悪どくみをして、まあ、上杉さんと相談しながらやっているんだからと許してくれたことを、よく覚えています。最後は、調査統計局の労働組合の労働学校の校長を引き受けてくださった。

上杉 それでも、土屋さんにむずかしいことを聞かれたことがあるんだ。当時はレッドページの後で、「上杉君、本当に9月になったら人民政府ができると思うのか」。そのころ、徳田さんか何かができるとしきりにいうから。私は、できるともできないとも、もちろんいえないし、さあ、「一生懸命やったらできるんじゃないですか」なんていっていたけれども。その後、2年ぐらいおられたのかね。

田沼 ちょっと記憶ないけれども、よく一緒にやりましたね。

広田 それから東大へ来られたんでしょうね。東大へ来て、すぐまたページになった。

田沼 あのころは、国民食堂なんていうのがあって、雑炊を食べさせる食堂があった。よく土屋さんがそこに並んでいたとか、商工省はいろんな意味で物資が比較的あったんです。そんなことで、土屋さんによくウィスキーをつくって飲ましたのを覚えている。アルコール専売か

らアルコールを持ってきて、本省に行くと、香料がやっぱり統制物資だから、香料を――。

上杉 私は、概して閉じこもっていた方だね。調査統計局の外へあまり行ったことがないし、ほかの課にも一度も行ったことがない。

田沼 だけど、正木さんが、上杉さんと土屋さんとに頼っているというか、期待している、それは、ぼくらにも非常にありありとわかった。

上杉 正木さんには、気の毒なことをしましたよ。

広田 「調統新聞」にも、みんなでつるし上げて、首切りのリストか何かを焼かせるような記事が出てきますね、覚えていますか。

田沼 よく覚えています。統計とあんまり関係ないから――。

広田 でも、そっちの方の話に――。

田沼 上杉さんの記憶を、ちょっと話しておかれた方が――。燃やしたときの主要な役割りを果たした人だから。

上杉 そうかな。あれは、私は後になって思っているのは、定員法で首切りをやりそうだ――。

広田 定員法は何年ですか。

上杉 24年。それはレッドパージなんですけれども、岩波から出ている「近代日本総合年表」というのを見ると、レッドパージとは書いてない。定員法。

広田 ドッジ・プランによる人員整理といわれているんですね。

上杉 年表は、それじゃ本当はつとまらないんじゃないかと思いますね。最初のレッドパージを落としちゃってと思いました。

第一、あれはひどくのんきだったのは、近く首切りがあるそうだ、それは長期欠勤者、素行不良だとか、そういうのだ。それはひどいじゃないか。それがリストができていうというので、それを捨ててくれという交渉だったと思うんです。

しかし、正木さんはともかくとして、そんなのんきなパージじゃなかったわけだ。長期欠勤者だとか、少し不良じみているというんでなくて、まさにわれわれが首を切られるはずだったのに、初期には、そういうことをあまり考えなかったね。

広田 ヤッぱり最初は、予算の緊縮方針にのっとって行政整理だというふうに、受け取っておられたわけですね。

上杉 そこまで行かない。むしろ、欠勤した人から首を切ることについて、幾らか感情的な意味で、それはひどいじゃないかということだったと思う。

それから、不良じみた人に対しては、いろいろとそれじゃいけないからもっとまじめにやりなさいてなことを、組合でいったりした気がする。

田沼 正木さんがリストをつくったことがわかって、局長づきの秘書が組合員だから、そのことを組合に知らせてきたでしょう。そのときにつくられたリストが、いま上杉さんのおっしゃったような人で、正木さんは上杉さんに、いまでも覚えているけれども、これで自分の仕事は終わった、つまり君たちの要求にこたえて燃してしまっただから、今度は君たちのことについては、オレにはやれることはないといったのを覚えていますね、細かいことは覚えてないけれども。

上杉 狭い庭に出たとき？

田沼 庭で燃やすことになったときに。そのとき、雨が降っていたんだ。(笑)

広田 「調統新聞」の1949年の5月16日の号に出ていますね。「正木局長と定員法」という題で、最初はこれは上からいわれたんだからしょうがないというようなことをいっておられたんだけど、治安維持法には自分も勇敢に闘ったんだという話から、だんだん実は反対だということになってきて、「じゃ焼け」ということで、庭に出て関係書類を焼いたというふうになっていますね。

上杉 あまり鮮かには覚えていないけれども。

田沼 だけど、結局、正木さんが先に首切られるわけだから。

広田 正木さんは、いつやめたんですか。

田沼 24年の6月かな。

広田 上杉さんやなにかがパージされるちょっと前という-----。

田沼 ちょっと前に、農林省の近藤康男と。

広田 もうそのとき、局が部に格下げになったわけですね。

上杉 なったかね。後は普通の行政官の人が部長になった。

山田 統計委員会に提訴されたというのが、「調統新聞」に出ていますね。

上杉 首切りに対して提訴したんだね。

山田 意に反して統計官が退職させられる場合には、アピールできるという規定があって、それに基づいて提訴された。

上杉 私が提訴したんだろう。私だけかな。

広田 たぶん、そうです。統計官であるから。

山田 その結果は、どう出たんですか。

上杉 それは正木さんが審査したの。

広田 正木委員長代理。そして提訴を向こうは受理して、後はどうなったんですか。

上杉 受理して、後で私は呼び出されて、「これは統計法には関しないことだ」という通告があったんです。(笑)

何かそんなことだったな。いっぺんに却下されちゃった。幾らかみんなそう思っていたんじゃないかな、もともと統計法は違う意味で出ているし、いまの条項は違うんだもの。だから、いってみるだけだなとは思っていた。

広田 でも、統計法第11条第1項というのがもしこのとおりであれば、「統計官又は統計主事は、その意に反してその職務を免ぜられ、又は他の職務に転ぜしめられた場合には、統計委員会にその事情をのべることができる」。

上杉 述べたんだよ。(笑)

広田 向こうは、「ああ、そう」と聞いたわけ。

上杉 それきりだったような気がする。

広田 これは、やっぱり統計専門職を守るという趣旨の条文ではありますね。

上杉 統計の真実を守るのに、統計官を守らなきゃならない。

広田 身分を守るという趣旨のものですね。いま、こういう条文がどうなっていますかね。

上杉 その後、改正はあったけれども、それには触れていなかったと思う。

伊藤 これは、このままです。統計委員会というのはいまないから、あれして……。

上杉 そういふ場合が起きたら、統計法、どこでやるんでしょうね。

田沼 行政管理庁の統計主幹-----。

伊藤 ほとんど発動されていないでしょうね。

山田 そういふ返事が伝統になっているんじゃないですか。

上杉 どう思っただか、覚えがないな。だけど、あんまり重きを置いてないことは確かですね。

広田 いま統計官というのは、統計局の職員を除けば、たしか微々たるものなんですね。逆に、統計官になりたがらないんだそうですね、出世コースでないから、統計の専門職になりたがらないんだそうです。それは、工藤さんがいっていました。

上杉 主幹がね。もしいまやるとしたら、彼しかない。

広田 そうでしょうね。

これは「全商工20年史」にも出ていますけれども、上杉、田沼、上田、本間の4名がハンストに入った。「16日午前から、ハンスト坐りこみに突入した」と「調統新聞」にあります。

田沼 その話に行く前に、上杉さんがやっぱり統計の専門家として、あるいは、ある意味では、行政的にはそうじゃないけれども、役所の中では幹部の職員として、しかし、また組合活動の中で、統計職員をどんなふうに考えていたか。

上杉 それは矛盾していたんだね。統計というのは一生懸命やるべきもののなかのなかどうかもはっきりしなかったし。

田沼 上杉さんは「統計を守れ」と主張に書いている。

主張 統計を守れ

朝鮮が日本の植民地であったころ、朝鮮には独自の統計がなかった。総督府が日本の統計調査をそのままひきうつしたやり方で統計をとり、出来上った統計も総督府などで使われるだけで、朝鮮人はほとんど見ることもできなかった。朝鮮人が統計書を古本屋で買っただけで、スパイだとにらまれにほどだ。

統計機関が確立せず、国としての統計調査をしていないような国は独立国ではない。

ところで今日日本の統計調査は表面上のはなばなしさとは反対に、ひどいような困難にぶつかっている。予算は全く不足だ。調査用紙も足りず、調査員手当も少い。調査票を提出すべき人々の大部分は中小企業家だが、彼らは重税に苦しめられ、神経質になっているので、調査票が課税の資料になることをおそれてほんとうの事を書かない。不合理な税制の下では統計はうまく行かない。

統計職員の生活が苦しいことも統計調査を困難にしている。アメリカの統計家もいうように日本政府は統計家を尊重しなかったため統計調査に必要な人員が養成されなかった。政府は統計官制度を設けたりして、表面だけは統計職員を重んずるふりをした。しかし実際は前より悪くなった。生活に追われて統計の仕事を研究する気にならないというのが実情であり、中にはやめる人もある。

だが、吉田反動内閣が統計の必要を認めないことこそ日本の統計の運命を危くする最大の原因だ。これらの政策は、ヤブレカブレになり、むごたらしくなってきた。少しの合理性も計画性もないところでは、統計の必要性が見失われる。

我々は第一に、独立国日本の統計を守るに足る統計職員としての待遇を要求する。統計職員として働くに必要な俸給を要求する。

第二に、日本の統計をこわしつつある吉田反動内閣の総辞職を要求する。

第三に、全局員に訴える、我々は統計だけで日本が再建できると考えるものではない。しかし自主的な統計機関のない国は独立国でない。総督府が統計をとるだけだった朝鮮の運命を思え、日本の統計を守り、高めるため、我々はもっと自分の仕事に興味をもち、自分の専門能力を高めねばならない。各課、各係で課長係長とも相談して、毎週二・三時間、仕事の研究時間をつくり、男も女も参加せよ。統計家としての自負心を持て、日本の独立、日本統計の独立は我々一人一人の肩にかかっている。

統計を尊重し、統計にもとづいて計画経済を実行する人民政府を我々人民の力でうちたてる日は近い。その日に備えて各人の統計家としての能力を高めよ。

「調統新聞」1949年4月15日号

上杉 一遍やめたころ、土屋さんが校長をしてくれたころ、統計の話をしたんだ。そのとき、統計を守れ式の趣旨で話したんだと思うんです。

やっぱりそうだと思うけれども、どういうふうに話したか。農林省の統計職員の大会が石川県であって、そのときに何か意見を出してくれというのが、出したときも、正確な統計をつくれとか、つくろうといった記憶がある。

田沼 それは作報の職員ですね。

上杉 全統計というのですか。

あの中において、労働強化と両方来るわけですよ。定員法といったって、定員オーバーしていて首切ったんじゃない。定員に満ちてないのに首切られちゃったんだから、忙しいところはますます忙しくなったし。戦前からの統計職員は、人はいいけれども、あまりスピーディーに一生懸命やろうということじゃないんですね。

田沼 村役場のお役人みたいな感じのする人が多かった。

上杉 特権官僚に当たる人で鹿野君という人がいたでしょう。基本統計課長もした。その人が能率研究所の人を呼んで、もうちょっと能率よく働かせようと企画したことがあった。午前と午後に30分ずつ休憩をとることにしよう、あとはきちっと働いてという案を出したんですが、それもいいなとちょっとと思って、古い人にも話してみたら、決めない方がいいというんだ。好きなときに休んだ方がいい。30分ずつ休みをとっても別に大したことないからというようなふうだった、準幹部候補生的な人は。

田沼 上杉さんは、いまのような面と、ゼムストボ統計家なんかの話を、下級の職員に対して話したり、そういう活動をしておられたんじゃないですか。教養講座でおやりになったんじゃないですか。

上杉 あれはリストあったんですよ。田沼君と半分ずつでやったんだね。

田沼 半分ずつですけれども、上杉さんの中には、統計の話がやっぱりありましたね。

上杉 私は、残念なことにテーマのあれも書いておかなかったし、何を話そうかということもあまりなかったから、覚えてないんです。

山田 この「統計を守れ」なんか見て感ずるんだけれども、当時の統計職員は統計をどう考えていたのかしら。たとえば、独立国のシンボルの面が、ここでは非常に強く書かれていますね。統計を軽んずる、自由にやれないということは、植民地なんだ、と。

田沼 朝鮮はこうだったというやつか。

山田 そうそう。吉田反動内閣は統計の必要を認めない。だから、統計をちゃんとやらなきゃいけないという同じ議論ですね。自分たちの飯の種としての統計とか、シンボリックな意味が書かれているんだけれども、統計そのものを作成することの意義というようなことは、まだ……。

上杉 あんまり考えていなかったでしょう。こっちも自信のない点があったと思います。正確で信頼するに足る統計をつくるべきだ、やろうじゃないかということにはならなかったと思う。

山田 統治し、支配する手段をつくるなんという考え方はなかったんですか。

上杉 あまりいわなかった。

田沼 上杉さんの記憶、そこははっきりしているのか、GHQが生産動態なんかに干渉するでしょう。少なくとも発表の形態なんかを変えさせるでしょう。どっちかという、そういうことについての反感は強かったように思うのですけれども、いかがですか。わりあい上級職員

含めて。

上杉 産業分類とか、職業分類の決め方で、現場にいる統計職員の意見を全然聞いてくれないわけよ。それに対する不満は、かなりの人が持っていたし、私もそれをバックとしたと思います。ことに労働力調査なんか、直接やったわけじゃないけれども、労働省や統計局でやるのに、呼ばれて出席したことがあるんです。いろいろ議論しても、結局アメリカの統計家が来て、レイバー・フォース・サーベイの話をしちゃうと、それになっちゃう。そういうことについては、課長連はかなり不満でしたね、思想はともかくとして。

広田 産業分類の製造業の中に、あのころ、出版や何かを入れますね。そういう批判が、たしか「調統新聞」にも出ていますね。

田沼 それも、上杉さんが教養講座でやられたのを覚えています。分類の話とゼムストボと、題はどんなのか知らないけれども、それは覚えている。

山田 「統計の植民地化」というのが出ている。

上杉 そのころ、ほかのセクションの人たちも同じ考え方でしたね。共産党そのものも、かなりそう考えていたんじゃないかね。それを論議して、こうだからということとは、あまりいわなかった。

広田 統計そのものの研究会とか、そういうようなことはありましたか、つくる人たちの間で、あるいはほかの官庁の……。

上杉 やっぱり局内だけでしょ。自分のところの課長を中心に、分類の意見をまとめたりしたことはありますけれども、研究会というのは記憶はあまりない。

田沼 安本に高橋長太郎とか、ああいう人たちが入ってきた時期でしょう。ぼくらも正木さんに命令されて、安本によく行かされたのを覚えているけれども、上杉さんも一緒だったんじゃないかな。むしろ、ぼくら上杉さんが行くから、おまえたちも行って勉強してこいという勧められ方したような気がする。

上杉 主張したとすれば、やっぱり社会科学に基づく統計という考えを、主張していたんだと思いますね。それは植民地化した統計じゃないということと関係あるんだろうけれども、そういう意識はあまりなかったと思う。これは工場に入れたらおかしいじゃないかとか、山の上にある鍛冶屋まで入れてということはあったけれども、あまり一生懸命にやらなかったな。

伊藤 この「統計を守れ」という主張は、いまの公務員労働者論、行政研究のスタートに位置する議論ですね。

田沼 私はそう思っています。上杉さんは非常に控え目におっしゃっているから、なかなか言葉が引き出せないんだけど、少し端的にいっちゃえば、／＼は当時の共産党の影響を受けた議論であることは間違いがない。民族独立運動だとか、そういう面があることは否めないですね。しかし、やっぱりそういう条件の中で、独自性があって、この新聞は非常ににらまれていたんですよ。特に、そういう単純な民族独立闘争に対して批判的だった。

広田 にらまれていたというのは、どこに？

田沼 むしろ上杉さんは著名人だったから、共産党の統制委員会ににらまれていたんじゃないですか。

上杉 あんまり知らないよ。

田沼 後で出てくるだろうけれども、おそらく伊藤律との関係だとかいろいろあって、独自に、自分で考えてやるんだということを、非常に強調しておられた。ばくら、あまり自分で考えなかったけれども、上杉さんは相当自分で考えていっておられたから、そういう要素がありますね。

伊藤陽一さんのいわれたとおり、いま「朝鮮の例が挙がっているんだね」と思わずいったのは、それが特に印象に残っているんです。これはいかにも上杉さんらしいんだ。おっしゃるとおりなんじゃないですか。これはもう少しきちんと客観的に、高く評価した方がいいと思う。

上杉 「第三に……」のところは、こんなのまともでしょう。「統計だけで日本が再建できると考えるものではない」というところ。

田沼 これもよくおっしゃっていましたね。

広田 当時は、統計関係者は、森田優三さんなんかでも、こういう言い方でしたね。民主日本の再建は統計からというようなことでしたね。

上杉 あのころは、高橋正雄さんとか、美濃部さんとか、アメリカからの窓口とみんな理解していた。そんな窓口になって何するんだというところがあって、いやみもいったりしたんですね。森数樹さんとか。

伊藤 高橋正雄さんはGHQにいた。統計委員会もそういう感じで見ておられたんですか。

上杉 見ていました。統計委員会的美濃部さんや森数樹さん。高橋さんはわりと気持ちよくやっておられたんだろうけれども、実際にはあんまり——翻訳なさったろうけれども、それだけでしたね。

田沼 上杉さんは、「統計家としての自負を持て」ということを、末端のキーパンチャーの職員に至るまで、やっぱりやっておられたんですよ。当時の左翼の運動の中には、キーパンチャーに至るまで、たとえば統計局の人間は統計家として自負を持てといわれて、その自覚でやっていた運動は、河田町のあの一角だけでしょう。

上杉 それはそうだね。

田沼 それはやっぱり非常に大事なことです。統計家としての自負について、どういうふうにいっておられたかというのは、記憶にないんだけど。

山田 「統計を守れ」という主張は、非常にいいですね。

田沼 これにこたえて、基本統計課長が、「断固首増ししよう」というのを書いたのがある。定員法なんかとんでもない。

上杉 やっぱり行政の不合理というのがずいぶんあって、たとえば毎年調査する必要ないじゃないかと思うことがあるんですね。理想をいえば、毎年やるだけの力があって、毎年ちゃんと検討すればいいんですけども、そうじゃなくて1年おきに、2年目は分析するとか、小さな調査をやるとかしたらいいと考えるのですけれども、古くから役所にいる人は、そうすると予算が減るということのを恐れることが、私、当時わかりました。それで承知しないんですね。ムダとわかっていても、工場でないものまでかき集めてやっているわけでしょう。そういうことが問題だった。

広田 工業統計調査についても、そのころからそういう議論があったんですか。毎年やらないで、もう少しきちんとしたもの何年おきにやろう。

上杉 ありました。アメリカのまねでも、1年おきでしよう。だから、こっちもそれでいいじゃないかという……。そこは、ちょっとむずかしかったね。

田沼 上杉さん、やっぱり大連での経験があったんじゃないですか。行政官との間で、そんなに浮き上がっているという印象を、ぼくは受けていません。

上杉 局長さんなんか。わりに仲よくやっていたね。

田沼 ということは、やはりまだ当時は、中央官庁の中に、統計の専門家を尊重するという雰囲気があったんじゃないですか。

上杉 あったんですね。戦後の統計の民主化ということで、専門の統計学者に統計行政を担当させようと……。

広田 トップに据えるという……。

上杉 それも農林省を除いては、だんだんと変になってきた。農林省は、幾らか違ったでしょう。

田沼 だけど、農業統計そのものが、行政機関に合わなくなっちゃったところがあるから。

上杉 でも、その後の展開をよく知らないからわからないけれども、あまり主張は通っていないんだね。

書いたのを久しぶりに見ると、何でこう書いたのかと思って……。

山田 この当時のこういう新聞としては、非常にオクタブーが低かったんじゃない、書きっぷりが、炎々と。

広田 ソフトタッチですね。

田沼 上杉さんだけですよ。この新聞を、ここだけ見ればそうだけれども。だけど、編集方針に当然彼は関与していたから。

上杉 いい新聞だったでしょう。

田沼 ぼくらは影響を受けているし、ほかに比べれば、東宝砦撮影所と並ぶ新聞だった。

上杉 東宝争議が、あのころでしたね。もうちょっと前、23年ぐらいか。

田沼 東宝撮影所の新聞は、「光」という。

上杉 局全体で700人ぐらい職員がいたんですか。それで、われわれの意見を聞いてくれるのがかなりいたから。毎週1回昼休みに、講座をやったんだもの。

田沼 教養講座といって、サロンのだといってしかられながら、サロンがなぜ悪いって。

それから上杉さん、あのときによく大学からも声がかかったり、和歌山高商だったか――。

上杉 和歌山大学ね。私はいかに単純かということ、ときどき反省するんですけども、和歌山へ来ないかといわれたのは首切り間際で、そんなことできっこないんだ。だけど、蜷川先生にいつか会ったときに、その受けた後かな、和歌山はいい気候のところだよとおっしゃったんだ。それは、行けということだったんじゃないかと思うんだ。そういうふうに、「行った方がいい」という人じゃなかったと思うんです。だけど、私がそういう状態にいることは知っておられて、きつくそんなことはおっしゃらなかった。

田沼 ぼくは、蜷川先生と全くあべこべの態度をとった。場所まで覚えていますがけれども、上杉さんがぼくに相談されたんです。こんな若僧に相談することもないだろうとは思っていたけれども、「どうしよう」といったら、ぼくは即座に「困ります」といった。どこか廊下の角ですよ、階段の踊り場か何か。あのころ、階段をみんなはがして

燃しちゃっていたでしょう。前の冬に燃しちゃっているところじゃべったのを覚えています。

広田 この時分に、「調統新聞」に、燃すのはいけないと書いてある。ちゃんと要求をして、燃料を配給させるべきなんで、手すりを燃すのはよくない、そういう自由はよくないと、当時としてはなかなかいいことを書いてある。

田沼 それも上杉さんじゃない？

上杉 そんなことを、書いたかもしれないな。

広田 「主張」のところに、「自由とは何か」ということで、そういう自由はよくない。

山田 いかにも上杉さんがいいようなことだね。

田沼 「盗みについて」というのを上杉さんが書かれたのを覚えていますね。ぼくは、それに非常に影響を受けたのを覚えている。

上杉 どんなのですか。

田沼 要するに労働者は抵抗の手段として、かつては盗みもそういう手段と思っていた。いまの盗みとどう違うかという話を書かれた。それからレーニンが、労働者の盗みについて、そういう意味の言葉に近い表題を持った論文を書いているんです。もう忘れたけれども、それをテキストにみんなに教えたんです。それでこれに書いた。

だから、そういう意味じゃ、とても労働者らしいモラルの確立というのかな、いまから考えれば、大学から呼ばれても行かないで、踏みとどまって、それなりに居心地はよかったかもしれないけれども、そこでかなり盗みだとか——盗みといっても、商工省の場合は地下室に物資がたくさんあるんです。その盗みなんだから、上杉さ

んはそのことをいっておられた。

上杉 あこのころのああいう時期だね。貧困というか、欠乏していた時期からどんどん変わってくる。まだ女学校の授業を正規に受けていない人がたくさんいたんですね。

田沼 小卒が圧倒的だった。

上杉 みんなで相談して、あの人はこのごろこうだから、こうっていさめようとか、まるで道徳学校みたいなところがあったね。

田沼 うまく引き出せなくて悪いんだけど、どうもぼくの記憶も危ないから、あまりいえないけれども、いまのようなことがあったんです。非常にマルクス主義の宣伝をしながら、マルクス主義とはどういうものかということを、いまのような形で彼はやっている。階段の手すりを燃せば、それについてちょっと書いたり……。

上杉 どこかに書いた？

広田 「自由とは何か」という大きな「主張」ですね。無署名ですけども上杉さんなんでしょうね。燃しちゃいけないということが書いてありますね。

山田 ポーランドの労働者に、いま読ませてやりたいね。

田沼 そういう意味では、あのとき、非常に規律を重んじましたね。

上杉 戦後の大連の市政府の生活が、かなり身にしみ込んだし。

田沼 それでいて、上杉さんの場合には、中国の解放軍という印象じゃないんですね。マルクス、エンゲルスなんです、印象が。だから、当時、理論的水準がずば抜けて高くて、とにかく若い者を120～130人、それでまとめていたんだから。

上杉 ハンストでおしまいというか、あのとき締めくくったんだね。

広田 第2組合みたいなものができたんですか。

上杉 できましたね。

田沼 それは、ぼくらが首切られてから後でしょう。

割り込んで悪かったけれども、ハンストのことを質問してください。

広田 これも、非常に正確に共産党員10名というのが出てくるんですね。ねらい撃ちなんですね。

上杉 少し見当違いしたんじゃないかと思います。公然化したにもかかわらず、あまり正確に伝わっていなかった。中には、その前に組合の青年部長をしていたとか、経歴で決めたのかね。

田沼 いや、上杉さんと、川井と、上田とぼくと、その4人は違います。

上杉 小宮山君なんか……。

田沼 経歴でしょう。土方君もそうです。

上杉 この家に相談に来てくれたんです。ちょうどそのとき、私、目を悪くして、眼帯をはめて休んでいたんだけれども、何人かの人に来て、「あしたからハンストしたいんだけど、来てくれるか」「そりゃ行くよ」といって行ったんです。あんまり行くべきであるとか、ハンストなんかよせばいいということは考えなかった。

広田 それが8月15日に通告があって、翌日ぐらいからですか。

上杉 そうだったと思います。

広田 そういうことがなければ、上杉さんは休むはずだった。けれども、ハンストするのに休んでいちゃぐあい

が悪いというので、それ、田沼君に前に聞いたことがあるけれども、わざわざ出ていった。それは目が悪かった。

これは、何日ぐらいががんばられたんですか。

上杉 3日目にやめたんだっけ。

田沼 やめたのは3日目です。

上杉 私の発言が、途中でちょっとあやしくなってきたらしいんだ。それを田沼君が気がついて、「上杉さん、少しいうことが変だから、この辺でやめよう」というんじゃないなかった？

田沼 粗筋をいえば、そうもいえるような……。正確にいえば、ここに集まったときに、まだ上杉さんのおばあちゃんもいて、あの子たちもまだ小さくて、どうするかという話になって、前の古い家で窓がどっちかにあいていたところで、ぼくはその窓の敷居にすわって話していたのを覚えている。

上杉 小平君も来たね。

田沼 それで要するにさっきの話、上杉さんのこの時期の統計の民主化等に対する態度とも関係があるんだけど、上杉さんは、首切りに対してはストライキを準備すべきだという側に立っておられて、その点はぼくもそうだったけれども、ストライキを準備することは、本省の人たちからは非常に批判的に見られていた。人民電車というのがあったろう。抵抗の手段で、とめるんじゃないくて運転する方。あれに近い考えだった。それで調査統計局はストライキを準備しているということになって、ちょっと上杉さんから離れてぼくらの話でいえば、ぼくが非常にしかれたことを覚えています。

ところが、統計の職場というのは、いわば全部下層職

員だから、男の大学出なんてそう何人もいやしない。まして東大出なんというのは数えるほどしかいない。そういう中でストライキを打ち出した。当然ストライキに行くべきなんですね。それができないという問題が、その晩、ここで話された。

もう一つは、当時の労働組合のダウ幹が、数寄屋橋でハンストをやるのが恒例だったんです。それでハンストをやるわけにもいかないというんで、そこから上杉さんの発案で、ハンガーストライキではない、働きながら飯食わないんだというのを話し合っただけです。

広田 生産管理闘争みたいな考え方があったわけ？

田沼 そんな大げさじゃないでしょう、だって10人の同志でしたから。

広田 でも、押しかけていって仕事をやるべきだという考え方が他方にあったわけ？

田沼 上杉さんの実感もそうだと思うけれども、ぼくの実感もそうですね。押しかける必要ないんですよ。行かなきゃ仕事困るんだから。それぐらい首切りが無理だった。

上杉 実際、局長がハンストの場に来たんだね。そこで話をした。

田沼 上杉さんがいなきゃ困るんです。

上杉 実際上、ストライキ状態になった日があるんだ。みんながその場へ来ちゃったから。それで仕事につかなかった、半日はそうだったね。

田沼 庁舎の前にぎっしり数百人のすわり込みがあったんですね。そこへ、官房長が来た。

上杉 何という人だったかな。

田沼 これは統計の話じゃないからどうでもいいけれども、そのときは、「上杉さんが死んじゃう」というスローガンだったから、要するにすわり込みして。私なんか目でないんだから。

上杉 だから、オレはあんな人を入れたらダメだっていったじゃないかって、ありがたい話だったね。

広田 「インテリ失業者の座談会」(「文藝春秋」1949年11月号)でも、調査をやってまだ集計ができてないのに、仕事をやる人を首切るのはけしからぬ、だから、集計まではやるんだという趣旨のことをいっていますね。東京を汽車が出て、まだ京都に着かないのに運転手がおりる、それと同じことだということをいっていますね。やっぱり統計を守ることと、パージ反対とが、2重写しという背景で、当時、闘ったわけでしょうね。

上杉 大河内先生が司会者をしていて、「それじゃ、君、京都へ着いたらおりるのか」というから、それは先の話だ。(笑)

広田 なかなか鋭い、意地悪な-----。

田沼 大河内先生らしいや。

山田 また帰ってこなきゃ。

広田 そのパージになる前ですか、統計委員会の事務局、そんな話もあったんですか。

上杉 あそこの工業統計をやっている人と交換しようということでした-----。

広田 それは正木さんかなにかが-----。

上杉 そうすれば、こっちへ来る人は構わないじ、私もひょっとしたら助かるかもしれぬというわけでしょう。それもやっぱり引き受けられないことですな。

広田 それは、和歌山からの話があったというのと、前後した時期ですね。

上杉 どっちが先だろう。和歌山が先かね。

田沼 和歌山が先ですね。後の方は、ぼくはむしろやり方についての反感を持っただけで、上杉さんがいなくなれば弱まるだろうという面もあったと思うんですよ。特殊な集団だから、他の一般の労務管理ではどうにもならない。上杉さんを動かせば、どうせあとは若僧だから。そのことに非常に反感を持った記憶はありますが、上杉さんと直接に話したことはないです。後ですよ。

広田 蜷川さんが、何かそのとき関与している……。

上杉 中小企業庁の長官だったから、企業庁の事務官の様子見に行ってこいと、ハンストの場所によこしたらしいんです。「様子見に行ってこい」といわれたから、ぼく、行っただよ」と藤田二郎君はいうけれども、結局、それは激励しに行っただで……。

広田 正本さんが、ハンストをやめるように蜷川さんに頼んで、上杉さんを説得してもらったという趣旨のことをいっておられるようなんですが、それは勘違いなんですか。

上杉 そうかもしれないです。正本さんが蜷川先生に頼まれたのは知りませんが、ただ、私には別に特に……。

広田 蜷川さんの方から、そういう話はなかった。

上杉 やめそうもないと思われたんじゃないかな、事務官が来たときに。ゼミナールで一緒に親しい人で、京都府庁にちゃんと入って……。

田沼 藤田さん。

上杉 これは書いてはぐあい悪いのかもしれないけれども、そのときに、伊藤律が中央にいたでしょう。本当はハンストなんかよくないけれども、上杉君ならしょうがないといったという。

田沼 これも書いたらあれだけれども、上杉さんの記録として残しておけば、当時の書記長の徳田球一氏がぼくらを呼んで、体を大事にしろといった。体を大事にしろとは何だということになって、帰りがけに上杉さんとあそこの代々木の道を歩いたのを覚えています。

広田 それは激励する趣旨だったんですか。

田沼 もちろん激励する趣旨でいったんだろうけれども、全体の路線について批判的だったから、それで呼ばれて-----。

広田 どういう点で批判的だったの。

田沼 ストライキをやるべきでない、もちろんハンストはやるべきでない。人民電車方式でやるべきだ。それは、そうはいかないんじゃないですかという議論だった。

上杉 政治は、いろんなことあったね。

広田 作報なんかについての評価で、伊藤律や何かとちよっと違ったんじゃないですか。

上杉 むしろ、全く違ったでしょうね。

広田 伊藤律は、当時、農民部長か何かだったでしょう。

田沼 意見があれしたときは、農民部長でした。

上杉 あるとき、職場には、ぬやまひろしが来たんだね。私は直接聞かなかったけれども、間もなく人民政府ができるから、みんながまんしろといわんばかりの演説をしたらしいんだ。さすがに若い女の人が憤激して、ぬやまひろしてひどいじゃないか、そういう調子だったらしい。

い。

田沼 伊藤律に対しても、上杉さんの影響を受けた人たちは、上杉さんの目は澄んでいる、それに比べて伊藤律は目が濁っている。(笑)

上杉 かわいそうに。

田沼 河田町のそばのお寺の本堂で。

広田 隠し田なんかの問題で、むしろそういうのをさらけ出して、裸になって闘わなくちゃいけない、簡単にいうとそういう方針に対して、隠すことは抵抗だというご意見だったわけでしょう。「マルクス主義と統計」に出ていますね。

これまた話は飛ぶけれども、近藤康男さんが、伊藤律が農業関係をやっていたころは非常によかった。作報やああいうのに協力してくれた。それが、その後そうでなくなってダメになった。そういうようなことを、前にいっておられましたね。近藤さんが局長をやっていた時期ですから、やっぱり24年ですね。

田沼 上杉さんが、次官を訪ねられましたね。

広田 山本次官に9月2日に面会したというのを、上杉さん自身が書いておられますね。

上杉 答えはわかっていたけれども、あのとき、何か答えてもらう必要があったんだね。相談して行ったね。1人で行ったわけじゃないもの、行くのは1人だけれども。

田沼 局長が首切る対象と、大臣が首切る対象とがあるんですね。

上杉 任命する方もあるからね。

広田 「今回の首切り通告が統計作成上相当の障害となっていること。また通告だけで事が片づいたとお考えに

なるならば全く見当ちがいであること。」そういうことを話しに行ったということですね。

上杉 その次官の名前は、何かほかにも名前を挙げたことがある。

広田 この山本次官は、「自分としても決して安易に考えただけでなく、なやみになやんだ」末のやむを得ない措置だといって、上杉さんが、「私も山本さんの気持ちの一面はわかる」、上杉さんらしい。「商工行政に見識をもった人で、そこいらの民自党の手先き官僚とは違う人だ」と……。

上杉 あのととき官房長で、代議士の人がいたね。永山。

田沼 永山官房長のところには、ぼくが行った。

上杉 「そこいらの民自党……」というのは永山さんだね。

田沼 その時期で、さっきから気にしているんだけど、上杉さんの統計職員というものについての見方は、非常に先見的なものがあつたように思う。たとえば農林省の作報は、ずいぶん学歴の高い人たちが携わっていますね。商工省はそうじゃなかったでしょう。

上杉 私らみたいな年の者は、幾らもないんだもの。

田沼 そういう中で、みんなを守り立ててやったような気がするんです。庁舎が独立したこともあって。

上杉 機械集計課、パンチャー屋さんの職場は一番元気でしたね、若い女の人がたくさんいましたけれども、労働も一番きつかったし。やっぱり役所が変わりつつあるときですから、前は一般の職員が局長室に入ったりすることはないし、かなり年配の人でも、ドアの外で一遍ネクタイを直して、礼儀正しく入ったんだそうです。だん

だんそれが崩れて、礼儀が悪くていいというんじゃないけれども、そこへ行って普通にいろんなことを要求したり、小さな女の子が行って要求すると、局長は最も大変だったらしいね。みんな、そういうことをするようになったんです。

広田 翌年の1950年の1月28日に、「上杉さんたちはこうしている」というので、「十五日会の近況報告」というのが出ていますが、十五日会というのは、第1回の首切り組の集まりなんですね。その後、ずっと続いて、ときどき集まっておられるとかいう話を前に聞きましたが。

上杉 それも、だいぶ減りましたけれども、もともと女子職員が多いあれですから、女子職員で子供がいる人が何人もいて、子供連れで来てくれたり、年に1回か2回集まるね。

田沼 あんなに変わらない——それはさっきからぼくが気にしている統計職員の教育ということと関係あるかもしれないけれども、あれほど激しい中でみんな変わらないのは珍しいんじゃないですか。いまでも、ほとんど健在なもの。

上杉 いろんな活動をやめた人も、仲よくやっているね。30年もたったから、いろいろ変わったけれども、何となくみんな話が通ずるみたいだね。

広田 その過程に参加した人にちは、特に若い人たちなんかは、やはり一生忘れられない経験でしょうね。方向がそれで決まっちゃった。

上杉 冗談みたいに、「おかげで決まっちゃいました」という。(笑)

広田 世間に出、だんだん大人になって、いろいろ考え

は違ってきても、やっぱりそのころのことはなつかしい。あれほど燃え尽くことは、それ以後ないという感じを持っているんじゃないでしょうか。

田沼 その場合、集計士としての誇りというのがある。大体そろばんが1級でしょう。ほとんど暗算に近い名人ばかりなんだ。それはやっぱり職業的な誇りで、いつでも話すね。

広田 先ほどいったように、いま、統計という職場にいたがらないんだそうですね。2～3年でどこかへ早くかわりたい。だから、統計の専門家というか、経験の蓄積というのはできないわけですね。統計官というのは、統計局を除けば、たしか数人だったと思います。なりたがらないわけですね。そんなレッテルを張ってもらうと困る。

上杉 ほかになれないからね。

広田 専門職としての誇り、仕事が好きだ、そういう空気がなくなってきたんでしょうね。それは行政整理のたびごとに、統計が縮小されて、いつもねらわれるという政府の姿勢とも関係があるわけなんでしょうけれども。

上杉 そうでしょうね。採用するときは、もともとそういう人を採っているしね。

広田 そうしますと、24年の8月15日パージになって、後はどういうふうにしておられたわけですか、しばらくの間。

上杉 中小企業庁の委託調査をやったんじゃないかな。それから、組合から幾らか、経済的な点でいえば、助けてもらったんじゃないかと思う。

田沼 手取り賃金だけは保障されていました。

広田 零細企業の工業調査か何かを書いておりますが、その時期ですか。

上杉 あれは別だと思います。もとの雑誌がどこかへ行っちゃったもので、ちょっとわからないんです。特にそんなに重要なものじゃないですよ。短いものだし、そのことと直接関係ないと思います。

中小企業庁でやったのは、目黒区、大田区あたりの電気器具関係の下請の調査票を配って、中小企業庁の事務官に蜷川先生のゼミの人がいましたから、藤田君だとか、それに委託をもらって、それでしばらく暮らしていたんです。

広田 蜷川さんが長官だったわけですね。

上杉 途中4月ごろから、もうそのときに農林統計協会の研究部にいたと思うんだ。年表を出したころ、いました。

広田 「日本統計調査年表」ですね。

上杉 木村太郎君が常務理事をしていてね。

広田 農林統計協会は、いつからいつまでいらっしゃったんですか。

上杉 覚えていないんだ。何かとダブっているんです。

伊藤 この「近況報告」のところに、「週に二度調統に来て教養講座をしたり基本の人の相談にのったりそのかわら、原稿を書いたり法政の夜間部に行ったりして居ります。」

上杉 法政の夜間部へ行きました。法学部でした。当時、社会事業専門学校というのかな、いまの社会事業大学にもちよっと行っていました。

広田 国民経済は――。

上杉 あんまり行かなかったな。

広田 あそここのものにした程度のかかわり。

上杉 「国民経済」という雑誌に、2回ぐらい書いたかな。

広田 木村さんは、あそこにも関係しておられたわけでしょう。

上杉 あそここの常務理事的な役割りをしていた。稲葉秀三が、京都の中学校、三高、京大でわりに親しくて、企画院事件でいろいろあった人が集まってきたんでしょう。そこへ入って、彼は統計部長か何かやっていた。別に机を持って、あそこへすわったことはないです。委託調査みたいなことをしていた。

一遍、原稿を書いたんだな、剰余価値率がどうだとかいって。

広田 添加価値と剰余価値率でしたか。

上杉 「添加価値」というのは、どこかでその前に訳があったんでしょうね。

広田 いまは「付加価値」で統一されたから、添加価値というのはやはり珍しいですね。

上杉 特に考えて書いた覚えはないんです。当時、そういっていたんでしょうね。

広田 だから、「アディッド・バリュー」が日本に最初に入ってきたとき、そういう訳をしに人がいるんでしょうね。

上杉 翌年の4月は、京都府知事選挙かね。

広田 蜷川さんが、50年の3月でやめさせられたにんでしたか。

上杉 2月。

広田 3月危機だ何だといったんですね、それでにらまれて。中小企業庁長官をやめるでしょう。それで立候補は間もなくですか。

上杉 そうです。3月末に立候補することになったんじゃないかな。免職後も、東京にしばらくおられたんですよ。それからあまりいわないんだけど、私の家へ共産党の人が来て、蜷川先生はどこにいるか知っているか、案内してくれという。それでそこへ行ったんだ。その人は谷口善太郎さんと、もう1人中央委員の竹中恒三郎さん。

当時のことで、何で行ったのか忘れにな、世田谷の松蔭神社におられた。そこへ案内した。私は立候補すべきだと思ったわけでなし、しちゃいけないとも思わない。ただ、案内したんです。それが1つのあれになって……。

広田 谷口さんは、つまり説得に来たわけですね。

上杉 これはやらなきゃならないと先生が思われたのは——そういう話をしたことはないですけども、間もなく京都駅へ着かれたときに、ホームに群衆が、どうしても立候補しろって集まったんだって。

広田 それは蜷川さんが、朝日新聞に「洛陽に吼中」で書いておられますね。だれの見送りであんなに人が来ているのかといったら、自分の迎えだったに。

上杉 それで決めずに、もちろんお宅へ帰って、社会党は共産党に負けちゃ大変だから、水谷長三郎さんの下の生水さんという人が府連の会長で、その人が京都府連の人を引き連れて、交渉に行ったんじゃないかな。それは社会党に入ってくれという交渉に行った。入れば……。

広田 立候補を推す。

上杉 すいぶん考えたって、いつもいっておられた。清水の舞台からとびおりるような気になって、入党の判を押したんだって。

広田 じゃ、社会党公認候補という-----。

上杉 やっぱり民統（民主戦線統一会議）の推薦で、何日か交渉して、告示日が来ても決まらなくて、1日2日食い込んだときに決心されたんです。その前に、京都市長選挙は民統候補で勝っていた。ひょっとしたら見込みがあると思ったのかな。私は比較的楽観的でしたけれども、大体は通ることはまあないという感じのようでした。

広田 ご自分では。

上杉 そんなことを手伝っていて、4月末に選挙で勝って、5月ごろから、続いて農林統計だ。

広田 農林統計は、大阪市大に行ったときにやめたわけですか。27年6月になっています。

蜷川さんの選挙のときには、1月ぐらい泊まり込んでやられたそうですが。

上杉 いろんなところを転々としていました。すいぶんむちゃなことをした。

広田 蜷川ゼミのほかの面々、みんなそれぞれの形で応援されたわけですか。

上杉 そうですね。むろん、京都近辺に在住の人が中心となって働いた。後に副知事になった人だとか、部長になったような人、地方の教育委員会からやってきて応援したりしましたけれども、やっぱり共産党が結局一番活動したんでしょうね。

やっぱり共産党でも社会党でもない人が必要だと感じ

ましたね。といって、蜷川先生が、くたびれたから休み
たいというわけにいかないでしょう。すると、先生が限
度に来たから休ませなきゃいかぬだろうという役が要る。
そういう役を、幾らかしたりしていました。主役をした
のは、またほかの人だったけれども。

田沼 蜷川さんが中小企業庁長官になられたときは、何
かかわり持たれましたか。

上杉 ぜいたくさせてもらったぐらいで、別に特にどう
ってことなかった。蜷川先生は自分で考える人ですから、
私が下手なことをいっても、別に大して役に立たないと
思っ。でも、演説なんかで、おかしいなと思っという
と、直す方ですね。

初めてのことから、いろんな人が、郡部へ行ったら
激しいことをいっちゃダメですから、もう少し身の回り
の方の話をしろとか何とかいう。先生は、当時は、ひょ
っとそんな気になられそうなときもあるから、それはよ
した方がいいですよ、間違いなく勝ちますからといった。
(笑)

田沼 農林統計協会での活動を、もう少し話していただ
けたら――。

上杉 農林統計協会というのは、集計部が一番大きいん
です。農林省その他の役所の統計で、そろばんし切れな
いところの下請です。そんなこといっちゃ悪いけれども、
集計のときにだんだん農林省がサボって、統計表のつく
り方なんかまでも下請にやらせたりね。こっちはやらし
てもらえればというわけなんでしょうね。

私は、研究部というところにいました。それで調査と
か、「農林統計調査」の編集とか。私は、直接編集しませ

んでしたけれども、統計調査表を書くぐらいで、そのときどきのことをやっていた。

広田 そこでの職場の人たちとは、一緒に研究会やるとか、講習会的なことをやるとか……。

上杉 わりに少ないところでした。井上晴丸さんの弟なのかな、おいの方かな、井上何とかという人がいて、その人が中心でやっていたようですね。

農林統計のところでは、あんまりよく働いたとは思えない。職場の人は何しろそろばん士で、昼休みにピンポンの相手をたまにするぐらいで……。あんまりしたことないですけども。

広田 大きな所帯だったわけですか。

上杉 100人近くいたんじゃないかな、臨時のアルバイトも入れて。私のやった集計部の仕事は王子にあったんです。

広田 いまも基本的には、そのまま続いているわけですね。

上杉 いまも残っています。農林省とものと親密な関係において存続しているんだろうね。

山田 「ソビエトの統計理論」というのは、違いますか、農林統計。Ⅰが出たのはそのころじゃないですか、27年。

上杉 そうだそうだ。井上照丸さんなんかね。内海さんが解説を書いているでしょう。

山田 緑色の表紙の……。

広田 Ⅱの方は、紫色か。

上杉 あれは照丸さんが訳したんだ。

山田 上杉さんは、タッチはしていなかった。

上杉 しませんでした。知ってはいたけれども。

田沼 研究部というのは、どんな仕事をしていたんですか。

上杉 雑誌と、農林省からいわれた農林統計の翻訳、そんなことですよ。あまり自立したことはやっていなかったように思う。

田沼 商工省を首切られた統計職員、幾人か上杉さんが入れたでしょう。

上杉 それは、もう一つ外郭団体があって、そこへ紹介したことはあります。

田沼 農林統計協会ではない。

上杉 やっぱりそういう統計集計機関。そこは、かなり評判よく引き受けてくれたんです。それぞれ結婚したり、いっぱい変わったものですから、いまはもういないです。

田沼 この期間、上杉さん、若い首切れ組のめんどうをずいぶん見ておられましたね。

上杉 めんどう見るということにはならなかったんだ。そんなことできなかったんですけれども、せっぱ詰まってしまうがなくて、木村君に頼んだり、ほかへ頼んだり、第一行く本人自身、仕事を見つけるのにかなりよく活動したんですよ。

広田 もう少し後ですか、農林統計協会でストライキか何かあったとか。

上杉 私がやめるころありました。明治神宮の前の表参道から入ったところに事務所が移ったときに。

広田 それは、やっぱり待遇問題で。

上杉 そうです。私は調停委員に命ぜられた。

広田 つまり、木村太郎さんが経営者側でやられたわけでしょう。

上杉 研究部で、私と葛井君という、いま農業会議所の部長か何かしている人と、ほかにいましたけれども、ストライキが始まるというので、木村君に頼まれたんだな。「君、調停委員、真ん中をやってくれ」というから、ちょっと大変だけれども……。実際は、何もしなくて片づいたけれども、やっぱりああいう機関は無理がありますね。組合員の中にいろんな人がいますから。私は調停はした覚えがないんだ。

広田 待遇がよかろうはずがないでしょうからね。

上杉 農林省のみみっちい予算の中でやるんですね。

広田 農林省の津村善郎さんあたりと、そのころ接触がありましたか。

上杉 そのころは知らなかった。あの論文(「統計調査の社会性」)を書く前に、農林省へ津村さんを訪ねて、いろんな話をした覚えがあります。学生のとくに会ったんだという話だね。そういわれると、会ったような気がする。理学部の方の連絡係として来ていたんでしょうね。戦後はそういうことを忘れちゃって、知らなくていたんですけれども、批評を書こうとしたときに、一遍会っておかなきゃと思って、訪ねたことがあります。

彼は、一生懸命にあることを主張するから、私が賛成すると、そんなバカなことはないというふうにいうような人で、怒ってもしようがないし、聞いていたんですけれども、個票を見なきゃ、統計なんかわからないんだという。それは、ある意味ではそうですけれども、山と積んである個票をわれわれは見る。それを見ないで、どうこういってもダメだというわけだ。

広田 それは、こっちも見せてもらいたいけれども、情

報を独占して-----。

上杉 批評を書いたときに、抜き刷りを送ったんです。そうしたら、これはオレの主張を都合よく抜き取って書いてある、オレにもお前のところの雑誌に同じ枚数書かせろという。それはやってみるけれども、ほかのそういうのを大学の雑誌に載せたという例がないから、断られるかもしれないといって、それきりになっちゃった。載せる場所がなければいいんですが、あの人はほかにあるもの。

広田 「農林統計調査」によく書いておられましたね。

上杉 広田さんもやっていたね。

広田 ぼくも、ちょっとした批評を書いたことがあります。

ソ連の統計学論争は、いつごろから関心を持っておられたんですか。これは商工省にいらしたところから-----。

上杉 いや、やっぱりあの本が出るころだったと思います。その前に、大橋君がプリントでかなり出しているんですね。初期のがありますね。それは読んでいました。けれども、それを考えの一部に入れてというまでには行かなかったと思います。それは、やっぱり井上照丸さんの訳したあれが、大きな影響を与えたと思います。

広田 坂元平八さんが、京都で大橋さんや上杉さんと、ちょくちょく会って、統計学上の問題を話し合ったんだというようなことを、いつておられましたけれども、そういうことがありましたか。

上杉 坂元さんは会員ですから。会ごとに大体来ていらしたし、私が津村批判の報告をしたときも、出席しておられました。

広田　　そうですか。もうそれは、経済統計研究会の関西支部の集まりとして。

上杉　出ておられました。坂元さんはなかなか活発で、「上杉さんの本(『マルクス主義と統計』)が売れたのは、1つは私の働き」という冗談をいうぐらい。神戸大学にいらしたでしょう。学生に夏休みにあの本の書評を書かせたからといって、学生の書いた評をくださったことがあります。

津村さんは知らないな。津村さんは、坂元さんとは大阪でも会っていたかもしれません。

坂元さんは、大体私のことをそんなに反対ということはいわれなかったけれども……。直接には反対されなかったけれども、「そういう数理的なことをやっている方とは、また隔たりがあるようですね」という返事をくれたことがある。ご自分の意見としてじゃなく。奥さんが、やっぱりそれをやっているでしょう。

広田　疾病地理学。

上杉　それは、あの方法をかなり有効に使ったとされているらしいね。

広田　統計を集めて、疾病率を地域別に分類したりしてやるんですね。

上杉　奥さんにも、お会いしたことがありますよ。奥さんは納得しなかったらしいね。それはそうでしょうけれども。

広田　奥さんは、気象研究所におられたんですよ。あそこもまた組合活動の強いところで、統計のことで、ぼくは何かの話をしに行ったことを覚えています。

上杉　いまは、どこにいらっしゃるんですか。

広田 いまは、もう勤めをやめておられるんじゃないでしょうか。

上杉 その程度の関係はありましたが、それ以上はあまり知りません。

山田 あのことろ、昭和26年ごろかしら、「自然」の雑誌に、田沼さんなんか「世論調査の魔術」なんて書いた。

田沼 森一スさんとか。

山田 急に一連の統計批判の論文が、フーンと出始めたんですよ。上杉さんの青木文庫は何年なんですか。

上杉 1951年（26年）です。

広田 「自然」も、田沼君や森という人がいた。石田望君も書いた。

上杉 あのと、田沼君と石田君と……。

田沼 森君ともう1人、4人でした。銀行の佐々木さん。それで増山さんと……。

上杉 何か興味を持ったから、話をしようというのでしたね。中央公論かどこかで会ったんだね。

広田 それは、ぼく覚えていますよ。一緒に田沼君、上杉さん、増山さん、ぼく、そんなところではなかったかな。

上杉 それだけかね。

田沼 佐々木という人は開発銀行かな、国税庁……。

広田 それは、石田望君の関係でしょう。引っ張ってきただけでしょう。

田沼 非常に税務統計に詳しくて。

広田 国民所得統計の批判をやった人もいましたね、秋葉楊とか。あれはペンネームで、国税庁の中にいた職員でしょう。国民所得統計の批判なんて、非常に早い時期

のものですね。

山田 あれは何に載ったもの？

広田 みんな「自然」でしょう。

田沼 森君が全部1年のスケジュールを組んで、自分も書いて。

山田 「自然」に一連の統計批判が、ワッと出たんですね。初めてでしょう。

上杉 連載した。

山田 毎号出ていたですよ。

広田 ぼくは、渡部経彦と一緒に、黄変米のことを書いたです。黄変米は、サンプリングでやるわけですから、サンプリング批判。

上杉 私は、その広田君の文章の一部を取って、大阪市大の入学試験の社会の問題を出したことがある。そうしたら、学部長の近藤文二さんが、「ちょっと来てくれ。これ、引っ込めてくれないか」というんですよ。いまがタガタしたら試験問題がわかってちゃうから、「引っ込めますけれども、後で随筆書いていいですか」といったら、「いやみいうな」といわれた。あなたの書いた文章は、なかなか大変だったんだよ。

広田 柄にもなく、偉そうなことを書いた。

上杉 感心していた。これは試験に出して、教育しておくべきだと思った。

山田 まだ全体に高揚期が続いていたんですね。多少下火にはなってきたけれども。

田沼 直接関係ないけれども、「統計の闘い」というのはいつですか。

伊藤 あれは28年でしたね。

田沼 あれは中村隆英まで含めて、上杉さんの影響下に。
 広田 あれは、上杉さんの影響下でやったものですがけれども、直接タッチはされなかった。形の上では、統計研究所の相原茂さんがリーダーで、坂本藤良が加わっている。企業内部の資料の批判は、なかなかおもしろい、いいものでした。ああいうものは、あの時代でないと書けないという感じがしますね。未熟ではあるけれども、一生懸命書いたものは、いまでも読んでみて、いやな感じがしない。

上杉 かなり言い過ぎたところがあったりするけれども。

広田 恥ずかしいようなところがありますけれども。

田沼 そのころ上杉さんは、やっぱり農林統計協会を本務にしていたんですね、いまの統計批判が盛んになったころ、まだ大阪市大には行っておられないでしょう。

上杉 行ってないです。そこで近藤批判なんか書きちゃったものだから、木村君はぐあい悪かったらしいね、農林省に仕事を取りに。

広田 「マルクス主義と統計」は、農林統計協会時代の仕事なわけですね。

上杉 そうです。つまり、初めて自分でそんなことをするひまができた。あっちからもらってひまをつくったのは、変なものだけれども。

田沼 だから、和合さんの名前なんかが出てくるのも、そのためですね。

上杉 田沼さんの世論調査の論文を途中で引用しただけで、調統の人のことはあまり書かなかった。校正が進行中に入れたのは、あれしかないものね。

田沼 しかし、あの時期は1時期ですね。本当になつか

しい。

広田 27年6月に大阪市立大学にいらっしゃって、京大にも行っておられた。

上杉 それは大橋君が病気で、非常勤で2年ぐらい行きました。大阪にいるときに、大阪から京都まで行きました。

広田 そのころ、京都、大阪で経統研を始めた人たちが集まって、いろいろやろうということになったわけですか。

上杉 初めは、蜷川先生のゼミの出身者だけでしたけれども、会計学の人も一緒だった。岡部利良、岡本愛次。

田沼 上杉さんが大阪市大へ行かれたのは、どういうきっかけですか。

上杉 初めは、名和統一さんが呼んだらしいんです。名和統一さんという人は、なかなか決まらない人なんだって。決まらないでいるうちに、名和さんは経済学部で、商学部の上林貞治郎さんが、それならこっちで採ろうというので、話が岡部さんを通してあった。それで行ったんです。

こっちでレッドページで首切れちゃったし、結局、それじゃなかなか勤めにくいという木村君の意見で、一遍は大阪でも行ったらどうだというから、なるほど、それもそうだと思って行ったんですけれども、家じゃう行きませんでしたから、非常に非能率な生活をしたわけ。

広田 行ったり帰ったりしておられにわけですね。

上杉 本も、そう持っていくというわけにいかなかった。そのころは、あまり何もしなかったな。

田沼 あのかきは、つらい時期でもありましたね。

上杉 すいぶんね。それで昭和34年までいたんですね。それからいまの東経大に入った。

田沼 現存の方だから、あれだけれども、上林さんと東京にいるわれわれとの間で、意見の違いがあったりした。

上杉 「日本資本主義講座」のとき、国民所得の統計がなかなかできなかったというより、やらなかったんですね。1巻分おくれたんじゃないかな。それは悪いと思ったけれども、うまく仕事ができなくてね。あのかき、広田さんと田沼君と、それだけですか。

広田 都留、野々村両氏が、国民所得のところを最初書いたんですよ。それが、半分近経的なわけですよ。おかしいじゃないかというようなことを、上杉さんや田沼君がいわれて、じゃ、追加して書けということになったんじゃないですか。ちょっと変えただけで、国民所得というのは2つあるわけですね。

上杉 8巻と9巻。

広田 「戦後日本の国民所得統計」というふうにして区別したわけです。

上杉 私も、あのかき書いただけで、あと、その先を勉強しなかったから、それ以上はわからない。

田沼 しかし、あれは、結果数字だけは、すいぶん引用されている。

上杉 あのかき、病気が始まったのかな。昭和30年に入院して、手術したんです。

広田 「日本資本主義講座」は29年ですね。そうすると、あれを書かれて間もなく病気になられたわけですね。1年ぐらい入っておられたんですか。

上杉 1年近く。手術しましたから。

田沼 お幾つぐらいのときですか。

上杉 40代ですね。昭和29年のクリスマスの日に入ったんです。翌年、30年に手術したのかな。

広田 書かれたものがポツととぎれる時期がありますね。あれは病気のときなんですね。著作目録をつくってみると、そのところが何年間かとぎれますね。

上杉 最近、またとぎれたしね。やっぱり、やれるときにやるべきだったですね。

広田 本当に耳が痛いですがけれども。

田沼 一度伺ってみたいと思ったんですが、大阪での生活はどうだったんですか。

上杉 あまり愉快ではありませんでした。両方とも下宿にいたんですが、下宿としては条件のいいところでした。不愉快ということもないけれども、あまり調子よく勉強したとは思えないし、自分でどっちが主な場所なのかわからなくなっちゃうのね。大阪が本拠なのやら、東京が本拠なのやら。両方ともいいわけがつく、勉強しないのはこういうわけだということがあるから、非能率でしたね。私は下馬にいるのも古いから、あっさりと動けない。それで「つばめ」の料金を払いに行っていたようなものだ。

広田 あそこは、やはり大阪商大出の人が多いでしょ。うね。

上杉 それは、なかなかいい勉強家がありますね。商学部でも、たとえば川合一郎さんなんかいたし。

広田 とても人柄のいい人だったそうですね。

上杉 勉強の仕方よかったんじゃないかな。

田沼 そのころ、大阪市大で育てた学生はいるんですか。

上杉 私は、ゼミは最後のときに3人しかいなかった。

別に育てませんでした。

広田 その人たちですか。外国統計調査年表というのをゼミの課題としてやって、そのイントロダクションのような論文を、上杉さん、書いておられますね。

上杉 あれは、ちょっとインチキでしたね。

広田 上杉さんの統計観を、一般論の形でかなりはっきり書いた最初じゃないかと思うんです。

上杉 私もよく自分のを検討してみないんだけど、私の定義に動揺があって、かなり違っていろいろいるらしいね。こう書いたり、ああ書いたりしている。このところ、このまますんなり読んでみると、そう書いてあるみたいだな。

広田 矛盾したことをいっているというふうに――。

上杉 矛盾したとは書いてないけれども、こういって、うまくいっているように見えるけれども、あっちとこっちで違うとか、もう一遍読んでと思ってそれきりですけども、外国統計調査年表に書いてある規定で、広田さんがここが初めてだというのは、どういうところですか。

広田 統計学の対象は、統計方法じゃなくて統計だということ。そしてそれは歴史的な社会の産物だ。それは、「マルクス主義と統計」からそうではあるんですが、おそらくソ連の統計学論争があったから、統計学の対象の問題として考えられたんだろうと思うのです。かなりはっきり1つの説として出されたという感じですよ。

上杉 どこかでも安藤君が、それはよくわかるという式の賛意を表してくれたのは、やっぱりちょっとそんな意

見だけれども。

広田 安藤さんは、統計指標の体系を対象にして研究するのが、統計学だという意見ですね。

山田 「統計学の対象と方法」の中で、プロシコというのがいたでしょう。あのときに、上杉さんが積極的に評価されたのを知っています。あれは、対象は統計だという意見でしたね。

上杉 安藤君は、私が地質学の対象は地質といったときに、それはいいじゃないかという。でも、それはたとえば話だから、まだよくわからないですけれども、どういうふうにしたらそれでうまく矛盾なく、一貫していけるか。

広田 それと、やはり統計というのは方法だという側面がある、それをどういうふうに結びつけて理解するかというところが、1つの理論問題になりますね。

昭和30年、いわゆる六全協で、上杉さんは退院されて-----。

上杉 入院していた。

広田 上林さんが、教授会で立ち上がって自己批判をされて-----。

上杉 上林先生は、やっぱり学校の先生らしい人ですね。そう策をめぐらすということもないし、表通りの人でした。ずいぶん変わったことを考えておられるのに、気がつかないということはあるね。

広田 そんなに悪いことをしていたんなら辞表を出せと、反対派からいわれちゃった。ある意味で、人がよかったんでしょうね。公然と自己批判されて、それなら責任とれとなった。それで一時、非常勤講師か何かに自分でなれたことがある。

上杉 非常勤じゃなくて、講師。

広田 降格したわけ。

上杉 珍しいことが起きたんですね。宮上一男さんと。

広田 上林さんが上杉さんのところへ訪ねてこられて、そういう話をされたということ、後で上杉さんに聞きました。

上杉 病気見舞いに、この家にいたときに玄関まで来られた。いい先生ですね。けれども、政治の中にとまづかしいのかもしれないね。宮上さんというのは、もっと単純だけれども。なかなか支持もしてくれたんですよ。

広田 あのころ、「会計上部構造説」なんて、「経評」に出たことがあるんです。朽木清という人。

上杉 まだ、大阪にいますでしょう。

広田 そういうような議論、おそらく商学部の会計だの、経営だのいう方面であつたんだろうと思うんですが、そういうのとは関係ありませんでしたか、上杉さんが統計の問題を考える場合に。

上杉 ありませんでした。あそこは、会計の方では木村和三郎さんのお弟子さんがいて、それと上林さんの育てた会計関係の人と、教授会でものすごくやり合ったときがありました。ちょっと激しいと思った。

会計学から影響を受けたことは、あまりない。

いろいろ質問したり、意見を聞いたりして有効な人は、統計ではやっぱり大橋君だと思いますね。大橋君にきちっとまとめてもらえば、まとまらないからって、ところどころ代替しているところはあるわけだけれども、徹底して、ともかく生きている人といえ、大橋君が飛び抜けて高いと思う。

広田 いろんなことを考えて、それを本当にドゥルヒデ
ンケンするタイプですね。大橋さんは短く書いちゃうか
ら、背後のものがよくわからないけれども、本当にコン
デンスした書き方をする。

上杉 あんまり説得しようという意思がないものだから
-----。

広田 自分として、これで終わり、済んだということでは
-----。

上杉 内海先生にいわせると、大橋君は済むとみんな古
本屋に売っちゃうというんだ。やっぱり教育者だし、協
力し得る研究者を、かなりよく大ぜい育てているでしょ
う。討論もする。

山田 会計上部構造論という問題意識が出てきたのは、
ぼくの誤解かもしれないんだけど、スターリンの「言
語学の諸問題」というのが出て、上部構造の問題がいろ
んな形で議論されたけれども、そういう形でああいう文
献を日本ではかなりドグマとして、あの当時、議論され
ていたように記憶するんだけど、そんなものから統
計を考えるとということもなかったですか。

上杉 ありましたね。思い出したけれども、いまの「言
語学について」は、かなり肯定的にとっていい部面があ
ると考えていたと思います。結局、それをそのようにと
って自分で何か書いてみると、もとは忘れちゃっていま
すけれども、やっぱり関係ありますね。

広田 土台と上部構造と、そのどちらでもないようなも
のがあるというのが、1つのポイントだと思うんです。
たとえば科学なんというのは、上部構造の側面もあるけ
れども、どちらでもない。言語というのはそうだという

ことですね。

上杉 言語学の論文をもっと広く読めばいいかもしれないですね、スターリンだけじゃなくて。

あれは、どういう定義していたっけ、言語学は何であるとか……。

広田 すべてのものに、ブルジョア的、プロレタリア的と分けられないものがある、そういう趣旨でしょう。

上杉 言語は特殊だという前提でいっているんじゃないの。

広田 プロレタリア言語学というようなものに対する批判でしたね。

上杉 階級性というものです。私がちょっと不十分だったのは、階級性と、歴史性、社会性の関係がはっきりしなかった時期がありますね。何でも階級性……。あれは、私はおもしろく読んだ論文ですけれども。

戦時中でも、言語について、いろんな間違っただ意見も含めて、おもしろいのがあったですよ。たとえば高倉テルさんだとか、国民文学の確立だとか、倉石さんの「漢字教育の理論と……」。言語をやってみるということは、意味があると思いますね。それはそれっきりになってしまった。

広田 34年に大阪市大をやめられて、東京経済大学に来られたわけですね。東京経済大学ではどうでしたか。

上杉 なかなかいいづらいところもあるね。こじんまりしていますから、全職員と何らかの意味で顔を合わせているから、そういうよさはあったですね。小さい学校の困難というのがありますね。一番いい条件のところに戻

ってきたんだから、もっと勉強すべきだったとは思いうけれども。経統研はわりに規則正しくやったから、それはいいことですね。

広田 その経統研のことを、もう少し聞きたいんですけど、東京へ上杉さんが来られて、政経研究所の会議室で、関西でこういうのを始めた、東京でもやらないかというのが、東京での始まりなわけですね。あれが29年9月2日でした。その前に、上杉さんとか、松川さんとか、丸山さんなんかで、下相談されたにわけでしょう。

上杉 松川さんが、京都へ来られたことがありますよ。丸山さんは覚えていない。有田さんあたりも病気だったかな。足利君と、野村君と、私と、有田さんもいて、馬場さんという方も入っていたけれども、実際上来られなくなりました。そんなところかしら。

雑誌は、まだ出ていないんでしょう。

広田 『統計学』の創刊は30年、第1回の全国総会が32年だったと思います。これは関西大学でやった、高木さんがあいさつをして……。

東京では、途中から、統計懇談会というふうになるんですね。なるというか、そのところがデリケートなことで、三瀬さんの「小史」でもぼかしてあるわけですけども。

山田 あれは2本立てだったんだよ。統計懇談会というのと、経統研が、並行してあった。

広田 経統研の東京支部というのに、相原さんとか、内藤さんとか、反対したんでしょう。それで、そぐいう人まで含めてやろうというので、統計懇談会というふうにして、正木さんが座長格になって、それとは別に、経済

統計研究会には、東京在住会員ということで、個人として参加した形になった。

ところが、統計懇談会の方は、やっているうちにだんだん参加者が減ってきて、経済統計研究会のメンバーだけになっちゃったから、いつの間にかそれが経済統計研究会東京支部ということになったわけですね。だから、東京支部がいつできたかというのは、はっきりしないんです。

上杉 京都としては、それは知らないたてまえになっていた。私なんか、大体あんまり知らなかったね。

広田 松川さんなんかが、かなりはっきり、反対する人たちも含めてという幅広論だったと記憶しています。『統計学』の3号だったか、初めて東京からの便りというのが載る。東京でやった創刊号の合評会の報告ですが、それに「東京在住会員」とあって、「東京支部」という言い方をしていないんですね。

京都ではいつごろからですか。趣意書に書かれているのは28年ですが、そのときにできたわけですね。

上杉 会でない形で、実際に勉強していたのは、もうちょっと前から、25～26年じゃないかな。

広田 内海さんなんかも、もう北大へ行っておられたわけだけれども、ときどき京都へ来られたわけですか。

上杉 それは、あまり覚えがない。

伊藤 とときどきということではないと思います。

広田 もちろん、発起人になっているわけです。

上杉 27年からかな。26年は早過ぎる。28年に会の形をとったんじゃないかかしら。私は、わざわざ東京から行った覚えはないのですから、大阪へ勤めてからのこと

と思います。

広田 内海さんのところでも、やっぱりそのころから——
内海さんは何年に北大へ行かれたのかな。

上杉 病気だったしね。

広田 北海道支部の発足は、28年の経済統計研究会の発
足と同時というふうに、是永君が書いています。

上杉 東京からわざわざ人が来てというのは、松川さん
のことしか私は覚えがないけれども、かなり期待して、
松川さんにも話をして、相談して思っていたように思
います。松川さんも、かなりそのつもりで出ておられた
んじゃないかな。丸山先生は、もうちょっと後じゃ
ないかな。

広田 東京でも、丸山さんは厚生省ですから、最初から
非常に熱心な会員で、発起人にもなっている。どうい
う関係か、丸山さんと松川さんとが打ち合わせてやっ
ていたと思います。

事務局長役、初期に足利氏から野村君にかわりますね。
あれはどういう事情だったんですか。

上杉 私がちょうど入院していたときに、事が起きたん
です。第1巻の1号を出して、それを東京へ持ってきた。
そうしたら、いいとか悪いとか、東京で意見があった。
たぶん、自分の雑誌の編集者の中で、いいとか悪いとか
いったことを、また載せるのはおかしいと、足利君もい
ったらしいね。

私は、病気だと自分で気がつかずに夏休みに帰ってき
て、手術しなきゃダメだということを夏休みが終わらぬ
うちに教えられて、大阪へ帰れなくなった。手紙だけで
やりとりしていたけれども、一応足利君は、そのときに

それで憤慨してやめたんだろう。その後、会ったときに、意見があるなら、編集委員をやめるというなら、それはあなたの考えだけれども、何も会をやめることはないんじゃないかといったことを覚えています。

内海さんにいわせると、内海さんも何かやられたらしいんだ。内海さんはむしろまとめなきゃいけないという気持ちが主で、話をしようとしたところが、けしからぬということになったらしいんだ。異常な時期だったかもしれない。でも、あんなになることないと思うけれども。

広田 そのころ、松川さんに連れられて、初めて大橋さんに紹介されたんですけども、大橋さんもやはり胸を手術して、入院しておられて、その病室で紹介されました。経統研というものができた直後ぐらいじゃないかと思います。

上杉 みんな肺結核で、有田さんは手術なしで治す先生について、京大の病院にいて、長く寝たきりにしていた。大橋君は手術したし、私もしたし、話がちぎれちぎれになっているんです。それは、野村君あたりが一番よく知っているかもしれない。

広田 事務局長的な仕事をする人がいなくなっちゃって、結局野村君が引き受けた。しばらくは雑誌が出ない時期がありますが、また野村事務局長という形で出始めたわけですね。

広田 いままで、上杉さんの経歴に沿ってお話を伺ってきたわけですけども、きょうは最終回で、上杉さんの書かれたものを中心にしまして、幾つかお話を伺いたいと思うのです。

上杉さんのお仕事は、戦前のものを別にしますと、大ざっぱに言って、こんなふうに分かれるんじゃないかと思うんです。まず第1が、マルクスやレーニンの古典研究ということだろうと思います。2番目に、これは戦後の早い時期なんですけど、近代経済学批判のお仕事があると思います。3番目に、これはずっと今日まで上杉さんが特に愛着を持っておられるテーマじゃないかと思うのですが、人口統計及び人口問題というカテゴリーに属するお仕事があると思います。4番目に、これは商工省でのお仕事とも関係があるわけですが、工業統計の研究、貿易統計その他経済統計の研究、特に歴史的な研究ということですね。5番目に、こういうふうについていいかわかりませんが、剰余価値率の計算に代表されるような、統計の加工、利用による日本経済の研究というようなカテゴリーに属するものがあるように思います。最後に、量的にはこれが一番多いわけですけども、統計及び統計学の研究。必ずしもこの順序どおりでなくていいんですけども、ぼつぼつお話を伺っていきたいと思います。

まず第1に、マルクス、レーニンの古典を、上杉さんは非常に徹底的に読んでおられて、それがほかの統計の研究、また近経批判なんかの基礎になっているように考えられるわけです。拝見しますと、上杉さんの古典の研究、特に「資本論」の読み方は、非常に独自のものがあるように拝察するんですが、「資本論」の読み方、あるいは一般に古典の読み方ということについて、ご意見がおりになるんじゃないかと思うので、伺いたいんです。上杉 決して謙遜するという意味じゃなくて、どうして

古典を深く、広く読んだというふうに判断されたのか。

あまり書いたことないんですね。

広田 「資本論と統計」とか、そのほかの近代経済学について書かれたものでも、とにかくよく読んでおられると思います。手紙や何かまで全部。

上杉 それは、高等学校のときは、ほとんど読まなかったと思うんですね。いつ、どういうふうに読み始めたか、あまり記憶にないんですけども、大学に入ってすぐ滝川事件があって、初めの半年は本を読んでいるような状態じゃなかった。昭和8年に大学に入って、9年の2月につかまるまで、秋は少しは読み始めていたと思います。9年につかまって、9年の7月まで自由がなかったから、その後が読んだ時期だと思います。

広田 京大にいらっしゃって、時間ができて、よく「資本論」を読んだという-----。

上杉 それもありますけれども、東大で読み始めたのは、2年生の秋からです。どう読んだか考えてみると、やっぱり素直に読んだと思います。何かわからないところがあっても、それはマルクスが違っているんじゃないかなんて考えたことはない。論理の筋を追って、事実についても考えて、順々に読んでいったと思います。1巻から入りました。当時のことで、講座の論争があったから、変な読み方だけれども、地代論とかも読んだし。特に質問項目に書いてあるように、哲学の書物として読むというふうなことは、気がつかなかったな。

広田 特にそういうことをお聞きした1つの理由は、長谷部さんと鬼塚さんの「資本論」全3巻の索引というのがありますね。その中の上杉さんの「年代順事項索引」

は、おそらく上杉さんがご自分の「資本論」の勉強のためにつくっておられた索引を、転用したものではないかと思ったんです。

上杉 それは京都大学へ入って、1年のときに、農学部と経済学部の学生が中心で、産業組合研究会というのがあったんです。それは当時としては、最後に存在を許された研究会で、そのうち分科会みたいなものがあったんだけど、「資本論」をやらなきゃというんで、大橋君と、朝野勉さんと、私と3人、もう少しいましたけれども、最後に残ったときは、3人だけがその研究会をやっていました。そのときには、私はたぶんイギリスで農民層の分解しているところがあるでしょう、そこを説明するときには……。

広田 本源的蓄積のところですか。

上杉 あそこだけでもないんですけれども、地代論のところも。それを年表につくったことはあるんです。それを持っていた。カードも買えないような時期だったから、原稿用紙の裏か何かにつくって、だんだんそれをふやしていったんです。一遍警察に取られたか何かでなくなっちゃって、戦後、大連から帰ってきて、またカードをつくり直して、今度は地代とかそれだけじゃなくて、全部ともかくつくったんです。そのときは、「資本論」に限るということをしないうで、いってみれば「マルクス・エンゲルス選集」とか「全集」に出てくるのを、全部、ノートにつくったんです。

日評で出た、紙の悪い「資本論」があるでしょう。あれのためにじゃないんだけれども、つくって、初めにそこへ出してみろというので持っていいたら、あんまり複

雑に分類したものだから、印刷できないんです。それで、簡単に直して、長谷部先生に見ていただこうと思って持っていったら、中をよくごらんにならないで載せるといわれるので、びっくりしちゃった。

そのとき考えたのは、年表じゃないんじゃないかということでした。年代順に事項の索引をつくっただけで、年表にしたわけじゃないから。それでああいう表題をつけて……。

広田 理論的に事項索引进行分类するということだと、大いにあり得ることだと思うんだけど、それを年代順に分けたというところが、「資本論」は単に抽象的な理論ではないんだ、具体的な歴史の分析が基礎にあるんだ、そういう「資本論」の読み方があらわれているんじゃないかという気がしたんです。

上杉 そういえるでしょうね。当時は、あんまり意識して出さなかった。そのころは、宇野さんのいろんな論争なんかまだないころで、もちろん、そんなことを、私はよく知りませんでしたし、意識していなかったんです。

もう一つ、あれを考えるのに役立ったのは、「資本論」を読むときに、ともかく改造社の「マル・エン全集」を全部読みました。「選集」も一通り見ました。やっぱり「資本論」だけじゃない方がいいだろうというふうに考えた。特に気をつけたという意識はないけれども、ともかく「資本論」だけじゃなくて、全部読むことは必要だ、またおもしろいという考えを持っていました。

広田 マルクスの「クーゲルマンへの手紙」のどこかに「資本論」を読むときに、まず労働日、分業、機械、本源的蓄積、そういう歴史的な叙述の部分を先に読めとい

うようなことをいっているところが、たしかありますね。マルクス自身も、そういうふうにとらえていたんじゃないかと思いますが。

上杉 しかし、読み方としては、私は、マルクスの注意は1つのいい注意だと思うけれども、ことに学生とか経済学を勉強しようとする人は、そうでない方がいいように思います。1から、2、3、4と、順に論理を追って読んでいく方が、安心して読めるような気がする。

広田 ぼくは自分のゼミでは、歴史的な部分を飛ばして、理論的なところだけを、レジュメ式に読ましているんですが、それはちょっと邪道ではないかと思っています。

上杉 読み方に、特に特徴があるとは思わないけれども、一応こつこつとそのものの自体を順番に読んでいくしかないんじゃないかな。

広田 マルクスやレーニンから手紙まで含めて、縦横無尽に的確な引用が出てくるでしょう。あれにぼくは驚嘆するわけですけども。

上杉 あれをするのに幾らか役に立ったのは、「資本論」は別に「統計論」じゃないが、ずいぶん統計のことが出てくるんですね。そのころ、カードを使うことをよく意識しなかったものだから、カードにすればもっとよかったですけれども、こういうノートに順々に書いたんです。これは、日評の訳で書いたんですが、初めのうちは、ただ順番にだけ書いて、幾らか分類した。

広田 戦後初期に、近代経済学批判のお仕事が幾つかあるわけなんですけど、その後の統計研究とか、統計学の研究と、どういうふうな関係にあるとお考えになりますか。

上杉 近代経済学批判が主だと思います。近代経済学を批判するということの中に、統計批判の問題が入るといふふうに考えていました。もっと近代経済学の勉強をすべきだったと思います。蜷川先生が知事さんになられた後でも、会うと、近代経済学の話が出て、先生流の大ざっぱな言い方ではあったけれども、なぜだれも批判しないのかと伺って、私もなるほどなと思っていました。

それはもっと力を入れるべきところだったし、その近代経済学者としては日本の近代経済学者を選ぶべきだ。中山さんがそのときに何しろ中心だし、中山さんの書かれたものをよく読んで、まずやるべきだと思っていました。

広田 「近代理論経済学批判 中山教授の俗流性」、これはまとまった形での最初の近経批判の論文ですね。

上杉 それも偶然のことで、私のところへ回ってきて、私が書かざるを得ないことになった。それで、そこまでやったんです。

広田 その偶然のことというのは？

上杉 宮川実さんが引き受けにはずのことをやめられたんで、「君、やれ」ということに何となくなってきた、じゃ、やってみようかと思って、やったんです。

山田 それを拝見して、ぼくは改めて感心したのは、当時、これは戦後日本にあらわれたおそらく最初の近経批判ではないかと思うんですけど、そこで近代経済学の方法論といいますか、哲学的な批判が一番最初に出てくる。これは、ぼくなんか考えていって、そこはやはり近経批判の核になるものだ、やっこのごろそういう結論に達してきているわけで、その点、上杉さんが最初から、

たしかいい抽象と悪い抽象というようなことで、正しい理論的な研究と仮説に基づいて、理論と現実とはそもそも合わなくて当然なんだという近代経済学の考え方を、非常に鋭く批判をされている。その点、非常に印象的だったです。

その近経批判ということは、やはりいまいわれた蜷川さんのサゼッションですか。

上杉 初めは違います。初めは、むしろ宮川さんですね。そんなににびたび会ったわけじゃないけれども、何人かで会があったから。聞いているだけだったんですけども、宮川さんがやめたときに、その集まりで経済学をやっていたのは私だけだったから、よんどころなく張り切った。

山田 いまでなら、マルクス経済学、マルクス主義で統計学をやるということだったら、当然数量的な現象の扱いということで、近経批判に自然と流れていくのはよくわかるんですけども、この当時、統計学研究を志していられて、早くも近経批判に結びついたという論理的、内的な必然性を、ちょっと伺ってみたいと思っていました。

上杉 そこは、自分でもわからないですね。いってみれば、何しろそのとき強そうなのに、まず取っかかっていくという感じじゃないですか。中山さんがあっちの中心だし、影響もあるし、統計の方にしても、一番それらしい人にかかっていけば、そういうことになるから。

私は、そういうふうに自覚が不十分で、書評をしてくださる方が、どういうわけでこれをやるんだとか、そういうことを教えてくださる場合も、幾つかあります。自

分で考えつかないから、残っちゃうんですね。そこを指摘してもらったということだと思っんです。

近経は、蜷川先生じゃなかったと思うけれども、蜷川先生は、統計の講義の中で、たとえばブハーリンの話をされたことがある。ブハーリンは、戦前ではいろんなこともいわれたけれども、蜷川先生は、例の経済学を非常に尊重しておられたですね。そういう考えを持っていた。

広田 ソ連で、戦後早い時期に、芸術とかその他いろんな科学の分野でのブルジョアイデオロギー批判、ジュダーノフの報告というのでしたか……。

上杉 国民文庫か何かに……。

広田 「党と文化問題」というので、日本に紹介されたけれども、そういうブルジョアイデオロギー批判の課題というようなことを、やはり少し意識しておられたわけですか。

上杉 あんまりしなかったように思います。

広田 ジュダーノフのあれが日本に紹介されたのは、48年以降ですよ。50年代に入ってからだと思います。

上杉 私は、大阪市大へ行ってから読んだな。

広田 ただ、こういう近代主義批判という企画を、どうしてしたんだろう。蔵原惟人なんか書いているんでしたっけ。

田沼 書いている。

広田 だから、そういう人たちは、ソ連の方の文献はもう知っていて——ということは、ちょっと考えられるんですけども、ジュダーノフの報告、向こうでのブルジョアイデオロギー批判というキャンペーンは、かなり早

い時期ですね。日本で翻訳されたのは、20年代の後半でしょうね。

山田 やっぱり社会科学、あるいは経済学をやるというのは、批判をやることだという意識は、非常に強かったんじゃないかな。

上杉 強いですね。それこそ人口論であっちがまくし立てているときに、人口のことを何も考えないで、価値がどうの、価格がどうのなんていっている気がしなかった。それも間違いで、そういう基礎的なこともちゃんとやってのことでしょうけれども、内輪で細々としているより、ともかく力がなくてももっとやるべきことはあるという気はしていました。

私は、粘り強く先までやるということがどうもなく、いろんな問題が中途半端で、そのままになっていることがたくさんあるんで、あまりいいことじゃないんですけども、この中山さん批判ももっと先まで——この次はもっと先までやりたい気はしていました。これでという気はないけれども、もっとやらなきゃならないと……。

広田 昭和30年代に入ってからだったと思いますが、東洋経済から「講座近代経済学批判」というのが出て、田沼君や、山田君や、私なんかも参加したわけです。

そのときに、近代経済学批判は内在的批判であるべきか、超越的批判であるべきか、簡単にいうとそういう論争というか、議論が、内部で行われたんですけども、もし何かご感想があれば……。

上杉 そういうふうに考えたことはなかったものだから、やっぱり内在的といわれるものがなきゃならないことは確かですね。そのために、中山さんの本をなるべくたく

さん集めて読むんだから。だけど、それでおしまいというわけにもいかないんじゃないでしょうか。

広田 批判というのは、ある意味で、言葉は悪いけれども、超越的なものですね。別な立場から対決させるわけだから。

上杉 歴史的評価を与えなきゃならない。それには、みんなが納得するようにするには、いわゆる内在的でなきゃならない。納得してもらうにはどうしたらいいかというところにも苦労があるわけですから、どっちでなきゃというのは、もともとちょっと変ですね。

伊藤 その内部のグループというのはどなたですか。その議論は、その後もずっとしばらく尾を引いていましたね。

広田 宮崎義一さんとか、伊東光晴とか、あの人たちは内在的批判派でした。

伊藤 あの講座のグループの中で、そういう研究会が……。

広田 研究会はずっと続けていったんです。

山田 末永隆甫とか。

上杉 大阪市大にもいた。柴山君。

広田 関西の人とは、一緒に同席した記憶はないけれども、宮崎義一、伊東光晴はよく覚えています。都留さんや何かの流れでした。杉本榮一さん。

山田 内在的批判をいった人たちは、その後みんな等しく変質した。特徴的な変質ですね。

広田 マル経と近経とをちゃんぽんにしたようなあれになっていった。

上杉 対抗的に批判はしないということですね。そのと

き、そういわれたのは。

山田 内在的な批判というのは、論理的な矛盾を明らかにするということに尽きたわけですね。

広田 それでは、その論理的矛盾を系統的に述べることはできませんね。やっぱり超越した立場を持っていなければ。

上杉 それをやった後だったな、「近代経済学誕生の歴史的背景」というのを書いた。

山田 「経評」に。

上杉 引用ばかりだといわれた。

広田 これが昭和24年の3月でしたか、「経評」は8月ですから、おそらくその直後に書かれたんでしょう。

上杉 たまったから。

広田 勉強の成果が。なるほど。もったいないからもう一つ出したというわけだな。

上杉 もったいないということはなかった。ただ、宇佐美君だったかに、もったいないことをするといわれた、引用ばかり並べて。

広田 あれを見て、ぼくは特に感心しました。非常に的確な引用が縦横無尽に出てくるんで。

山田 「近代理論経済学批判」も、引用が非常に的確ですよ。

広田 すごくたくさん読んでいて、「あれだ」とパッと思いつかなくちゃいけない。

広田 上杉さんが、統計または統計学を研究される際の、マルクスやレーニンの古典の研究と並んで、もう一つの基礎というか、想源は、やっぱり蜷川さんの統計学だろう

うと思うんです。蜷川統計学についてどうお考えになるかということ、まとめてお聞きしたいんです。

一般に、蜷川統計学の核心は2つの集団論にある、この2つの集団論で、いわゆる統計的方法の乱用を批判したという点に核心があるんだと、理解されているようですが、上杉さんはむしろ——これは私の感じなんですけれども、非常に初期に蜷川さんが書かれた「統計の解説、批判、解析」という論文だとか、「統計学概論」でいえば、最初の集団論のところではなくて、第3章の「統計利用の実際」という部分を多く引用しておられるし、読むべき重点の部分としてそういうところを挙げておられます。

蜷川統計学の受け取り方といいますか、継承の仕方という点で、ちょっとユニークな点があるんだと思うんですけれども、どうしてそういう点を重視されるわけですか。

上杉 2つの集団論があるというふうに、あまり意識して考えたことはないんです。純解析的集団というものは社会科学としての統計学の中で、何らかの位置を占めるというふうにあまり考えなかった。統計的法則というものは、もともと別なもののように思っていました。大体いま広田さんが説明してくれたような考えになっていたような気がする。

先生は忙しい人だから、学生のとときにあまり家をお訪ねして話したことも、そうないですけども、思い出すのは、一遍夜遅くまでお話ししたことがあって、利潤率の傾向的低下の法則を例にして、統計的法則というものじゃないんだということについて、お話ししたことがあります。

もともと純解析集団というのが出発点にあって、それを基準として、純解析集団ばかりじゃないんだよということをおわれたんで、先生の頭には、純解析集団なるものがまだこびりついていて、それが理想の1つの基準として出てくるけれども、そこから抜け出したところに問題があるというふうに考えていたんですね。

広田 蜷川さんは、集団論、つまり統計対象論の次元で、統計対象たる集団は存在たる集団だということで、従来の統計学の基本原理を批判した。そういう点に蜷川統計学の最大のメリットがあるんだというふうな理解ですね。

上杉 そうです。

広田 ちょっと、そのところ、ニュアンスが違うわけなんで、統計対象をそういう集団論というふうに抽象してしまうと、本当に統計によって表現する社会、経済現象の大事な側面が、その抽象によって切り捨てられてしまう。数理統計学批判の理論としては非常に有効であるけれども、やっぱり蜷川さんの統計対象論はそういう限界を持っているんじゃないか。これは私の感じですが、それで少し具体的な統計利用の実際だとか、統計の吟味、批判、利用という方に、特に上杉さんが引かれるんじゃないかと思うのですが。

上杉 もともと集団か集団でないかということは、そんな重要な、基本的な問題じゃないと思うんです。

広田 上杉さんのご意見はそうですね。

上杉 そういってみてもいいえし。なぜかというところ、そのころは集団だということをだれも疑わなかったから、集団がくっついていて、違いは純解析的なものであるかどうか。集団でないといってみても、別に進まない

と思うんです。

広田 その後の蜷川統計学継承の1つの、というか、主な流れというのは、その点をずっと追求するということにあるように思うんです。

上杉 そのことを幾らか意識して書いたのは、蜷川先生の還暦記念論文集の「出生性比について」でそのことを書いたつもりだった。あれは不十分で、そのことが大事なんだから、そのことをもっとよくわかるように書けばよかったのに、そのことにはあんまり触れずに、しかし、そのことを考えて書いた。つまり、出生性比を例とするほかに、社会的な現象で、統計的法則とかいえることは何もないんです。出生性比というのは自然現象ですから、社会現象を含むところでは、105対100という比率が崩れちゃう。崩れないでいるのは、社会現象が入らないことなんです。社会現象と自然現象はどう違うかということをするために、先生の「統計学概論」なんかでも、出生性比だけしか例に上がらないんですね。出生性比はヒトにかかわりのあることだということで、社会現象にまぜこぜになって入ってくるけれども、それはヒトの問題なんで、社会的人間の問題じゃないんだから、違うんだということをお願いするつもりなんです。

伊藤 蜷川さんのお弟子さんの中で、戦前すでに統一的な把握といいますか、蜷川統計学について、あったんでしょうか。やはり戦後、たとえば内海先生の「蜷川統計学と弁証法」、それからしばらくたってから、60年代にだいたい経統研のいろんな方が議論するようになりましたが、その辺の-----。

上杉 私は、戦前は大学院に残っていたときに、資源論

というのをやることになったんです。それは学校行政の中で考えられたんでしょうね。会計をやる人は岡部さんがおられるし、統計は内海さんや有田さんがいるし、ちようどそのころ東亜資源論というものが京大の経済学部の中でできたんです。資源をやれというわけで……。
 広田 蜷川さん自身も、資源問題について書いた論文がありますね。

上杉 ものを書くのがむずかしいときでしたから、私が書いている分にはさわりはない。雑誌の紹介なんかしていたんです。だから、統計のところを、そのところを書くということはありませんでした。おそらくそのころ、蜷川先生の周りではだれも議論がなかったんだと思う。統計的法則だとか、2つの集団論とか、内海先生がいておられるようなことは見なかった。私なんか、むしろ統計的法則ということを軽んずるものだから、蜷川先生は、そういうのは奥ゆかしくないといわれたことがあります。私は統計学を抜きにして、やっぱり一概にマルクス経済学なんかで議論を、話をしていたんだと思います。
 伊藤 戦後の蜷川統計学の評価の中では、先ほどの広田先生のお話に出ていた、むしろやはり方法論の代表であるという点において、ずっと強く評価されてきたように思うんです。たとえば野沢さんあたりは、水産経済学とかそういうものを含めて、実質的な問題とのかかわりがかなり強く蜷川先生にはあるんだというのを、逆に出してきておられます。

上杉先生も、先ほどの資源の問題なんかで幾らか理解できるんですけども、その辺にかなり重点を置かれて、継いでいるという感じなんでしょう。

上杉 野沢さんのものもよく読んでいないで、覚えてないんですけれども、それは違うんじゃないかと思いますね。水産経済学を勉強なさったには違いないけれども、そういうものがあるって、蜷川先生の統計学が一定の方向に向いているということはないと思う。やっぱり蜷川先生は、統計学を非常に厳密に統計学としてやっておられて、つまり、唯物論とか客観的法則とかいうことをきちんとした上で述べておられる。

伊藤 やっぱり方法論説の代表ですか。方法論説といっても、もちろん哲学的に引きつけて見るとか、いろいろ幅がありますので、その辺、微妙なんですけれども。

上杉 方法論説というのは、実は私もよくわからない点があるのは、初めてそういう考えを聞いたのは、有沢先生からです。補助科学だという。補助科学でもちっとも悪いわけじゃないんだけれども、なるほど、うまいことをいうものだなと思って、伺っていました。けれども、だんだんと、補助科学とは一体どういうものなのか。学問の性格を分類するときに、補助科学と独立科学とあって並べておいて、すましていることができるだろうか。研究対象があつての学問で、そのときに、研究対象が方法ということがあるんだらうか。蜷川先生はそうなっているんだけれども、それと同列に並べて済むかどうかというのを考えていました。そこがはっきりしないので、私は、この質問項目の先まで全部ははっきりしないんです。

伊藤 蜷川先生にかかわって、もう一つなんですが、当時の日本資本主義論争が並行してございます。あの論争については、蜷川先生あるいは蜷川ゼミは、どういうふうに関与を受けてめられていたか。

上杉 内海先生が入学されたころは、きっと封建論争なんかゼミの中でも論ぜられたんじゃないかと思います。私の入ったときは、そういうことはなくなりはないけれども、あんまり触れないという時代の中でいましたから、私たちは、東大にいたときは封建論争とか、講座の論争が、学生の中心的な興味を引いていた。そのころ、いわば左派的な学生は、みんな講座論争をやって、夢中になっていたわけです。

東大の授業の中で強くその論争に触れたのは、大内先生でした。大内先生は、どちらかというとかかなり感情を込めて、講座派批判でした。そういう中にいて、われわれも関心を持っていたんだけど、私が京都へ行ってからは、あんまりそういうことはなかった。忘れてしまったわけじゃないけれども、あんまりなかったように思います。蜷川先生がどちら側ということを考えてこともないんです。

伊藤 その点、私がお聞きしたのは、蜷川統計学と、当時の日本資本主義分析というものが、理論的にといいますか、日本資本主義論争の中では、統計にかかわる問題がいろいろ出てきているわけで、その統計利用論等でそれとの接点、それを取り入れて議論するということかなぜないのか。その辺、私の個人的なあれですけども、当時の具体的な統計利用の問題というよりも、蜷川理論の場合、やはり学説史に素材を求められているのかなという感じ……。

上杉 ゼミナールでみんなが立てたテーマは、まちまちなんですけども、私は、工場統計表の解説をするようにいわれたわけです。

広田 そこに原点があるわけですね。

上杉 昭和10年の工場統計でした。私は11年に入学したんですけれども、2年生からゼミがありました。私が申し出たんではあるけれども、みんなに「テーマは何にするか」というでしょう。私は、大げさに「日本の工業をやりたい」なんていった。それじゃ問題をつかんだことにならないからといって、いろいろ考えて、昭和10年の厚い工場統計表を渡された。そのときも、工場統計調査表というのをつくったことを覚えている。当時でも、みんな自分のをプリントして配るんです。そのときに、工場統計調査年表をつくって、その解説をしたという気がします。

伊藤 工場統計ということになれば、やはり当時の論争の中でも、有かな素材だったかと思うんですけれども……。

上杉 だったはずですが、そんなにならなくて、いつできて、生産額別の——品目別の生産額と産業別の生産額とは違うんじゃないとか、全体で一致するのはどうだとか、原料はどうなっているとかいう解説をした。私と限らず、あまり理論的なふうではなかった。

私のころは、ゼミが人数からいって幾らか衰え始めたころで、内海先生のころは1学年の人が10人以上いたんでしょうね。3年と2年だから、もっといたかもしれない。私のときは、2年生は3人しかいなかった。経営統計をやる人がいたり、いろいろで、あんまり議論はなかった。

山田 大変大ざっぱな言い方なんだけれども、ぼくなんかはたから見ている、上杉さんは蜷川統計学の中から育

ってこられたことは事実なんだけれども、そういう方としては、一番蜷川統計学にとらわれていらっしゃらないという印象を、ぼくは受けているんです。

もじっていえば、経統研の中の統計学で、何か「蜷川統計学」学みたいなのが横行している中で、一番とらわれていらっしゃらなかったという印象を受けています。上杉先生も、そう思っているらしいけれども、私からいうと、偉い先生がいてとても不自由だという気がしますね、概念が。そうでなく始まったんなら——まさかマルクス主義から直行してということとはできないけれども、蜷川先生があって、初めて理論的、客観的に考えたんですけれども、このことはなかった方がいいという概念がやっぱりありますね。とらわれていないかどうかかわからないけれども、あまりその枠でやってはいないですね。

広田 工業統計なり、人口統計なり、従来の言い方という統計学の各論といわれますね。総論は、蜷川さん式の統計方法論としての統計学。上杉さんの工業統計なり人口統計なりを論ぜられたものを拝見しますと、もちろん蜷川統計学がないわけじゃないんだけれども、それよりはやっぱりマルクス、レーニンの方が総論で、工業統計なり人口統計なりが各論といったような、これは大ざっぱな言い方ですけども、そういう印象を受けますね。

上杉 そうかもしれないね。

京都に3年いたんですけれども、大徳寺に下宿して、こっちの左翼は、「上杉さん、東京で引っかかってきたし、あんまりさわらない方がいい」というので、ほっといてくれた。だから、時間はかなりあったですね。そのため

に、そういう傾向を生ずる遠因があったかもしれないね。

広田 マルクス主義と統計学とのかかわり合いといいますと、戦前は日本では有沢さん、日本に紹介されたソ連の文献で、スミットの弁証法と統計学。大体において大数法則に、必然性と偶然性の弁証法で塩味をつける。戦後では、ランゲがそれに近いようなものだったと思うのです。現在でも、そういうのがマルクス主義的な統計学だという理解が、一部にあると思います。

上杉さんの場合は、それとは非常に違っていて、ユニークな点といえば、統計方法じゃなくて、統計を基礎概念に据えて、統計を社会の精神的な生産物としてとらえていく。その歴史性、階級性を徹底的に追求した点にあると思うんです。

上杉さんのその後のお仕事で、そういう観点の正しさは、十分実証されていると思いますが、一つ理論的な点で疑問に思うのは、『外国統計調査年表』についてという上杉さんの論文で、統計は社会の上部構造だと規定されているんですね。

上杉 そうという言葉を使ったかな。

広田 使っているんです。上杉さんから聞いた覚えがあると思って、探してみたいんです。上部構造だというふうにとらえると、それを研究する際の主要な課題は、土台にどう奉仕するものであるかを明らかにする、ということになると思うんです。特に初期の上杉さんの「マルクス主義と統計」なんかに代表される統計研究では、やはり統計の階級性の批判、暴露に重点があるということと、統計を上部構造ととらえられた点とが、あるいは幾らか

関係があるんじゃないかと思うんです。

疑問に思うのは、一面的であるにせよ、とにかくも対象を反映するものが統計であるわけですから、だからまた、社会の認識材料にもなり得るわけですから、その統計の最も基本的な性格を上部構造といい切ってよいかということなんです。それは、後で、「経済学と統計」の第1章に出てくる「統計の階級性」という論文で、「マルクス主義と統計」での統計の階級性のとらえ方について、若干の反省をしておりますね。そういうことと関係があるんでしょうか。

上杉 そこは、私もかなりむずかしいところだと思うんです。上部構造だといった気持ちは、社会の土台が生み出したものだという意味で、ただ、ほかの上部構造、宗教とか芸術とかと違う点は、認識結果であると同時に、認識の手段だ。研究結果であると同時に、研究の手段だ。認識手段であるということのために、方法という考え方が出てくるんだと思うんです。社会の生み出したその認識手段を、どういうふうに使おうかという問題も出てくるわけだし。あのとき、戸坂潤が、「研究方法」から「研究手段」に直したですね。認識手段というところで、私は統計をつかまえる。ただ、頭に出てきた手段ではなくて、社会が生み出した手段だというふうを考えているわけです。そこで、一体統計学は独立の科学になり得るのかどうかという点で、またはっきりしない点があります。

広田 そのころだと思いますけれども、スターリンの「マルクス主義と言語学の諸問題」というのが日本に紹介されて、上部構造論が各分野で盛んに行われた時期だったと思うのです。会計学の対象が上部構造だとか……。こ

れは私の解釈ですけれども、上杉さんがそういうふう
考えられたかどうか、それはわかりませんが、大きくい
うと、そういう潮流の中で、上部構造という表現が出て
きたんじゃないかと思うわけです。

上部構造という言葉を使っておられるのは、そこだけ
なんです。後ではみんな――。

上杉 使ったかしらと、いま思うぐらい。

広田 「社会の精神的生産物」だとか「歴史的な生産物、

上杉 内容的には書いているんですね。

広田 そういう言い方をしておられるんで、おそらくそ
れと同じ意味で使われたんでしょうけれども。

上杉 だから、「経済学と統計」の一番初めのところで、
「認識結果であるがゆえに、認識手段になり得る」とい
うことを書いたことがあると思うんですが、そこは考え
の1つの中心というか、自分はそこに依拠しているんだ
――。

広田 あのころ、ソ連や東独や何かで、たとえば言語と
同じように、科学は上部構造であるのか、あるいはそう
でないのかというような議論が、哲学者の間で行われた
ようです。統計について、ストレートにそういう形で議
論があったかどうかは知りませんが、それとの関
連で、上部構造という言葉が使われた点をおもしろく思
いましたけれども。

上杉 それは否定することもないけれども、もう一遍考
えてみる必要のある問題だと思いますね。そこら辺とし
ては、方法論を対象とする学問があるのかというのが、
やっぱり私には疑問に思うんです。

広田 大橋さんは、それを教科目だということで、最終

的には割り切られたわけですね。

上杉 あれもちょっとずるいね。(笑)

広田 つまり教育の便宜上、1つのファッハをつくったんだ。

上杉 そういうことはあるんですね。

広田 それはあると思うんですよ。何でも抽象的な次元の学問論にしてしまわないと気が済まない向きがあるけれども、実際上の必要から、教科目ということはあり得るわけなんで-----。

上杉 人口論なんかでも、そんな考えの人がいるでしょう。人口が対象だとはいわないんだから。

広田 古い本だけれども、たしかシュナッパースタルントという人の戦前よく読まれた「ゾチアル・スタティステーク」という本は、実質科学的部分まで含んだ統計学は1つの教科目(ルールファッハ)なんだという言い方をしていたと記憶しています。教育上、そういう各論的部分、実質的部分が必要なんだという言い方ですね。昔から、みんな苦労したわけです。

上杉 それじゃ済まないわけで、教科目なら、それでは学問としては幾つあるんだということになる。教科目の中に幾つの学問を含んでいるのかという質問が出るでしょう。

山田 あのころ、上部構造の中に経済学を入れているものと、入れてないものと、いろいろあったように記憶しているんですよ。だから、やっぱり上部構造の中に科学をどう考えるかというのがかなり混乱していて、1人1人ユニークな考え方を出してはいたけれども、結局、それは改めて決着がつかないまま来ている問題ですから。

上杉 法律学でも、法律はこうだけれども、法律学はこうだというのがあられるわけでしょう。統計資料はこうなんだが、統計学はこうだという人はあり得るね。

広田 その点と関連するわけですがけれども、ご存じのとおり大屋祐雪さんが、統計学は統計の学であって統計方法の学ではないという、ある意味では理解しやすい、ユニークな説を出しておられるわけなんです。人によっては、上杉さんのお考えと共通する点があると、受け取る人たちもいるわけなんです。何か大屋説についてご意見があれば伺いたいと思います。

上杉 文献目録を見て、一部読まずにいるところがあるように思うんです。大屋さんは、統計は社会が生み出したものだということでしょう。その統計には、統計を生み出す調査過程が影響する。その中で、私の場合と幾らか違うのは、統計調査の主体は基本的に影響を与えるというのがないんじゃないですか。そのときの社会の統計環境とか、統計調査能力とかいうようなことが入っているんでしょけれども。

広田 ばくは、統計が対象を科学的に反映しているかどうかという方法論説の問題の出し方自体を否定するといふところに、大屋説のポイントがあるように思うんです。そうすると、上杉さんの上部構造説とは、大分違うのではないか。

伊藤 大屋さんの場合には、その時代のもろもろの諸環境、階級諸関係の中で、こういう統計方法なり、こういう統計がつくられたということ以て終わり。

上杉 現実を反映しているかどうかは、やっぱり重要で

しょう。問題にならないのかな。

三渚 それは少し大屋君に酷じゃないかという気がする。ぼくにいわせると、大屋君の弟子にはぴたり当てはまるね。親分の方は、彼が模写、反映というときに、やっぱり正しく模写、反映しているか、ゆがんで反映しているかということは、彼の頭の中にはぼくはあるように思う。

広田 その次に、上杉さんは早い時期から今日に至るまで、人口統計、人口問題についてのお仕事がずっとあるわけですね。人口統計、人口問題というのは、上杉さんが特に愛着を持っておられるテーマのような気がするんですが、それはどういう理由からですか。

上杉 人口問題については、「人口過剰論批判」という本を書いたのが出発点ですけれども、それもさっきの近代経済学批判と同じで、よんどころなくわきから来たんです。もっとも私のところに来るについては、私は前々から、人口論というのは一番人を迷わしているのに、それに対して何も答えない、おかしいということをいっていた。読めもしないけれども、ロシア語の本とか、そのほかのものでも、比較的人口問題を集めていました。そこで、「マルクス・レーニン主義研究」という雑誌があまりはやらなくなってきたところに、そういうイデオロギーの批判に、だれか書かなきゃいかぬ。

広田 新マルサス主義批判ですね。

上杉 それで、私のところに来たわけですね。これは大事なことだと思いましたから、取っかかりたんですけれども、それもあんまりは続かなかった。でも、比較的続いている方ですね。統計の方でも、それにかかわりのある

ものとしても読むことが多くなったから、そのことを書いたんです。特に統計の中で、人口統計からやらなきゃならぬと考えたわけじゃないんです。人口問題をやるのに必要だから、やったんですね。

広田 人口問題の方から人口統計の方へおりていかれたわけですね。

上杉 そうですね。おりるということもないけれども、関連のあるものを知っておこう。

広田 確かに人口についての学説は、資本主義擁護イデオロギーの中で最も古くからある、古典的なものだし、最も俗受けのする、普及しているもので、他方また、人口統計というのは、あらゆる統計の中で一番古くからある、最も基礎的な統計ですね。だから、それぞれの国の人口統計史というのは、上杉さんが書いておられるように、それぞれの国の資本主義の歩みを、正確に反映しているものだと思いますけれども、そういう意味で、統計研究の非常に重要なポイントになると思うんです。

上杉 もう一つは、いま社会主義国でも人口過剰があるじゃないかということが、しばらくの間、はやっているわけですね。ことにそれは中国について、中国だって子供一人がいい、それも法律的に強制するという激しいことが起きているわけです。社会主義国はますます合理的に人口を抑制しているじゃないかというので、やっぱりいま、ポイントだと思います。中国は、それで農業政策の失敗を蓋っているわけだ。

それもやらなきゃならないと思っているんですけども、まだちょっと大変ですね。幾らかそういうことを研究するわれわれの立場の人が、ふえてきているんじゃない

いかと思いますけれども、だれということはよく知らない。そういう意味で、人口統計は大事だと思います。

広田 「婦人通信」(1974年9月号)に、「子供は二人までへの疑問」というのを書いておられますね。

上杉 それはひどくはやって、新日本婦人がいった人で、書いたんです。そうしたら、進歩派の奥さんが、いままで子供に「子供を産み過ぎた」といって責められていたけれども、これでスーッとしたなんていっていた。(笑)

各個人が産むか産まないかということと、社会で人口が過剰かどうかというのと全然別なのに、そういう意識の論文や本が大量的に出てくる。だから、これはますますやらなきゃいけないとは思っているんです。

三渚 いま、急速な高齢化社会ということがいわれるときに、人口問題とか、慶応の安川さんが、各個人何人産むかということをもまず前面に出しますね。だから、そういう俗受けする説明は、やっぱり非常に多いんじゃないですか。それに対して、われわれの立場で人口論をやっている人がいるんじゃないかとおっしゃったけれども、いるのかな。いないんじゃないか。やっぱり人口問題とか人口統計をやる人は、岡崎文規さんとか、大きくいえばああいう系統の人が-----。

上杉 社会学か何かにいるんじゃないかと思いますがけれども、若い人で、名前は覚えなくても。

山田 広田さんが、人口論というのは一番古い弁護論のイデオロギーだし、人口統計が一番古い統計だといわれたんだけど、ばくは別の意味で、人口というのは自然現象と社会現象のいわば重なり合っている領域で、社

会科学を社会科学として正面から扱うためには、どう問題を扱うべきかということの議論としては、人口論はそういう意味でまた基本だろうと思うんです。

ぼくは、上杉さんの人口論を読んで教えられたことは、そのことだったですよ。要するに自然現象ではあっても、その自然現象を社会的な側面からとらえると、それは社会現象になる。人口統計というのは、まさにそういう社会現象なんだということを学んだつもりでいるんです。

そういう自然現象と社会現象とのかかわりという点での問題意識というのは、当然おありになったわけですか。

上杉 あります。それは、ほかのときにもありますね。

スモールサンプリングの場合にも、社会と自然の問題がある。

広田 「統計調査の社会性」という論文が、津村さんに対する反批判ですね。

上杉 自然と社会とごたませにするというのが、一番非科学的な根本なんじゃないですか。自然は切り離してはないし、問題になるのは、必ず社会的に問題になるんだけれども、研究対象として法則にどう従うかという点でいえば、厳密に分けるべきものだと思いますね。人口は、全くそうですね。

広田 自然現象だったら、測定も一種のコントロール下に置かなければかれないが、そういうことが可能だけれども、社会的な側面ということになると押さえつけてはかるなんてことはできないですね。津村さんは実測ということをして盛んにいうけれども、単純な米の量なら実測できる。

田沼 この質問の立て方、1と2の間に近経を入れると

いうのだけじゃなくて、いろいろと人口問題をしばると、
 そういう非科学的なものとの闘いが一貫して流れている
 でしょう。なぜ上杉さんはそういうことをいつも考えて
 おられたのか。

上杉 むずかしいな。(笑)

山田 それが本当に流れているあれなんですね。さっき
 ばくが質問したんだけど、上杉さんは本当に社会科学
 学は批判の科学だという姿勢が、一貫してあるんですよ。

上杉 弱いのにやるからいかぬ。

田沼 強い者に突っかかっていくというところが-----。

三渚 おとなしいけれども、闘争的なものね。

上杉 いや、そうでもないでしょうけれども、1つやっ
 ぱりいけないのは、今度もこうやって私の話を聞きに來
 てくださって、光栄な話ですけども、ふだんでも、私
 は協力して何かをすることは、あんまりなかったです。

大橋さんなんか見ていると、本当に偉いと思うのは、
 協力する人がたくさんいて、非常に力になっているでし
 ょう。何も一緒にいるということじゃないけれども、た
 とえば私が人口問題について書いたら、だれかそれにつ
 いて書いてくれる人がいてもいいはずだと、昔、思った
 んです。「戦後日本の人口動態の特質」なんて、議論がた
 くさんある。わからないことをたくさん残して書いてい
 るんだからと思いますけれども、相手は黙っているし……
 ……。

広田 味方はついてこないし。(笑)

上杉 味方ということはないけれども、やるべき部面は
 たくさんあるわけでしょう。

三渚 すぐには後続者がいなくても、長い目で見れば、

大いに種をまいてくださっていれば-----。

上杉 愚痴をいったわけじゃないですよ。

広田 ボスの素質がないんですよ。

山田 それは、ぼくなんかも、やはりそういうことに励まされて、ついていっている人間ですよ。

三瀨 そうじゃなきゃ来ませんから。

上杉 広くいえば、みんな一緒だからいいんですけども、狭い、細かいことで聞きたいところと一緒にやれる人がいると-----。

広田 それはなかなかむずかしいですよ。みんな自主独立が多いから。

上杉 また自主独立でないとやれないですね、相談ばかりしていたんじゃ。

三瀨 いまの田沼さんの質問にも出たわけだけれども、ぼくはこう思うんですよ。やっぱり上杉さんとのいろんな接触が多いわけだけれども、学問上のこととか、そうじゃないことでも、不正に対しては非常に敏感というか、ぼくがさっき闘争的だといったのはそういうことだ。それが学問の世界でいえば、科学的か非科学的かということであろうし、インチキな分類は社会を隠蔽するとか、不正に対しては許さない。

それは、ぼくは前回欠席したけれども、その前の満州時代のことから伺ったって、相当危険を冒して、毅然とした行動様式があって、それはそのもう一つ前の慎吉先生の、考え方は大いに違うにしても、不正に対しては、今流にいえば突っ張るといいう言い方は大変失礼なんだけれども、主張する。ぼくは、それはずいぶん一貫しているように思うんですよ。上杉さんのおっしゃることを推

測して、そんなことをいうのは不遜だけれども、後半の田沼さんの質問に対して、やっぱり上杉さんから一言伺いたいですね。

田沼 非科学的なものに対しての闘いが、上杉さんの質問の基礎にある。山田さんがいっていたけれども、ぼくらはそういうことを非常に学ぶところが多かっただけけれども、どういうふうに考えて、いつでもそういう問題を提起されているのか。

上杉 味方がくやしがっているようなことを応援するんだ。ソ連に37万もいるなんていえば、腹が立つじゃないですか。そういう式のことはたくさんあるでしょう。本当に皆さんから「マルクス主義と統計」は支持されたわけだけれども、そんなものを書いているとは、自分で知らなかった。でき上がって初めてそのことで、統計研究会の事務局長をしていた井上照丸さんが、すごいなというて励ましてくれたんです。何のことをいっているのかわからなくて、「何ですか」といったら、私の書いた本についてほめてくださった。

それほど用意もなかったし、そのときまでのをもとに書いていただけですけども。自分のしていることについて、あまりよく理解がないんです。ここはこうだから、ここをもっと一生懸命やれとかいってくださると、非常にありがたいですね。

不正ということでは、やっぱり不当なことでくやしがっていることは、一生懸命に解きほぐして、答えなきゃいけないだろうと思っているわけです。

広田 あまり早く結論的部分になると、困るんだけども。(笑)

上杉 だって、そんなところばかりいっちゃうから。

広田 人口統計、工業統計についての統計調査の歴史は、上杉さんのお仕事の中でかなりのウエートを占めていると思うんですが、そういう調査史研究が、経済研究、あるいは統計利用において占める位置、あるいは意義については、どういうふうにお考えになりますか。

上杉 これも、偶然そうなったんだと思うんです。さっきいったように、ゼミに行ったら日本の工場統計表を渡されて、「君がもし日本の工業をやりたいというのなら、これをやれ」ということになったわけです。その後も、卒業して大連に事業調査局というのができて、蜷川先生が局長代理みたいで、岡部さんについて行ったことがあるんです。そこで、関東州工業のことを受け持って、1年やっていました。そこで関東州庁の、満州国全体の工業統計表をやっている人と連絡があったり。

それは1年で終わっちゃって、日本へ帰ってきて、また、当時のことで支那経済慣行調査というのがあって、それのアルバイトで暮らしていたわけです。そこへ行っても支那鉱工業部門を受け持ったわけです。それは業績目録に出ています。あそこの土法炭鉱についてのことを受け持たされた。それも、兵隊に行っちゃって、中途半端になるわけです。

余談をいえば、召集された前の日に、一応原稿はでき上がらしてしまっただんで、それを書留で日本まで送ったんです。書留で送れば日本まで届くなんて考えるのは、当時としては全くバカな話で、潜水艦や飛行機はたくさんあるのに。戦争が終わって2年して日本へ帰ってきて、

そんなものは忘れていたんですね。海の底にあるものと思っていました。

この間、われわれのゼミのOBの雑誌に、蜷川先生の追悼文を書くことになって、いまいったようなことを書いたんです。ちょうど先生が亡くなった後で、書斎を整理する人とOBの追悼号を編集する人と一緒の人で、いまほこりにまみれて整理しているけれども、君のいっているその論文が出てきたというので-----。

そういうので、工業の縁ができちゃったので、特に工業は資本主義の中心だということはもちろんあるけれども、そういうことを深く考えてというよりは-----。

帰ってきたのは、昭和22年の4月でした。そのときに、また戦時中の工業統計表を見ることになって、それで剰余価値率を計算してみようか。どうしてそんなことを思ったかわからないけれども、アディッド・バリュー、「添加価値及び剰余価値率について」という論文というほどもない論文を書いたら、それがまた宇佐美誠次郎と井上晴丸さんの書いた「国家独占資本主義論」という本の中では使ってはいなかったけれども、その前後に-----。

広田 「潮流」に載っていたころ-----？

上杉 それでまた、工業統計の関係をやることになった。その後、その秋に商工省へ入りましたから、商工省の基本統計課に勤めて、そこで工業統計調査を担当することになりました。そこに2年ぐらいいまして、統計といえはこういう統計をやることになってしまったんです。またやってみて、農業統計とか、商業統計とかと比べて、一番正確な方じゃないでしょうか。金融統計なんか、もっとやりいいでしょうけれども、知らなかったし。

そんなわけで、あんまり理論的に工業統計のことを考えて始めたわけじゃありません。結果として見ると、やっぱりそれは正しい順序だったと思いますけれども。

三瀬 上杉さんが商工省で工業統計をやっていたころ、たぶんぼくが統計委員会にいたころだと思うんですけども、本省ですから、工業統計の調査員の指導はなさったんですか。

上杉 行きました。

三瀬 そういうことを通じて、いま工業統計というのは、金融統計なんかに比べれば、精度が高いんじゃないかとおっしゃったけれども、工業統計でも規模の小さいところは相当インチキだ。というのが、自治体の調査員とお話するチャンスで、わりあいあるんです。そうすると、自治体の調査員というのは末端でしょう。いわゆる本省の偉い人とか学者先生は、調査のフィールドを知らないで、大所高所からものをおっしゃる。いまごろの言葉でいえば、調査環境の悪化ということになるんですけども、昔だって、お上の仕事だから正しいことを答えたかもしれないけれども、やっぱりいつだって統計調査はやりづらいものだと思うんですよ。

上杉さんが、自治体に対しては、いわば本省の統計指導という立場におられたときに、そういう問題は出てなかったですか。

上杉 むしろ調査統計部では、私どもを慰労休暇の意味で出してくれたんで、特に業務として大事だと思って出したわけじゃなさそうです。

そのころ30人未満の工場は、90%以上になりますけれども、あやしいじゃないかということで、よく話に出た。

たとえば東京でも、ふろおけをつくっている「工場」へ、当時のことでアメリカ人の課長と一緒に行ったこともあるんです。そうすると、いろんな生産額を何だと聞いても、答えようにも記録がないんですね。アメリカ人が来てびっくりしたのは、鍛冶屋さんまで「工場」で、峠の上に鍛冶屋がノ軒あって、それも調べるのはどういうわけだ、これがファブリックかというようなことはありました。

1年おきにしたらいいとか、小さいところは省けとか、絶えず議論は出ていたけれども、それでやると、翌年うっかりすると予算が取れなくなっちゃうんですね。1年おきに調査やって、分析してという意見は出たけれども、いまでも毎年やっていますね。

三渚 毎年ですよ。調査の周期が問題になっているんですね。

上杉 ある意味では、毎年やるべきかもしれませんね。

三渚 明治42年以来って、通産省がいうものだから。

上杉 私のいたころは、ちょうど正木さんのいたころで、本当にりっぱな局長でした。私なんかあまり協力しなくて、申しわけなかった。正木さんはああいう穏やかな人だから、しかりもしませんでしたけれども。

私のいたころ、むしろ実質的にやれそうだったのは、在庫統計でした。GHQから、隠匿物資、在庫を調べろというようなことはありましたが、私は工業統計だけしかやりませんでした。

三渚 調査員からの苦情といたしますか-----。

上杉 それはあるんですね。

三渚 そういう局面に遭遇なさったことは？

上杉 直接はありません。直接私のところなんかに来たら、同調しても困るし。(笑)

三渚 やめろなんて。

もう一つ伺いたいのは、産業分類ですね。上杉さん、幾つか書いておられる。産業分類は、GHQからカミンズという人が来たでしょう。あのころ、上杉さんは商工省にいらしたと思いますが-----。

上杉 委員会に出ました。

三渚 ばくも、そのころの上杉さんはちょっと記憶があるんです。それで、産業分類についていろいろ問題があって、そのことを上杉さんは書いておられるんだけど、一番最初蜷川ゼミで、工業統計を検討したらどうだといわれて、与えられたときに、規模別とか、いろんな何とか別という分類問題が、当然統計表だから出てくるでしょう。そのときに、産業分類の問題が、蜷川ゼミの若き上杉さんの頭におありになったのかどうか。

上杉 産業分類の記憶は、あんまりないんですよ。規模別、従業員別について話したことはあります。何しろ1時間でやるんですから、共同研究でもないし、そんなに深くやらなかったと思います。

問題なのは、主要事業別生産額と品目別の生産額と違うでしょう。それを違うものだという解説をしたり、そのときに、規模別、従業員数別——当時のことで労働者数別か、それで生産額別がないんです。それはちょっと不思議だと話したかと思います。それ以上深いことは、産業分類のことはあまりいわなかった。

三渚 そうすると、その後の産業分類のいろいろ書かれているもののもとというのは、やっぱり商工省のころに、

50年センサス用の産業分類が、1つのきっかけですか。
 上杉 毎回ではありませんでしたけれども、確かにかなり出ましたから。ただ、あそここの会議は、課長の武内さんもいっていたけれども、何を議論しても、あっちで翻訳してきちゃうと——翻訳のもとを持ってくると——それきりなのね。

三渚 無条件降伏だから。

上杉 カミンスさんというのは、わりにはいい人でした。そう強引なこともなかったけれども。

三渚 枉さんなんかもおられましたね。

上杉 ソギーという人は商品分類。勉強にはなったんですが、あまり系統的に責任を持たされなかったから、あまり系統的にやりませんでした。

三渚 そのころから、産業分類だけじゃないですけども、産業分類のことについて、いろいろ考えたり、書いたりなさるのは、やっぱり商工省と関係ありですね。

上杉 はい。

広田 1962年(37年)6月に、上杉さんからお手紙をいただいて、それが「経済統計学概論」の第1次プランだったんです。たしかこれに対して、大変未熟な、偉そうな意見を書いたんです。資料②が6月で、次の③の方は、ぼくは日付を書いてなかったんですが、上杉さんのお手紙で、「この夏はこの仕事に没頭するつもりです」とありますから、その後間もなくして来たものだと思うんです。
 上杉 没頭しなかったんだな。(笑)

広田 7月か8月だろうと思うんです。これは謄写紙で書いたものですから、あっちこっちに送られたんだと思

うんですが。

上杉 大橋君に出したんだ。

広田 内海さんにも送られたんじゃないかと思いますが。

上杉 内海さんは見たんだな。そうしたら、これはむずかしいな、できないだろうって。

広田 「同感ですが」なんて、上杉さん、自分で書いている。

そのころ、上杉さんが、概論を書くために、どういうことを体系の柱に持ってくるか、何を総論に持ってきて、何を各論に持ってくるかという編別構成を考えられた、その1つの歴史的な材料だと思うんですけども、いまごろになってもどうでしょう。

上杉 やっぱり資料(2)の方が、自分で考えて書いた方だと思いますね。資料(3)の方は、ふろしきを広げてあるけれども、こういうふうには、私には書けないんじゃないですか。資料(2)の方が、直接自分の考えの主張を出しているんじゃないですか。

広田 ばくもそう思います。当時の上杉さんのお考えが、ストレートに出ていますね。まず「経済統計指標の性質」というところから、始まってくるわけですから。

上杉 それは何のためにそう書くかというと、経済研究における統計の意義という意味で、位置があるんですね。あとは、それに幾らか関連のあることを書いたんですけども、六以後は、そのときに問題になるものを挙げてあるわけです。

広田 各論的なものですね。

上杉 概論とか総論というのをどう書くべきかというのはむずかしいですけども、今度豊田さんが「経済統計」

に書いてあります。いまでもそうだけれども、工業統計、農業統計、金融統計というふうに、ひっくるめて全部にわたることはできないですね。そうすると、ペトロフの本(「経済統計学教程」)みたいに、あれが1人でできれば大したものですが。私はむしろ、経済統計の中で数量とはどういうものであるとか、数量と価額との関係とか、発展のテンポをどうするとか、そういうどの統計部門にも通ずる特殊な問題があって、それを書くべきだと思っているんです。ずいぶん古く、何年になるんだろう。

広田 約20年前ですね。

上杉 だから、これはちょっと覚えていなかったですね。

広田 大体この第1次案の方は、「経済学と統計」なんかの編別と同じですね、この五ぐらいまでは。

上杉 これなら、まだ力があれば取っかかっていくということもあるだろうけれども、次の方はちょっと無理ですね。

広田 やっぱりいろんな人からの意見が来て、それをそのまま、なるほどもっともだで受け入れて、ちょっとこれはだれが見ても、できそうにないところがある。

上杉 概論とか総論といっても、みんな同じようなわけにいかないでしょうね。書く人によって、全部にわたらなくてもいいんだ。藤本幸太郎先生の「経済統計」か何かでも、例に挙がってくるのは貿易とか、商業統計とか。

広田 1人の人が各部門に通ずることは、どだい不可能でしょうね。

上杉 各論的な統計では、神戸の柴田さんの「貿易統計論」とか、ああいう特殊なものがやっぱり後まで残る値

打ちのあるものになると思います。人口統計は、だれが残るだろう。

広田 この第1次案でも、第2次案でも、特徴的なのは、最初に、「経済統計学の対象」というのが出てくる。ちょっと前ですけれども、ソ連の統計学論争で、ある段階以後、これからは統計学の対象と方法を明らかにすべきだということで、みんなが統計学の対象は何かと議論したことがありましたね。それを受けて、上杉さんなりに、経済統計学の対象をここで書こうとされたんだと思う。

上杉 37年というと、もう東経大に来ていたんですね。

広田 そうです。34年に来られたんですから、来て間もなくですね。

上杉 これ、無責任なことを書いたものだね。

広田 それで比較研究という意味で、一番新しい1971年5月の「経済」という雑誌に、「統計学を学ぶために」を、これは全く学生向きの入門ですけれども、お書きになって、これは非常によくまとまっていると思ったんです。私が後、やっぱり同じことを書かされたときに、これを大いに参考にしました。

ここでは、上杉さんの特徴はもちろん出ているわけですが、資料(4)に書きましたように、大体蜷川統計学的な構成になっているんです。これは、私が読んでの解釈ですが、最初が統計学の学問論で、統計学には数理統計学と社会科学としての統計学があってという、それぞれの学問の性格を述べて、それから統計学史。

2番目に、その系列に属する議論ですけれども、特に大きな問題として、ソ連の統計学論争がある。

3番目に、これは大体忠実な蜷川さんの2つの集団論、それを基礎にした統計方法とは何かという規定が出てくるんです。

4番目に、経済研究における統計の意義というので、「経済学と統計」に載せられた論文を短くしたようなものの。

そして最後に、統計を利用するための前提としての統計の吟味、批判の必要ということが出てくるんです。非常に読みやすいものになっています。

上杉 短くするのがなかなか大変でしたけれども。

広田 つまり、最初に一般的な方法論が来て、経済を研究する場合に、それがどういう意義を持っているのか。

そのためには、個々の統計材料を吟味、批判しなけりゃならないという構成になっているんです。

この前のプランを見てみますと、むしろ5から始めようとされた感じがするんです。

上杉 それは幾らか初歩的に、普通ぶつかるところから書こうとしたんだと思います。

広田 やっぱり入門ということを考えてやられたんでしょね。

上杉 どっちがいいというのは、その場合によるんじゃないですか。

広田 特に経済統計学という場合と、統計学という場合とでは、やはり重点の置き方が違ってきますから。根本的には同じものであっても。

上杉 経済統計学のことを意識の中心に置いているんですけども、「統計学を学ぶために」という以上は、丸山さんじゃないけれども、社会性があるから、統計学一般

について普通いわれていることを順に書いたんです。

広田 最後になりますけれども、50年代に、「マルクス主義と統計」が51年でしたか、それに続いて、総評の調査部の「統計の闘い」や何か、政府統計批判というのが、一つの潮流というほどではありませんが、盛り上がった時期があったわけですね。当時も、これについてはいろいろな意見があったわけですねけれども、それについて、もしご意見があれば伺いたいんです。

最近、伊藤君もそのメンバーであられる統計指標研究会の諸君が、ずっと詳しく50年代の統計批判を総括されて、あちらこちらに書いておられるわけですね。上杉さんも、前に「社会科学としての統計」の中で、その総括についてのコメントを書いておられますけれども、何しろ簡単なコメントなので、もしよければ、もう一遍突っ込んだご意見を伺いたいんです。

岩井君が書いたものですが、資料(6)としてあります。その前に、総評の「統計の闘い」に対する書評が、「エコノミスト」に出て、ぼくは読んだことは読んだんですが、もう一度探してみたら、やっぱりありまして、なつかしいからコピーをとってきたわけですね。

上杉 私は初めてだった、知らなかった。

広田 田沼君が、「経済」のシンポジウムで、「統計ニヒリズム」といわれたといっておられるけれども、「インテリ・ニヒリズム」といわれたんだ。(笑)

「統計の闘い」については、まず役所側、経済企画庁で反論を出しました。それから大阪府立経済研究所の竹内正己さんのコメントが、やはりパンフになっていまし

て-----。

上杉 満鉄にいた方で、経統研の会員でしたね。

広田 その後、それを敷衍したものを、「統計学」の創刊号に載せておられます。労働省の人たちと「統計の関い」について話した記憶はあるんだけど、それは印刷物にはなっていないのかな。統計指標研究会の諸君の総括というのは-----。

上杉 総括のときには私も出ていたんだ。私は非常に申しわけなかったけれども、あのころ非常に調子が悪かったらしくて、座談会で人の話をよく聞いていられなかったんです。それでおそらく、おっしゃっていることと違った答えをしたんじゃないかなかったですか。

田沼 いや、ずいぶん発言なさっていましたよ。

上杉 発言したけれども-----。

広田 あのときのことはどうだというふうな発言はあまりなくて、むしろやはり現在の統計をどう見るべきかというようなことの方が多かった。もちろん「社会科学としての統計」のこの岩井論文の次に、上杉さんのコメントがあるわけですが。

上杉 インテリ・ニヒリズムということについていえば、東大の農学部の人たちは、青木文庫のときにかなり問題にしたんですね。2つに分かれたらしいです。一応読んで研究すべきだということ、こんなものはないということ。その中で、宮村光重という人は、かなり長い批評の手紙をくださったんです。それは、私が中野の療養所に入っていたときに、近所の部屋にいた人の夫になった人が来て、その話をしてくれた。

農学部とは非常に縁があって、青木文庫ができたとき

に、私は近藤先生の研究室に行っただけです。のん気というか、近藤先生のことを必要以上に少しひどく書いてしまった。けれども、できましたのでといったら、じっと見ておられた。その後、青木で、図書新聞に書評を書いていただくのに、どういう人がいいでしょうということから、近藤先生に書いていただいたらいいだろう。近藤先生は、それもいいけれども、どれもこれも統計はダメだを書いてあるんで、気になるという意味のことを書いて、つまりニヒリズムについての批判をされました。公然とした印刷物で何とかニヒリズムといわれたのは、それ一つしか知らないですけども、代表したんでしょうね。

広田 農学部の人たちでしょうか。

上杉 農経の人です。わりに丁寧にいろんな人が読んでくださったです。そこにも、ニヒリズムという気持ちは出ていたね。

広田 そのころ、近藤さんが中心になりまして、総合研究みたいなことをやっていたんですね。ぼくもそれで末席に参加させてもらったわけですが、帰りに近藤さんが、作報のこと、作報にある意味で協力をして、隠し田をなくして、裸になって、初めて本当の農民闘争ができるんだというのが、伊藤律の理論でしょう。そのころはうまくやれたんだけど、その後、国際派が強くなってダメになったというようなことをいわれたのを覚えています。

上杉 伊藤律なんかについての反対派がいて、その人が「あなたの作報についての章をリプリントしていいか」「どうぞ、結構です」といった。ただし、この箇所は除くとか指定されて……。わりに農民組合のような団体からお

礼が来たり、作報はやっぱりちょっと問題だったんですね。私も、いまになってはよくわかりませんが、そのときは、あのとおりに思っていたから、あれしたんです。

田沼 福島要一さんが課長をしているときでしたね。

上杉 そうそう。晴丸さんもまだいたかな。

田沼 いましたね。

広田 いまいった近藤さんを中心とする研究会には、福島要一さんはよく来ておられた。常連のメンバーだったですね。

田沼 上杉さんは、農業問題は、やっぱり朝野さんの影響を強く受けておられますか。

上杉 朝野さんとは違っちゃったわけ、青木文庫は。強く受けているはずだけれども、あまり受けていない。

広田 朝野さんも、むしろ隠し田をかなぐり捨ててというような考えだったんですか。

上杉 積極的に聞いたことはないですけども、朝野さんは私が本を書いていたことを知っていたから、「上杉君は、うっかり何かいうと書くのが遅くなるといけないから、いわない」といって、何もいわなかった。

山田 「マルクス主義と統計」は、非常に新鮮な刺激を与えた本だったですね。ぼくも学生のころ、あれでゼミナールの中で研究会を、そば屋の2階でかなり長期的に持って、それとは別に、ぼくは寺尾さんのゼミを破門になったわけだけれども、寺尾さんも破門にして、ちょっと後味が悪い感情を持っていたらしい。「マルクス主義と統計」の研究会を、別にゼミの中でやっていたことが後でわかって、寺尾さんが、やっぱり破門にしてよかった

と確信されたという話を後で聞いた。(笑)

上杉 破門材料だったの。

山田 非常に新鮮で-----。

広田 賛成であるか反対であるかは別として、統計にかかわっている人がみんな気にして、ちょっと引用した。

津村さんも引用したし。統計の階級性を否定できないわけだから。けれども、階級性を知るだけでは出発点にすぎない。その次が大事なんだ、誤差をどうコントロールするかというふうにして、否定していくわけですね。

上杉 「統計学へのいざない」といったっけ。

広田 そうそう。今度、読み返してみました。

田沼 「マルクス主義と統計」で、和合さんでしたか、グラフ。上杉さんは、あのころグラフ化というのを重視しておられましたね。

上杉 ええ、どういうわけだか。

田沼 大変強調しておられたという気がする。あれは、前からそういう考えですか。

上杉 ぜひなきやならぬとまでは思わなかったと思いますが、ああいうものがあることを、みんなが知っておく方がいいと思いました。和合君には幾らか気の毒をした。ラディカルなものに、利用者に和合君の名前を挙げたから。田沼君の名前さえ挙げずにいたけれども、校正が終わったところに、世論調査のところで田沼君の名前を挙げた。実際には、田沼君に大いに世話になったんだけど。あのグラフ、入れておいてよかった。もっといい例があれば、なおよかったです。

山田 ニヒリズムといわれるほど、全面的な対決姿勢のものでなければ、また意味がないわけですね。

上杉 2つあったということは、ニヒリズムだということじゃないでしょう。いろんな面があったんです。全体としてどっちが主だということの方が、大事だと思う。

田沼 ニヒリズムどころか、楽観主義もいいところだったかもしれない。

上杉 いまになると、もう直せないんですよ。翻訳なんか、レーニン全集ないころですから、古い、かなり危なっかしい-----。

田沼 直接見ておられましたね。ロシア語で見ておられたのか-----。

上杉 見ていたのもあったんだ。

田沼 21号館に借りに行ったのを覚えている。

上杉 それから私が戦時中の訳文を、何も見ないで日本訳に直しちゃうんで、田沼君がびっくりしていたことがある。どうとも意味のとれない訳文があって、こう間違えるらしいと。そういう点では、少し良心に欠けるところがあった。

山田 レーニンの原文はお持ちだったんですか。

上杉 なかった。ドイツ語はあったけれども。

山田 スボルニクという、あれしかなかったんですね。ところが、それをいうんだけど、その現物を持っているという人は、いろんな人に聞いてみても、ほとんどぼくは見なかった。(笑)

上杉 あれは、何で使ったんだろう。

山田 あのころは、レーニンのものはみんな「レニンスキー・スボルニク」と書いてあったですね。

田沼 われわれの周りでは、非常に国際的な視野で書かれたという印象が、ぼくはものすごく強かった。つまり、

資本主義国のいろんな例をわりあい入れておられたでしょう。印象深かったですね。

上杉 自分で書いていて、おもしろかったのは、ゼムストボです。やっぱり書いて、自分なりにおもしろいところがあるんですね。

田沼 「ゼムストボ統計家について」という教養講座を、あれ、録音とおきゃよかったですね。当時はとれな

いが。
上杉 工業統計もやらずに、毎週そんなことばかりしゃべっていた。

田沼 トルストイのモスクワの国勢調査。

上杉 あれ、今度調べたら、「農林統計調査」に出ているね。農家の階層区分をトルストイはどういうふうに分けたか。

田沼 チューホフの「サハリン紀行」だとか、博学な人が世の中にはいると思ってびっくりした。調査主体のこと。チューホフがカラフトへ行っただけでも、答えてもらえない。

上杉 お医者さんだったときね。

こっちはいまからもう30年も前だから、わりに元気だったから、いろんなものがおもしろくてね。

広田 大学の先生にならない方が、いい仕事ができるんだね。(笑) 飯は食えないけれども。

上杉 あっちがレッドパーズになって、ちょうどひまだったんだね。京都府知事の選挙があっただけで、あと、何にもなかったから。農林統計協会にいたんです。

広田 大学に入ると、どうしても講義というのを意識せざるを得なくなるでしょう。そうすると、何かほかと違

う体系をつくらなくちゃいけないような気持ちになっちゃって。

上杉 概論とか総論というのをやるのは、間違いね。

広田 非常な苦痛ですね。

山田 編別構成の問題に関連してなんだけれども、「統計学の対象と方法」をつくっていたころ、上杉さんを交えて何か研究会をやっていましたね。

上杉 何回かやったね。

山田 あのときに、上杉さんが、かなり確信を持ってプロシコを支持されていた。だから、あのときにすでにぼくは、上杉さんの統計学についての考え方は、かなりまとまっていられるんだなという印象を受けたのを覚えていますよ。

上杉 プロシコはよかったものね。

山田 よかった。(笑)

広田 そうすると、「序 統計学の対象」とあるわけで、第1章が統計指標になっている。統計学の対象は統計指標だという趣旨のことを書かれるおつもりだったんでしょか。統計は基礎概念だという言い方は、あっちこっちでしておられるわけですが、対象はというようなことはないわけですが。

上杉 そこまで——でも、書くんでしょね。

広田 あのころは、統計学の対象は統計だという言い方だったんじゃないかという気がするけれども。

山田 そうですよ。ぼくも覚えている。

上杉 安藤さんが支持してくれたのは、「地質学の対象は地質である。そのように……」と書いたら、「そうだ、これだ」といって。安藤さんは、いまでもところどころそ

ういうふうにいっているんじゃない？

広田 それに対しては、米沢さんの「経済統計学の新展開」の最初のところに、統計が統計学の対象だというのはおかしいという批判が、名前を挙げないで出ています。だけど、はっきり統計が統計学の対象だと書かれたものはないですね。いろいろ探してみた。

上杉 私が？用心しちゃったんだね。

山田 やっぱり経済学の対象は経済だということと似ていて、間違いではないけれども、それでいいかという疑問は残りますね。

上杉 大屋さんはどう思っておられるか、いつか報告のときに、私の説は私だけじゃなくて、蜷川先生の高弟——と書いてあるけれども——にも、同調者はいる。だれのことをいったかわかりませんけれども。大体見方として同じと思っていただけるんじゃないかしら。

広田 そうでしょう。

上杉 そこは、私にしてもむずかしいですよ。

広田 いまは、そう思っているかどうかわかりませんね。大屋さんとは、古くから個人的につき合って、統計学の対象は統計じゃないか、どうも京都学派はおかしいんじゃないかというような話をしてきました。そして大屋さんの方は、それをずっと独自に発展させた。そういう方向に発展させることには、ぼくは最初から批判的で、それでは歴史的相対主義みたいになっちゃうんじゃないかというようなことを発言して、松川さんから、おまえはだれの報告にもみんな発言するなといわれた。(笑) まだ元気のいいころでした。

田沼 大屋さんは、若いころに、「統計の闘い」を支持す

る批評を、何かに書いてくださった。

広田 経済学会連合の出した「経済学の動向」というのがありますが、あれの「社会統計」という項目を書いて、本当に経統研の立場に立って、ずっと「統計の闘い」も「マルクス主義と統計」も紹介しておられます。

三瀬 今度は第2集をぼくが書いているんだけど、やっぱり経統研の宣伝が多過ぎるかなと思って-----。

上杉さんは経統研の例会、総会にもずいぶんがんばって出てくださっているんですけども、総会や例会を通じて、いまの経統研というものについて。

つまり上杉さんは、経統研ができるときの一番最初のころから、いろんな意味で重要な存在だったわけですけども、経統研の会員というのは、当然のことながら、どんどんふえていきますね。その中で、いろんな考えの人が入ってくる。けれども、経統研が経統研たるゆえんというものがやっぱりなきゃ、日本統計学会と違うんだからということ、当然のことですね。

その中で、統計を使って日本経済の現状分析をするときに、SNAの問題は避けて通れないんですね。これは本当に大変な勢いで、いま流行しているわけでしょう。そういうときに、経統研のやるべき仕事の中に、SNA分析、あるいは批判を、どういうふうに位置づけられるのかなという気がするんです。

かつて広田さんなんか、国民所得の文献集をつくったり、もちろん国民所得の研究もされているんだけど、あれと、いまのSNAに対する経統研の取り組みとは、ずいぶん違うように思う。ぼくは、国民所得もSNAも素人だから、感じの面もあるけれども、1つだけ、

そういうことをぼくがこのごろ考えているのは、結局、東京都の生計費指数をちょっとやってやめちゃったでしよう。あれの批判をめぐる一橋の人たちの動きがあるんですけれども、それを見ていると、向こうはSNAのフレームワークで当然批判をぶつけてくる。それに対して、生計費指数という非常に狭い範囲のことですけれども、批判するときに、局限された分野だが、問題点は非常に明確なように、ぼくは感じたんです。

ところが、SNA的手法は、物価指数だけでなく、もっといろんな分野に入っているわけで、自治体の統計にも、企画庁や行政管理庁の指導で、SNA的手法が相当浸透しているわけです。そのために、統計体系が整備されるという側面もあるし、全面的にそれが間違いだということとは、もちろんいえないんですけれども、そういう政府の統計のフレーム、SNA体系というものがあまして、それは国際比較性もそれなりに大いにあるわけだが、それが自治体まで浸透していく中で、やはり経統研、あるいは経統研の個々のメンバーは、いやでもおうでも、それに関連を持つ側面が多いと思うんです。

それが経統研にとって、どういう意味というか、経統研のメンバーの研究と、これからどういうふうにかかわり合っていくのかなということが、興味がある。もう少しいえば、これでいいのか。それは少し言い過ぎですけれども、そういう問題を、ぼくはSNAを知らないなりにですが、ちょっと考えているんです。

上杉 何か問題だなという感じはしているんです。例会でも、2～3年の間に3回ぐらい出たかな。それは統計学と限らず、他の経済学界でも、同じようなことが起き

得る状態じゃないですか。そこはやっぱり大事なことで、
とは思います。

経統研でいえば、やっぱり運営委員会で、だれでも入
るというものじゃないでしょう、一定の条件で会則に従
って入る。やっぱりよく議論することしかないんじゃない
ですか。

三猪 結局、そういうことだと思いますね。

上杉 私もよく知らないけれども、やっぱり非常に大事
だ。この問題を解決しておかないといけないんじゃない
でしょうか。

三猪 容易には解決しないと思うんですけども、やっ
ぱり相当大きな問題じゃないかという気がするんです。
経統研は組織体といっても、個々の会員の研究活動です
から。

広田 数理統計学批判をやる場合には、蜷川さんの2つ
の集団論は、かなり有効な武器になる。けれども、経済
統計ということになると、ブルジョア統計の組織化、体
系化は、戦後30年ですべて進んできたと思うんです。し
かも、それは国際的なつながりを持っていますから、か
なり強力です。

やはり、そこに経済統計学の問題があると思うんだけ
れども、SNAというものは、近経の側からの統計的な
経済像なんですよ。基礎統計は、むしろそれに合わせ
てつくっていく。

そうすると、結局、われわれの方では、個々の統計批
判はもちろん重要だし、基礎統計の重要性の強調は、一
定の消極的な批判の意味を持つとは思いますが、
むしろ積極的には統計指標体系ですね。

上杉 全体のね。

広田 そういうものを対置していくのではないと、積極的な対応にはならないように思う。個々の点で、たとえば雇用者の概念がおかしいというような批判は、大体いままですり尽くしているわけです。SNAの描く経済像は、一般に人間の生活を捨象したところに成り立つ経済像で、根本的には、資本の論理だと思うんですね。資本の描く経済像に対して、やっぱりそうでないものを対置することが必要だと思いますね。

上杉さんから、統計指標の体系をあれしなくちゃいかぬという話を聞いた記憶は、ずいぶん古くからあります。今度、伊藤君たちの統計指標研究会がやられた「日本経済の分析」という仕事は、やはりマルクス主義の立場に立って、1つの統計指標の体系を指向するものだったと思います。ああいうものとして初めて、SNAと同じ次元で対決できるんですね。集団論だけでは、とてもSNAとけんかにはならない。

上杉 やっぱりマルクス主義が直接出ていかないかね。

広田 そうなんです。それから経済分析の方法が出ていかない。

上杉 それは大変だ。

広田 大変なんです。

どうも長い間ありがとうございました。